

オリジナルTS闇深勘違
いモノ ボツ集

キヨ@ハーメルン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボツ作品集。全てエタってますのであしからず。

目次

魔女モノ	1	人外モノ	121
在りし日の語らい	1	人外モノ	121
第一話	5	魔法少女モノ	136
第二話	16	プロローグ	136
第三話	28	掲示板	143
第四話	41	掲示板	167
第五話	69	掲示板	196
閑話	56	宇宙モノ	209
暗殺者モノ	77	ファンタジー×SFモノ	209
魔王モノ	82	悪役令嬢モノ	219
		最強の悪魔	219
		冒険者モノ	227
		冒険者モノ	227

怪物モノ

バケモノの記憶

246

VRモノ

VR×電子生命体

256

架空原作TS闇深勘違い学園モノ プロ

トタイプ

最強TS怪物少女は殺されたい

271

図書館と死の魔女

301

勇者のお師匠様!

322

魔女と呼ばれた少女

335

魔女と呼ばれた少女

349

魔女と呼ばれた少女

359

魔女と呼ばれた少女

4

370

魔女と呼ばれた少女

5

375

魔女モノ

在りし日の語り

——魔女。

クロ。お前もこの地に来たのなら、その者達の名前くらい聞いた事があるじゃろう？
……なに？ 聞いた事がない？ 全く、世間知らずな小娘め。これだからお主は……
なんじゃ、師匠に言われたくはないとは？ それはどういう意味じゃ!? ええい、撫で
まわすでないわ！ 闇に沈めるぞ!?

——んん、全く、お主といると疲れて仕方がない。なに？ 魔女とは結局何者か、だ
と？

ふむ……そうじゃな。魔女は世界の裏側で生きる、ワシらの総称じゃ。

くふふ、どうじゃ？ ワシが魔女で驚いたか？ 分かつたら今後は確りと敬う様に
……なんじゃ、その可哀想なモノを見るような目は。ええい！ 撫でようとするでない
！ なに、師匠が小さくて可愛いのが悪い？ ……お、お主、よりにもよつてワシのせ
いにするか!?! くうつ、こんな事ならもう少し肉体が成長してから魔女になるのであつ
たわ……そうすればこんなチンチクリンではなくナイスバデーだったに違いないに

………ん？ 魔女が何なのかイマイチ分からない？

——そうじゃな。そろそろ良からう。

よいか、魔女というのは世間では悪だと言われておる。火は人を焼き、水は人を飲み込み、土は人を押し潰し、風は人を切り刻む……とな。特に闇の魔女など恐ろしさのあまり魔王と呼ばれる事もある程じゃ。

しかし、それは違う。それは魔女の怒りを買った愚か者の末路が誇張されただけに過ぎぬ。魔女とは本来……守護者じゃ。人々の、あるいは自然の、巡り巡っては星の守護者。それが魔女じゃ。

魔女は人を守り、自然を守り、星を守る存在なのじゃよ。現に火の魔女は敵を焼く事で人を守るし、風も敵を切る事で自然を守っておる。土なんぞその場にいるだけで自然が安定する程じゃ。……魔女が悪と言われるのは、守る対象に、敵の対象に、人も獣も含まれているからなのじゃよ。

ん？ ワシは何の魔女で、何を守っておるか、だと？ フツ、ひよつ子に言える話では……なんじゃ、その憐れなモノを見るような目は。もしやお主、ワシが働いていないとでも言うつもりか……？

ふ、ふふふ……よからう。ならば言うてやる。驚け！ ワシこそがこの星の守護者にして魔王！ 闇の魔女である！

くふふ、どうじゃ？ 驚いたか？ ……なんじゃ、その可哀なモノを見るような目は？ う、嘘ではないぞ!! ワシはちゃんとした闇の魔女じゃぞ!! 星の守護者ぞ!! ええい、撫でまわすでないわ!

くつ、百年以上生きて来たがお主の様な奴は始めてじゃ……ああ、こんな事ならもう少し成長してから魔女になるんじやつたのう。そうすればお主の様な小娘に撫でられるチンチクリンではなく、撫でまわしてやるナイスバデーなお姉さんになれていたらうに……なに？ 師匠はそのままいい？ ……複雑な言葉じゃな。全く。

まあ、ともかく今は『魔女は世間では悪だが、実際は純粋な守護者である』という事が分かっておけばよいぞ。それ以上は……今は知らずともよい。

さあ、お喋りはここまで。修行の続きじゃ。まだ先の話とはいえ、お主には闇の魔女を継いで貰わねばならぬので。それ、ハイポーションの生成か、重力魔法の練習か、好きな方を選ぶと良いぞ？ どちらかで合格点を出したら今日は終いとしようではないか。今日の夕食は豪華じゃぞー？ くふふ。

………

………

………

のう、クロ。

好きに生きていいんじゃないよ？ 何もワシの後を継ぐ必要性は………そうか。そう
じゃな。お主はそういう奴じゃ。そういう奴じゃからワシは、お主を……いや、なん
もない。

クロ。ワシはお主を——

第一話

「――師匠？」

朝の目覚めはいつだって唐突だ。現に懐かしい師匠の声を聞いていたはずなのに、いつの間にか私は一人ぼっちの現実に帰って来ていた。

寝惚けた目をこすりながら辺りをくると見渡せば、目に入るのは年期の入った木の壁や床に、見覚えのある木製の家具や小物類。ああ、間違いなくここは私の自室で、今はベッドの上にいる。つまり先程まで聞いていた声は……

「夢、か……」

当たり前といえば当たり前だ。何せ、私の師匠はもうこの世にいない。闇の魔女だの世界の守護者だの、果てには魔王だの言っておきながらアツサリ闇に還ってしまった。

私を、置いて。

残ったのは師匠の居ないこの家と、無数の遺産と、闇の魔女の称号だけ。

「……起きよう」

ああ、師匠は居ない。だが師匠が残した物はある。特に闇の魔女の称号……つまりは師匠の後を継いだ者、当代の闇の魔女としての役目は果たさなければならぬ。

私はノソノソとベッドから出て、朝の身支度を済ませていく。最早慣れたルーチン。今世でざっと十年、前世も合わせれば倍以上の時間繰り返してきた事だ。寝惚けていても出来る。そうして身支度を済ませていく事数分、私は仕上げに大きな姿見の前に立つ。

そこに移るのは前世とはまるで違う、少女の姿。

「……………」

無表情。そういつていい鏡の少女は今世の私だ。師匠よりも幾らか高い高校生程の身長に、師匠とお揃いの腰近くまで伸びた真っ黒な黒髪と、少し淀み気味の黒目。肌は外に出ないせいかわ健康そうな白で、着ている服は暗色系でまとめられたドレス染みた魔法の衣服だ。確かブラウスとロングスカートというのだったか？ 美少女といつていい見た目と合わさつて、どこぞのお嬢様の様な格好だった。

「……………」

特に誰かと合う訳でもないのハードル低めに、あるいはくぐる様にチュックを済ませ、私は姿見の前から足早に立ち去る。今世の自分の容姿は悪くないが、だからこそあまり長時間見る気にならないのだ。見ていると身体に引つ張られそうに……それこそ、前世で男だった事を忘れそうになるから。

ああ、私は前世では男だった。詳しい事は転生したときには既に忘却していたが、そ

れだけは間違いない。師匠からもそういう事もあると言われた話だ。まあ、何だつて男から女にTSしているのか、なぜ現代日本から魔女なんて存在がいるファンタジー世界に転生したのか、その辺りの回答はいまいち不明瞭なままだが……しかし、私がTS転生してファンタジー世界で魔女をやっているのは確実で、それだけ分かっていければ今の生活には困らないのであまり気にしない事にしている。

いや、勿論TS転生したと分かったときこそ酷く動揺したが、それはまだ師匠が居た頃の話。十年は前の事で、解決済みの話だ。今更ウダウダ言うような事は何も無い。……まあ、時折意識が身体に引っ張られるのには閉口するが。

さて、そんなTS転生して闇の魔女となった私のやることだが……特に無い。確かに闇の魔女としての仕事は重大で、しなければならぬタスクもキツチリあるが、それは毎日しなければならぬ事ではないのだ。

ならば、どうするか？

「じゃあ、始めるか」

私はテクテクとかなり広い家の中を歩き、ある一室へと入る。

中に入るなり私を迎えるのは薬草を由来とする独特のにおいと、安定した魔力の波……代々の闇の魔女が調合室として一室らしい気配だ。

私はその気配を懐かしい物として感じながら、幾つかある大鍋の一つを覗き込む。火

にかけているでもないのにゴボゴボと、まるでマグマの様にたぎる毒々しい紫色の液体……違った。これじゃない。気を取り直してその隣を覗き込めば、薄く青みがかつたすんだ水が並々と入っていた。こっちだ。

「ええと、ポーション瓶ポーション瓶……」

大鍋の中身は中級クラスのポーション。飲むなり、あるいは傷にかけるなりすればたちまちに傷が癒えるというファンタジーな代物だ。そして、出不精な私の主な収入源でもある。

闇の魔女と格好つけてみても仙人にはなれそうもない私にはお金が必要で、闇の魔女としての仕事がないときは大抵ポーションの作成を行い、これを売ってお金に変えているのだ。ちなみにこの鍋一杯のポーションは今日明日にでも出荷しようと思い、そのままた三日が経過した代物である。まだ腐ってない。まだ。とはいえそろそろ隣の毒々しい失敗作みたいになりそうなので、いい加減瓶詰めしようというところだったり。

「あつたあつた。……よつ、と」

ポーション瓶が綺麗に整頓された箱を見つけ、それを近く机の上に置いた私はチョイツと指先を動かす。すると不思議な事に——私からすれば見慣れた光景だが——大鍋の中のポーションが独りでに動きだし、自らポーション瓶の中へと入っていく。正しく魔法の様な光景……まあ、今の私は魔女だからこの程度は楽な物だ。

私は均一に満たされたポーション瓶に蓋をしていきながら、この作業も全て魔法で出来ない物かと自堕落でアホな事を考え……そこでハタと、ポーションの材料が尽きている事に気づく。

「あ……」

ポーションの材料は薬草とすんだ水、そして魔力だ。後者二つはいつでもなるのだが、薬草だけは事前に準備しておかないと面倒くさい。だが、その肝心の薬草が完全に尽きていた。

別に今日明日にでも必要という訳ではないので急ぐ事もないのだが……面倒くさがりな私の事だ。今やらなければ直前までやらないに決まっている。

「取って来るかあ」

ポーション瓶の瓶詰めを終わらせた私はポーション瓶をそのままに、部屋を出て家の外へと向かう。

代々の闇の魔女が違法ともいえる無茶苦茶な増改築を繰り返し、そこかしこに魔法の仕掛けが施されたこの家は無駄に広い。屋敷、そういつてもいいレベルだ。実際廊下は長々と続いており、外に出るのがだんだん面倒くさくなってくる。

——清潔、清浄化の魔法がかかってなければ掃除が面倒だったろうなあ。

そんなどうでもいい事を考えながら、誰も居ない屋敷を歩き続ける事暫し。私はよう

やく広々とした玄関ホールへとたどり着き、何代か前の闇の魔女が集めた美術品を横目にさっさと外へ出る。

一拍。後ろ手に扉を閉める私を歓迎するのはドンヨリとした陰鬱的な闇の魔力だった。酷く暗いコイツは常人なら五分で鬱になるだろう代物だ。もし仮に一時間も浴びようものなら……いや、考えるのはよそう。ロクな話ではない。

私はそんな鬱々とした魔力を肌で感じながら歩き始める。気分はどうかといえ……割りの良い。上機嫌だといってもいいだろう。

何せ私は闇の魔女。この陰鬱とした魔力とは相性が良く、さながら森林浴でもしている気分になれるのだ。……まあ、屋敷の周りは木々に囲まれているとはいえ、それらは枯れているかの如く葉をつけておらず、また生きている生物はいないので、ビジュアル的な森林浴は楽しめないが。

「迷いの森……いや、闇の森か？」

なんならドイツ語辺りに直訳してみれば味が出そうだ。さぞ黒々とした甘酸っぱい味になるだろう——そんな事をつらつらと考えながら足を動かす。その行き先は勿論薬草のある場所だが……こうも枯れ木が立ち並び、薄く霧がかかっているような場所には当然無い。なのでもう少し環境がマシな場所、つまりは森の入り口辺りにまで足を伸ばす必要がある。

一分か、二分か、森の中央にある屋敷からだいぶ歩いた頃、私は自分以外の動く物体に遭遇した。生き物ではない。闇の魔女が居座るこの森は、生物には酷く生きづらい場所なのだから。

「リビンググソード……」

空中にフヨフヨと浮かぶソイツは、生きた剣だ。意識はまるで無く、また無機物であるにも関わらず、アレには生と死の概念がある。正しく生きた剣なのだ。

師匠はリビンググデッドの親戚だろう、なんて言っていたが……悪霊の類いには違いない、また周りの雰囲気にも合致している奴だった。見れば奥の方に盾や槍、果ては鎧までいる。魍魎魍魎の百鬼夜行。そう言うのは大げさだろうか？

「増えたなあ……コイツら」

師匠の代にはこの手の生ける武器を始めとする無機物の悪霊は全く居なかったのだ……私の代になって急激に増え、今やこの森の生息数ナンバーワンだ。正確な数なんて把握していないが、万単位でも何も驚かない程度には見かける。

この不気味な連中に良いところがあるとすれば……滅多に私を攻撃しない事か。

「はいはい、通りますよつと」

現に私がすぐ隣を通つても剣や盾、鎧達はフヨフヨふらふらとするだけで何もしてこない。ともすれば安全だと錯覚しそうになるが、襲ってくる奴もちゃんと？ いるし、

外部から森に入って来た生物に関しては過激なまでに反応する。特に森の外縁部なんて酷い有り様だ。折れた無数の武器、人間を含む生き物の死骸、そしてそれらを啄みに来た野鳥が飛び回る光景は古戦場さながら。……ああ、うん。そんなだからあんまり屋敷の外に、森の外縁部に行きたくないのだ。まあ薬草が自生してる場所は古戦場よりも奥地側にもあるから、そこですませればいいのだが。

そんな事を考えながら枯れ木の間を歩き、生ける武器達を横目に進む事数分。森の景色が変わり始める。といっても見た目には霧が薄くなつた程度だが……しかし、魔力的な事をいえば様変わりしているといつていい変化だ。何せ闇の魔力が薄れ、別の魔力が流入しているのだから。

「んー……こつちだったか？」

森の外縁部近くまで到達した私は、おぼろげな記憶を頼りに薬草が自生してるだろう場所に向かう。

奥地にいる連中よりも幾らか動きの鈍い生ける武器達を横目にしつつ、雑草が生えてきた道をゆつくりと歩き、闇以外の魔力を感じてそちらに向きを微調整……そうして数分歩いたところで霧が晴れて日が差し込んでいる場所が目に入る。よくよく見ればそこらの雑草とは明らかに違う草も自生していた。目当ての薬草だ。

「うん。そこそこでいいか」

魔法でゴソつとやろうと思ったが、ポーションなんかの魔法の液体とは勝手が違うし、かえって面倒くさくなる気がしたので手で収集していく。

モギモギブチブチ。丁寧に、あるいは残虐にも葉っぱだけむしり取っては愛用のベルトポーチの中へと乱雑に放り込む。モギモギブチブチ。何せこの薬草は生命力が凄まじく、根っこが残っていれば再生する類いの奴なので葉っぱだけとっておくのがベストなのだ。今は寂しい姿だが二、三日もすれば元に戻るだろう。モギモギブチブチ。自生していた薬草を次から次へとベルトポーチに放り込んでいく。見た目的には溢れていそうなくらい入れたのだが、このベルトポーチは魔女謹製の魔法の『ふくろ』容量にはまだまだ余裕がある。という訳でモギモギブチキンツ——

「ん…………？」

草むしりの調子でモギモギブチブチしていた私の耳にかん高い音が入った。明らかに草むしり…………ではなく、薬草の採取で出る音ではない。

「気のせい？ いや…………」

キンツ——と、再びかん高い音がする。恐らく、金属音だろう。

そこまで考えて頭に出てくるのは、先程まで無数にすれ違った生ける武器達。あれらはリピングデッドの親戚のくせして、全て金属製だ。まさか？

「……………行ってみるか」

三度鳴ったキンツという金属音を頼りに、音が聞こえた方へと足早に足を進めていく。そうしているうちにも音は激しさを増し、キンキンカンカン凄まじい音を響かせている。十中八九、生ける武器達と誰かが戦闘中なのだろう。

戦闘中。誰かが……いや、人とそれらの武器達が、戦闘中。

別段それは珍しくない。だからこそ森の外縁部に人の死骸が混じった古戦場跡が残されるのだ。しかし、こうして私が出て来たタイミングで戦闘が起こるのは珍しい。確か以前は……どれくらい前だったか？ まあ、記憶が確かなら盗賊崩れが何かを探して森に入ろうとして壊滅させられたはず。あのときは私が来たときには既に古戦場跡地になつていた事と、犠牲者が悪事を成した悪人であり、彼らは闇の魔女由来の品を狙っていたらしい事を、遺留品と残留思念から知つて同情する気も失せたのだが……今回もそうだろうか？ だとしたら野次馬になる気も無い。さっさと帰ろう。もし違ふのであれば……そうだな。様子見、そしてケースバイケースだ。

闇の魔女を頼つて来た客人ならどんな身分だろうと丁寧な歓迎し、闇の魔女由来の品を狙う者なら神だつて許さない。そのときはリビングソードを山ほどけしかけ、それを突破するならこの当代の闇の魔女たる私が直々に相手をしてやろう。即刻闇に沈めてやる。師匠が私にくれたものを誰が渡すものか――

「……………」

黒々とした感情を高ぶらせて闇の魔力を高めていく中、戦闘が行われている場所を見つけた。最初に音が聞こえてから数分が経っているせいか、金属音に空きが出る様になっっているが……間違いあるまい。人影が見える。次いで動きまわる剣と、光を残しながら流れる剣。

私がボサツと眺めている間にも金属音が鳴り響く。見れば縦横無尽に光の軌跡が走り、火花が散る。剣が飛び、人影が動き、剣が走って、閃光が煌めく。それは間違いなく戦いであり、同時にまるで舞いの様でもあった。

しかし、私の目が腐っていないのであれば、あそこで剣を振るっているのは……
「少女？　こんなところにて？」

二度三度と見るが、見間違いではない。生ける武器達と戦っているのは少女だ。白い髪と、そこから見えるケモミミが特徴的な女の子が一人。それも私より年下なのか、中学生程にしか見えない……そんな年若い少女が一人だけ。

私はその予想外の光景見て、いったいどうしたものかと頭を痛めずにはいられなかった。

第二話

予想外。全くの予想外だ。あまりに予想外過ぎて一瞬軽い頭痛がした。

私は危なげなく剣を振るい、光の軌跡を残して生ける武器達を打ち払う少女を木陰から気配を消して窺いながら、いったいどうしたものかと思案する。何せ少女の目的が不明だ。盗賊崩れのように魔女の宝目当てとも思えず、闇の魔女を頼るにしては……闇の魔力を感じない。それどころか少女の持つ魔力は、光の魔力。闇の魔力とは正反対のソレだ。それもかなり強力で、この森の闇の魔力を力づくでレジストして正気を保てるレベルのモノ。恐らく人としてはトップクラスの使い手だろう。こうなつてくると光の魔女に言われて闇の魔女、つまり私を殺しに来たといわれた方が納得出来るレベルに……

——いや、まさか、ソレか？

しかし師匠が言うには光の魔女の席は長らく空いており、会えば喧嘩だが殺し合いにはならない程度の関係性のはず……うん、やはりそれはないだろう。発想が飛躍し過ぎだ。

そうなればもつと無難なところを想像すべきなのだが………思い付かない。何せここ最近この森を訪れた人間の全てが盗賊崩れや欲に溺れた悪人ばかりで、マトモな客

人なんて居なかったのだ。強いて言えば他の魔女が来る事が時たまあるにはあるが……魔女を人間と同族視するのは少々難しく、少なくとも参考には出来まい。価値観が違い過ぎるし。

さてどうしたものかと再度私が思考の海に潜ろうとした、その瞬間。私が隠れている枯れ木にガツとリビングソードが突き刺さった！

バレたのか!? まさか本当に私を殺しに!? そう内心で慌てて、こっそりとあちらの様子を窺えば……こちらに気づいた様子はない。見れば突き刺さったりリビングソードも折れた残骸であり、どうやら斬り飛ばした流れ弾が当たっただけの様だ。胆が冷えた。

しかし、このまま隠れている訳にもいくまい。見たところ今飛んで来たリビングソードが最後の生ける武器達だったようで、戦闘は終了してしまっている。少女は多少疲れているようだが、怪我の類いは見られない。強い光の魔力を持つだけでなく、私が見た通り剣の腕も確かなのだろう。……放っておけば森の深部まで来かねない相手だ。歓迎するにせよ、追い出すにせよ、早めの対応が必要だった。

「——この森に何のご用かな？」

対応を少しだけ悩んだ後、結局私は正面から用件を聞きに行く。ウダウダ考えても答えは出そうにないし、ならば単純明快にやるのが一番だろうと。

悪人であれば戦闘に、客人であれば話し合いを、そう思いながら少女に問い掛ければ――反応は劇的だった。

「っ！ 誰ですか!？」

白い少女は私が問い掛けるなり剣をこちらに向け、誰何の声を上げながらキツと睨み付けてくる。薄暗闇の中でも輝く剣。やはり、敵なのだろうか？

向けられた剣を残念に思いながら、しかしその反応も仕方ないと納得もする。生き物の居ないはずの森で、それも戦闘直後に声を掛けられたのだ、そういう反応にもなるう。見れば少女の紅い瞳は不安に揺れており、実に気まずい。……そうだな、先ずは誰何の声に答えようか。

「誰、か。そう聞かれて返せるような名はないが……世間では魔女と呼ばれている」

「魔女?」

「ああ、魔女だ」

向けた剣を僅かに下ろし、白い少女は怪訝そうに一瞬顔を歪める。ピクピクと動くケモミミと合わせて見れば、こちらの真偽を探っている様にも見えた。

「魔王、ではなく?」

「ん? いや、魔女だ。魔王と呼ばれた事はないな」

「……………」

ピクリピクリと、髪の毛と同じ雪の様に真っ白なケモミミを動かしながら、白い少女は沈黙する。本当なのか、嘘ではないのかと疑っているのだろう。

師匠に誓ってもいいが私は魔王ではない。確かに闇の魔女はその特殊性から魔王と呼ばれる事もあるが、最後に魔王と呼ばれたのはもう十代近く前の闇の魔女で、私も師匠もほぼ無関係だ。関わりなんて同じ闇の魔女という事ぐらい。それで魔王じゃないかと疑われても……その、なんだ、困る。

「……なら、なぜ貴女はこんな場所にいますか?」

「?」 ここが私の家の近くだからだが?」

「こんな場所の近くに家がある?」

「ああ、奥の方に家がある」

私がそう言うなり白い少女は下がっていた剣を再度持ち直して私に向ける。その赤目に宿るは不信の感情。……なにか、不信を持たれる様な事を私は言ったか? 闇の魔法の家はここ数十代変わっていないのだが。

「ここは、人の住める場所ではありません」

「そうだな。おかげで静かに暮らせている」

「……もう一度聞きます。貴女は、何者ですか?」

「?」 魔法だよ。この森に住み、時折ポーションを売って暮らしている魔法だ。今回は

藥草を取りに足を伸ばして、戦闘音を聞いてな。何かと思つてここまで来て……今に至るんだが——」

「……………」

「あ……剣を下ろしてくれないか？ 驚かせたのは謝ろう」

先程も言つた言葉を繰り返して、補足し、少女に伝えるが……白い少女の紅い瞳に宿る不信は晴れない。それどころか悪化している様にも見えた。

——マズイ、このままでは戦闘に発展してしまう。

この少女が何をしに来たのかは未だにサツパリだ。しかし悪人や欲に溺れている様には見えず、殺してしまう気にはなれない。ここは何とかして不信を払いたいが……さて。

「ここは、闇の森です。貴女のような女の子が居るべき場所ではありません」

「いやいや、それを言うならキミの方だろうか？ 闇の魔力の精神干渉をレジストする光の魔力と、リピングソードを軽々退ける剣の腕は確かに凄まじい。だが、キミの方こそ女の子だ。どう見ても私より年下じゃないか。ここに居るべきではないのはキミの方だろう。違うのか？」

「それは、そうかも知れませんが……」

へえ、ここつて外じゃ闇の森とか言われてるのかーとか思いつつ、ツツコミどころの

ある発言に思わず私は思った事をありのままプチ撒ける。

いくら腕に覚えがあつても、この森は生者がいるべき場所ではないのだ。ましてやそれが年頃の、どう見ても中学生以上には見えない女の子とくれば尚更。まあ、エルフなんかは見た目以上という事がままあるが……白い少女のもふもふケモミミは獣人の証。見た目年齢≡実年齢でほぼ間違いあるまい。そう思つてそこを指摘すると白い少女は暫く口ごもつた後、ポツリと溢す。

「私は、勇者ですから……」

自分自身認めていないかのような声。その声に酷く引つ掛かりを覚えたが、私はそれよりも『勇者』という単語に気を取られずにはいられない。

何せ勇者だ。勇氣ある者、あるいは魔王を倒す者。意味合いは色々あるだろうが、この世界における勇者という単語の意味はだいたいその二つだ。師匠から聞いたのだから間違いない。そして師匠はこうも言つていた。

『よいか、クロ。もしお主が勇者と相對するときにあれば十分に注意せよ。……なぜか、じゃと？ なに、簡単な話じゃ。闇の魔女と勇者の關係は必ずどちらかに振れるから。殺し合う程に悪くなるか、親友、あるいは恋人といえる程に良くなるか……このどちらかに必ず振れるのじゃよ』

と、そんな感じに。

だから私はどうしても『勇者』という単語を気にせずにはいられない。そして勇者だと名乗った少女の事も。

白い少女の言葉に嘘は……無いのだろう。剣の腕だけなら兎も角、ここまで強大な光の魔力持つ事は勇者以外では難しい。むしろ勇者だと聞いてなるほどと納得した程だ。……そして、ここに来た目的も少女が勇者ならおおよそ察せる。間違いなく闇の魔女絡みだ。となれば。

「なるほど、勇者だったか。ならついて来るといい。どうやらキミは客人らしいからな」
「え？ 客人……？ あ——ま、待って下さい！」

私は少女に一言声をかけて身をひるがえし、家という名の屋敷へと向かう道を歩きだす。

私が背を向けて隙を見せたせいだろう。背後でホンの一瞬だけ殺気が高まり——しかしすぐに鎮火する。聞こえるのは剣を鞘にしまう音。

どうやらこの勇者ちゃんは優しい気質らしい。あるいは騎士道精神か。どちらにせよ、少女が私に斬りかからなかったのはお互いにとって幸運だったのだろう。少なくとも、私はあの光の軌跡を残す程に鋭く、素早く、そして流れる様な剣技を受けたくはない。間違いなく死ぬるからな。

「待って、待って下さい！ 私が客人というのはどういう事ですか？ そもそも貴女は

「いったい……」

「そのままの意味だよ。キミが勇者であるなら十中八九私の客人だ。それ以上でもそれ以下でもない。そして私が何者かという質問の答えは今まで通りだ。……それとも、信じれないか？」

「それは……」

私が歩幅を合わせた事で、隣合う様に歩く形になった白い少女は考え込む様に沈黙する。恐らく、その頭の中では色々な考えが渦巻いているのだろう。ポイントになる点は勇者、魔王、魔女、死の森と幾つかあるが……どう考えてもロクな話ではない。前世の私なら『取り敢えずセーブしよう』ぐらいは考える話だ。どうかそもそも勇者が闇の魔女の勢力圏内に来る事自体が異例なのだし、まず間違いなく穏やかな話にはならないだろう。

だが、今の勇者は敵でなく客人だ。であるならば歓迎し、もてなさなければならぬ。……決してマトモな人の訪れに歓喜して浮き足だっている訳では無い。無いっただけだ。

——それに……勇者との関係がどちらかに振れるのなら、殺し合いより仲良くなりた

いし。
チラリと横合いにいる白い少女勇者を見る。

肩口まで伸びた雪の様に真っ白な髪、そこから見える同じく純白のピンツとしたケモミミ。戦士のものとは思えない綺麗な白い肌に、それを覆うドレス染みた魔法の衣と最低限の鎧を組み合わせたバトルドレス。そして今は深く思考に沈んでいる紅く輝く瞳……ハツキリ言おう。可愛らしく、それでいて美しい少女だ。勇者よりもお姫様の方が似合うだろう白い少女。そんな彼女と殺し合い？ ごめんこうむる。そんな事をするぐらいなら僅かな身長差をフルに生かし、膝の上に乗せて撫で回す方が遥かに有意義だろう。

とはいえ、このままでは十中八九殺し合いに発展する。何せ彼女は私にこう言った『魔王、ではなく？』と、これは要するに魔王を探しているという事。そして勇者が魔王を探してやる事なんて一つで、悪い事に歴代の閨の魔女の中には魔王と呼ばれた者がいる……後は、もうお察しだ。白い少女が私を魔王だと判断すれば、些細な事で殺し合いが始まるだろう。それだけはなんとしても阻止したい。

——まあ、私は魔王ではないし、悪事を成した覚えもない。すぐに疑いは解けるだろう。

そう考えつつ、ふと思うのはなぜ勇者が魔王を探しているのか？ という疑問。

師匠の話では勇者は常に一人は居るもので、時代が必要としたり代替わりのときは二、三人居ることもあるらしい。だが魔王は違う。常に居るものではない。だから彼ら

勇者が魔王を倒す事を目的とする事はあまりないらしいのだが……白い少女は魔王を探している。普通に考えれば魔王が出たという事なのだろうし、その拠点候補としての陰鬱な森を調べに来たという事なのかも知れないが………何か引つ掛かる。見落し、というよりは………何かのピースが欠けている様な――

「あの……」

「ん？ 何か？」

「貴女は魔女、なのですよね？」

「そうだな。魔女だ」

「それはつまり、あの火の魔女の様な？」

火の魔女。

そう聞かれて思い出すのは師匠の親友であり、また私の友人でもある燃える様な赤い髪の少女の姿だ。常に強気で、自信に満ち、一国を治めている女王としての側面も持つ偉大な魔女。最近は何がスチームパンクになってきて扱いに難儀しているとか言っていたな。

それで、あの赤い少女と私が同列？ それは……

「少し違うな。確かに同じ魔女ではあるが、あの人の様に国を治めている訳でもないし、偉大でもない。私は火の魔女より格下だよ」

「……なるほど。でも、同じ魔女ではある」

「決して同列視は出来ないがな」

思わず苦笑いを溢しながら答える私。その答えが良かったのか、それとも深く考えた結果なのか、白い少女から警戒心が大きく削れているのが見て取れた。どうやら私が魔女だということを信じてくれるらしい。……ただ、それでも警戒心はまだ残っているのか、少女の魔力はいつでも戦闘状態に持っていける様になっているのが感じ取れる。まだ、足りないか——つと、あれは。

「すまない、もう少しこっちに寄ってくれ」

「……なぜですか？」

「いいから」

白い少女の手を取り、それなりに空いていた距離を無理やり詰める。そんな私に彼女はピクリと剣を抜こうとしたが、私の視線の先にあるものに気づいたのか、その手を止めた。

「あれは、リビングウエポン……鎧まで居る。でも、襲ってこない……？」

「私が居るからな。目が無く耳も無く、魔力の波で相手を識別してる奴らは、似たような魔力を持つ私を仲間だと間違えているんだよ。私の近くにいる貴女ごとな」

「似たような、魔力。あれらと？ 貴女が？」

信じられない。そう言わんばかりの白い少女を横目に、生ける武器達の側を通り抜ける。十歩、二十歩と足を進め、私は少女の手を離す。チラリと紅い瞳を覗けば、そこにあるのは消えかけたはずの疑念。

まあ、今のは言い方が悪かったな。まるで私とあれら生ける武器達が同じだーみたいな言い方だし。とはいえ、ああとしか言いようがないけど……補足するならば。

「私は当代の闇の魔女だから、な」

師匠譲りのドヤ顔を決めつつそう言つてのけた私に、白い少女は疑問の表情を返してくる。

……ああ、なるほど。どうやら話し合いよりも先に、お互いの常識を擦り合わせなければならぬようだ。

第三話

「聞いた事がありません」

私がドヤ顔を決めて数分後。白い少女と私は屋敷の応接室で相對するように座っていた。話している内容は——白い少女が妙な覚悟と共に——屋敷に入る前から殆んど変わっていない。闇の魔女についてだ。

「本当に？ 聞いた事がないのか？ 世界の守護者たる闇の魔女も、それを補佐する光の魔女も？」

「はい。闇の魔女も、光の魔女も初耳です。世界の守護者云々も。火の魔女や土の魔女の話は聞いた事がありますが……」

「そうか……」

警戒心を奥底にしまった白い少女の言葉に、私はガツクリと肩を落とす。ああ、認める他ない。彼女は知らなかったのだ。闇の魔女も、光の魔女も。いや、魔女という存在自体に関する知識が希薄だった。森で火の魔女を例に出したのもかろうじて知っていたから……それも現代でいえば『ああ、なんかよくテレビに出てる人ね』ぐらいの感覚だ。これでは私が魔女と言っても信じず、むしろ魔王ではないかと疑うのも仕方ない。

私は自分で入れた紅茶をカップから機嫌悪く飲みながら、どうしたものかと思案する。……そうだな。差し当たり、少女がここに来た目的を確認しよう。

「確認するが、貴女がここに来た理由は上の人間から魔王が居ると聞かされ、それを倒す為に来た……これで間違いはないか？」

「はい。あの人達からここには魔王か、それに準ずる悪魔がいるに違いないと。これを討ち果たし、奪われた財を取り戻せと。森の入り口を見て話に間違いはないのだろうと、そう思ったのですが……」

「ああ、うん、あれはなあ……」

少女の目的はオーソドックスなソレだった。魔王を倒す、それだけ。その為に怪しい場所上の指示で突撃しているらしい。

その点この森は確かに怪しい。薄暗く、陰鬱で、人を潰す程の闇の魔力が渦巻くここは、邪悪な魔王がいても違和感はない。更に彼女は森の外縁部にある、死体が転がる古戦場モドキを見て確信を深めてしまったらしい。ここには魔王か、少なくとも悪魔がいると。……うん、これは仕方ない。私でもアレを見ればそう判断するだろうから。

そして、それら怪しげな事実が私への不信に繋がっているらしい。

「いえ。制御出来るような物ではないと思うので、仕方ないかと。……怪しくは、ありませんが」

「まあ、な」

冗談か、それとも本気なのか、白い少女の咎める様なジト目に私は軽く肩をすくめて答えとする。

声の調子を聞くに、どうやら彼女は私が何者かについては本格的に保留する事にしたらしい。魔王ではない。しかし闇の魔女は聞いた事がない。悪人ではない。しかし怪しい。……そんな感じだろうか？　なんにせよ助かった。殺し合いなんて野蛮な事はしたくないからな。

「否定、しないのですね」

「怪しいのは自覚があるんだよ。闇の魔女だからな。司る属性の関係上、どうしても怪しきは出てしまう。だからこそ、闇の魔女だといえれば納得してくれると思ったのだが……」

「すみません。聞いた事がないので」

「……………」

数年引き込もっていた自覚はある。だからといってここまで知名度が下がるなんて誰が予測出来ようか？　一応最寄りの町ではそれなりに名が通っているのだが……遠方では既に廃れた名らしい。

今後はもう少し外での活動を増やそう。そう思いながら私はお茶請けとして出した

焼き菓子を噛み砕く。別に不機嫌ではない。ああ違うとも。

「それで？」

「えっ、と……う？」

「食わないのか？ こいつは火の国で人気のクッキーらしいぞ。不味くはない。むしろ火の魔女が自慢するだけある品だとおもう。………ああ、毒は入ってない。見れば分かるだろう？」

私だけがバリバリと噛み砕くばかりでは気まずいので、茶も飲まない勇者に菓子を進めておく。勿論毒なんざいれてない。誰がするか。

しかし……そう思っているのは私だけなのか、白い少女の赤い瞳には躊躇がありありと浮かんでいる。なんだ、彼女の中では私は由緒ある闇の魔女ではなく、怪しい小娘のままなのか？ だとしたら実にシヨックな話だ。泣けてくるね。

「お茶の方もだ。入れ方は兎も角、使っている葉は火の魔女が持ってきた奴だから良いやつのはずだぞ？ ……それとも、紅茶と焼き菓子は苦手か？」

「いえ……頂きます」

私の絵踏みを強要するがごときゴリ押しに負けたのか、白い少女は恐る恐る焼き菓子を手を伸ばす。一枚のクッキーをゆっくりつまみ、そのまま口へ運んで——花が咲く。

余程美味しかったのか、白い少女は懸念も疑念も一瞬で放り投げて満面の笑みを浮かべたのだ。それは一瞬の事であったが……我慢しきれないとばかりに二枚目を、あるいは紅茶を飲む度に花が咲いていく。うん、喜んでくれているようで何より。心なしかこちらのクツキーも先程よりも甘く感じれて更に良しだ。

「さ、て……それで、魔王の事だが」

「んっ、あ、ふあい」

「いや、食べながらで良いぞ。うん」

「……いえ、大丈夫です」

少女がつまんだクツキーを口に放り込もうとするタイミングで魔王についての話題を口に出したのだが……狙い通りというべきか、少女はクツキーを噛み砕けないまま返事を返して来た。

それに笑みを返したのが悪かったのか、からかったのがバレたのか、白い少女はクツキーに伸ばしていた手を止めてしまう。どうやら真面目な子らしい。目線はクツキーに釘付けだが。

「そうか？ では……んぐ。ふえ、だ。私は魔王は知らない。そちらが信じるかどうかは別だが、それだけは確かだ」

「はい」

「だが、それで納得して帰れる訳でもないだろう？　だから私から一つ、ちよつとした提案がある」

「はい」

「……睨むぐらいなら食べたらどうだ？　旨いぞ？」

「は……いえ、大丈夫です」

クッキーを二、三噛み砕きつつ話をしてみれば、少女の視線は無情にも噛み砕かれるクッキーにしかいっておらず、心ここにあらずだった。ひよつとしなくてもお腹が空いているのかも知れない。さっさと信頼を勝ち取って何か奢って上げよう。

「話は簡単だ。私を連れて最寄りの町に行ってみないか？　それで私が嘘を言ってるかどうか、ハッキリするだろう。それにあそこは火の国とも繋がる交易都市。人と物が集まり流れ、情報も手に入り易い。行ってみる価値はあると思うぞ。それとも、既に行つた後かな？」

「交易都市……アルトですね？　いえ、ここに来るときはアルトは経由しなかつたので行つていません」

「なら調度良いな。出発しよう。私もあの町に用事があつたんだ。……なに、私が妙な真似をすれば斬ればいい。違うか？」

「それは、そうですが……」

一気に話を拍子に進めすぎたのか、少女のすんだ紅い目には困惑と何かに対する躊躇があった。ピンツと立っていたケモミミもペタンと元気が無い。とはいえ天秤は傾いている……最後の一押しと行こう。

「ああ、そういえばあの町には最近線路がひかれてな。火の国と繋がっている。今ならこのクツキーも売られているはずだ」

「これが売られ……いえ、せんろ、ですか?」

「なんだ、線路を知らないのか? ならなおの事見ておいた方が良い。あそこだけファインタジーじゃなく、スチームパンクしてるからな。良い経験になるだろう。……それと、クツキーは土産物だ。買っておくのは悪くないと思うぞ」

「なるほど……」

伏せていたケモミミを立ててピクピクと動かしながら、白い少女なにやら考え込む様子を見せる。私からすれば迷う事はないとおもうのだが、闇の魔女という世捨て人同然の身からは想像できない様々な葛藤が勇者にはあるのだろう。たぶん。

そう思いつつ机の上のお茶請けを見れば、残ったクツキーは一つ。よし、トドメだ。

「私は荷物を取ってくる。町についてくるか、この場で私を殺すか……どちらにせよ、準備しておくといい。ああ、これは貰っていくぞ」

「あ……」

絶望。そうとしか言い様のないハイライト消えた目で私を……正確には最後のクツキーが消えた口元を見る白い少女。私はケモミミを伏せてシヨンボリと消沈している彼女に背を向け、ポーシオンを回収しに調査室へと向かう。当然とすべきか、部屋を出るまでに斬りかかってくる様子は見られない。

「……あの様子なら、殺される理由はクツキーの恨みだな」

そうポツリと独り言を呟き、笑えないと肩をすくめる。

とはいえ、実際そうだろう。屋敷に入る前には半信半疑、入つてもてなしを受け、クツキーを食べてからは——あそこまで食い付くのは予想外だったが——信じたい方に天秤は傾いているのだ。悪い人ではないだろう、と。それこそ見て取れる程に。ならば殺される云々は心配しなくていいはず。いや、むしろ……

「逆の関係を期待できる……か？」

師匠の話を感じるに勇者との関係は両極端のそれしかあり得ない。殺し合いにならないのであれば、私と彼女の関係は恋人か親友のそれになるはずだ。

「……恋人」

ふと口にして思う。悪くはない。いや、むしろ良いと。あの可愛らしくも美しい少女が私の恋人になるのであれば、私は全てを捧げられるだろう。その代わりではないが……あのモフモフケモミミをモフるのもは面白そうだし、あの分なら尻尾も相当に素晴らし

いはず。雪の様に白い少女を連れて町を歩く事を想像すれば……ふふつ、それだけで丸一日楽に潰せる自信が出て来る。更にその先を考えようものなら——くふふつ、一週間断食出来るぜ。

しかし、しかしだ。今の私は魔女……つまりは女だ。野郎ではない。ならばあの白い少女との関係は——

「親友か」

ふむ、それも悪くない。親友なんて前世含めてもないから距離感が分からないが、ケモミミモフったり、一緒に過ごすくらいあるだろう。あるいはたわいのない話でもするのか。……うむ、うむ、悪くない。

師匠が闇に還ってしまっただけというものの、独り言が癖になる程度には話相手にも困っていたのだ。彼女にはたつぷりと付き合つて貰おう。

「どちらにせよ、楽しみだ」

そうなる瞬間はまだまだ先だが、しかしそう遠くはあるまい。

そんな事を考えつつ、調査室からポーション箱を魔法のベルトポーチに丸ごと突っ込んで回収し、白い少女が思い悩んで居るだろう応接室まで引き返す。

特に警戒する事もなく扉を開け、白い少女を探してみれば……私が部屋から出た瞬間から微塵も動いて無いように見えた。そんなに食われたのがシヨックだったのか？

まあ、兎も角。

「準備は出来たか？」

「はい。大丈夫です」

前置き無しに声を掛けてみればどちらとも取れる返事が返ってくる。出会った当初の敵意がすっかり消えている様子を見れば、どちらの大丈夫なのかは簡単に分かる話だが……少し試してみようか？

「ほう？ それは私を殺す覚悟が大丈夫という事かな？」

「え？ あ、い、今のは違うんです。そうじゃなくて……」

「くふふ……ああ、分かっているよ。行こうか」

グルグルと目とケモミミを回す白い少女に苦笑を漏らしつつ、その困惑しきりの様子にやはり天秤は傾いていると確信する。この調子で町まで行って楽しんでくれば、それで彼女が私を疑う事は金輪際二度と無くなるだろう。

——そしてそこから始まるのは……くふふつ、んー楽しみだ。

大きな期待に無い胸を膨らませつつ、私は白い少女を連れて部屋を後にしようとする。が、その前に少女が私におずおずと声を掛けてきた。

「あの。一つ、良いですか？」

「ん？ 何だ、町行きはキャンセルか？」

「いえ、それは楽し……ついていきますが、そうではなく」

殆んど口に出してんじやん。何というポンコツ。礼儀正しく、落ち着いた子だと思っ
ていたんだが……イメージの修正が必要か？ 華麗に剣を振るっていたときの印象が
強すぎたからなあ。

そんな風に思っていると、白い少女は一拍おいて疑問を口にする。

「貴女の名前を、知りたいんです」

ふむ？ これはどう取ったものか。いや、どう取るもなにもそのままの意味で、意識
するなら仲良くなりたいたいとかそういう事なのだろうが……困ったな。

「あー、言わなかったか？」

「いえ、闇の魔女だとしか」

「うん、それ」

「？」

「それが名前だよ」

「？ ……え？」

紅い瞳を大きく目開き、言われた意味が分からないと言わんばかりの少女。

まあ、仕方ないだろう。私も師匠に名前を聞いたときは同じ反応だったのだし。そ
う、確かあのとき師匠は……

「闇の魔女が名前を持つては闇の魔女でいられなくなるし、ときには崩壊を招く弱点にもなる。だから闇の魔女は代々名無しだ。闇の魔女は常に一人しかいないから、それでも今まで困らなかつたしな。……まあ、愛称ぐらいはあるが」

「名無し……」

これといつて形の無い『闇』を統括する闇の魔女は、闇と限りなく近くなければならない。故に形を決めうる『名前』を持つてはならないし、真名などもつての他……そんな話だったか。懐かしい話だ。

『あるいは、名前を持たないことによって自我を希薄にし、闇や別れへの恐怖を抑えようとしているのかも知れんな。……まあ、わしやお主には関係ない事じゃが。なあ、クロ？』

全く、もう十年は前だというのに昨日の事のように思い出せる。

ああ、思えばネーミングセンスが壊滅的な師匠だった。おかげでくすぐったい愛称を呼ばれたのはいぶ前だよ……師匠。

「……まあ、そんな訳で私を呼ぶときは単に魔女と呼べばいい。それで通じる。ああそれと、町の人達からは魔女様とか呼ばれていたな。参考にしてくれ」

「魔女、様……」

ポツリと小さく呟き、一人頷く白い少女。どうやら様付けの方がしつくりきた様子

だ。ああ、そういえば……

「私の名前はそんなものだが、貴女にはちゃんとあるのだろうか？ よければ、聞いても？」

「はい。私の名前はティーナ・アドルフ。ティーナと呼んでくれれば」

「ティーナ。良い名だな」

「えつと、有り難うございます」

白い少女の名前はティーナ・アドルフ。ティーナと呼んで良し。うん、覚えた。……では、さっそく。

「では、行こうか。ティーナ？」

「はい。大丈夫です」

私はティーナを連れて屋敷を出る。向かうは最寄りの町、交易都市アルト。

心なしいつもと違う森の魔力を感じつつ、私はティーナを側に連れて歩みを進めた。……
だった。

第四話

交易都市アルト。

その歴史はかなり古く、少なくとも三千年前からある古い都市だ。昔から交通の要所として栄えたこの都市は、その立地上からか歴代の闇の魔女とも関わりが深く、その関係の良好性は様々な場所からうかがい知れる。

例えば今私とティーナが通り過ぎた重厚な二重門、そして城壁の様な分厚い石壁。あれらの制作には闇の魔女が関わっており、その修復も闇の魔女の仕事だったりするのだ。

「——とまあ、この町と闇の魔女は関わりが深い。他にも……ああ、あそこに大きな水道橋が見えるだろう？ あれも闇の魔女が関わっていてな。使われてる術式の過半数が闇の魔女が出所だったはずだ」

「なるほど……魔女様も何かに関わったのですか？」

「ああ。最近敷設された線路や駅にガッツリとね」

私は隣を歩くティーナに町と闇の魔女の関わりを説明しつつ、古い石畳が続く大通りの端を歩く。

ティーナが相づちを打ってくれるから、つい森からここまで延々と語ってしまったが、それでも交易都市アルト三千年の歴史を説明するには全く足りない。今もこの大通りに使われてる術式や魔法について簡単に説明してしまっている。気分は観光ガイドだ。

「なるほど。闇の魔女は古くからアルトに関わり、尽つくしてしたと」

「ああ、そういう事になる。なんなら都市が出来た理由でもあるんだろう。ただ尽くしては……ないな。むしろ暇潰し半分だったぐらいだろうよ」

「暇潰し、ですか？」

「闇の魔女はその役目上、長期間あの森を離れない。だが離れられないだけで時間は有り余ってるからな。暇だからと何気なく森を出て、近場にあった町や人を物珍しさから手助けして、何の気なしに森に帰る……そんな感じだったらしい。助けようとして助けた事なんてない、そう言った闇の魔女も居たぐらいだ」

「でも、その何の気ない行為が人々に良い影響を与え、都市が発展するに至った……？」

「かも、な」

私は肩を軽くすくめて、ティーナの推測に苦笑を返す。きつとそうだろうと。

何せ断定なんて出来ない話だ。前の闇の魔女なんて師匠以外知らないし、記録も代によつては全く無い。更に闇の魔女は司る属性の関係か代替わりが早く、それに拍車を掛

けているのだ。以前の闇の魔女が何を思つて都市の発展に協力したかなんて……推測しかできない。

「そういうえば……門番の人も魔女様に敬礼してましたね」

都市を囲む様に作られた石造りの水道橋を見ながら、古き時代に思いを馳せていた私にティーナがそう声を描けてくる。

思い出すのはつい先程の光景。門番が私達を呼び止めたときの事だ。怪しい奴めと疑っていた門番が、私の顔を見るなり敬礼して謝罪したのはなかなかシユールだった。

「ああ、あれか。いつもはそこまではないんだが……今日のが熱心だったのか、あるいは……」

「あるいは？」

「隣が光つてるから、陰鬱な私が一層怪しく見えたんだろう」

白を全面的に押し出し、まるで光輝かんばかりの清廉さと清潔さがあるのがティーナの服装だ。ドレスか、あるいはワンピースを基本としているのだろう、動き易さを重視しつつも女性らしさを演出する……いわばバトルドレスとでもいふべき純白のそれを着たティーナは差し詰め天使。

それ比べ……私は同じくドレス染みているとはいえ黒の服、それも元になっているの

は魔法のローブのそれ。もう怪しきしかない。更に門番に呼び止められたときはこの上にフード付きのマントを羽織り、そのフードを深く被っていたのだ。完全に不審者、さもなくて死神。呼び止めた門番は正しく仕事をしていたと言えるだろう。

「それは、魔女様がフードを脱げばいいのでは……？　今も注目されてますし……」

「ムリだな。大勢にキャーキャーワーワー言われて取り囲まれるのは性に合わないんだよ。このぐらいいが丁度いい。……いや、むしろティーナもこいつを被ればいいんじゃないか？　うん？」

「いえ、遠慮しておきます。どうにも被り物はニガテで」

「……ああ、なるほど」

苦笑しつつ断るティーナの頭の上、つまりはピコピコと動くケモミミを見て納得する。モフモフケモミミを隠す様な被り物は蒸れて仕方ないのだろうと。

しかし、そうなる……

「尻尾の方はいいのか？　窮屈だろう？　……それとも、訳ありか？」

「いえ。これは、その……獣人用の服が無くて」

「……ふうん？　そうか」

獣人用の服。つまりは尻尾を通す穴や仕掛けのある服の事だが……それが無いとは、奇妙な事だ。訳ありかとも思ったが違うようだし、大抵の服屋はキチツと対応出来るは

ずだが……いや、今は考察はいい。どうやら窮屈には違いないようだし、一つ手を打っておこう。

「なら服屋に寄ろう。駅はその後だ」

「いえ。大丈夫です」

「ティーナが良くても私は我慢ならん。それに店も近いはずだ。丁度この辺りに私の服を仕立てた店があったはずで……つと、あった」

「あの、魔女様。私は本当に……」

「ケモ尻尾があるのにそれを見せつけなくてどうする。そら、行くぞ」

「ま、魔女様?!」

遠慮するティーナの意見を振じ伏せ、私は丁度良く見つけた馴染みの服屋にティーナを押し込んで行く。

まだそう普及してないだろう綺麗な硝子扉を通り、一步店内に入れば……前世の部分が声高に場違い感を発する。それはきらびやかな二階建ての店内とか、教養の高そうな店員とか、あるいは中央のシャンデリアとか……所謂高級店の波動を感じての事だ。とはいえそれは前世の部分が叫ぶだけで、今世の私は闇の魔女。こういう店はそこそこの慣れてる。

「これは魔女様。ようこそ、いらっしやませ」

「ああ、支配人か。軽く認識阻害を掛けているのに、良く気づいたな」

「私も闇の魔術使いの端くれですので……」

「ふん、よく言う」

丁寧な礼をしつつ私に声を掛けてくるのはキチツとした服装の初老の男……この店の支配人だ。魔法のフード被っていたのだが、アッサリ見破った。流石はプロか、それとも私が軽く魔法の手解きをしたからか？ まあいい。

「半年ぶりに会って早々だが、今回は仕事だ。ティーナの……この少女の服を弄つてくれ。具体的には獣人用に仕立て直す、か？ まあ、宜しく頼む」

「あの、魔女様。私は本当に大丈夫ですから。それにお金も……」

「金なら私が出す。で、支配人、出来そうか？」

勇者なのに金がないと呻くティーナを封殺し、私は支配人に出来るかどうかを聞いた。

支配人は暫く黙ってティーナの服を見ていたが……やがて考えがまとまったのか口を開く。

「ふむ……織り込まれている術式も普遍的ですし、問題ないかと。ただ、時間はかかります。どう頑張っても三時間。出来れば半日は欲しい」

「なら半日だ。確実にやってくれ。術式を書き換えても構わん。それと、仕立て直して

いる間の服も幾つか頼む。ティーナの世話もな。私はポーションを届けにいかねばならん」

「心得ました」

別にティーナの服を選ぶのに付き合ってもいいのだが……今はレデイでも私は元野郎。その辺のセンスは皆無なのだ。むしろ居ない方がいいだろう。

そんな事を考えつつ、礼をする支配人にティーナを預けておく。さて、行くか。

「では、宜しく頼むぞ。代金は……これぐらいあればいいな？」

「……ふむ。ええ、構いません」

私はベルトポーチから金貨を数枚取り出し、支配人に預けておく。どうせ使い道なんてないのだ。パーと派手にやろう。

「ところで、魔女様」

「なんだ？」

「以前会ったのは三ヶ月前です」

「……………」

……………あれ？

「いや、半年「三ヶ月前です」……そうか」

バカな記憶違いだ!? これでは私がボケ老人の様ではないか!? ええい、のじや口

りだった師匠の事を笑えん……!」

「……魔女はな、時間感覚が曖昧なんだよ」

「そうらしいですな。貴女の先代もそうでした」

「ああ、だから問題ない」

「はい」

はいじゃないが。

「はあ、尻の青い若造だった人間に時間感覚を指摘されるとはなあ……」

「魔女様、聞こえております」

「聞かせてるんだよ若造。それとも何か? 高級店の支配人にまで上り詰めた若造は年

寄りの愚痴も聞けんのか? んん?」

「いえ、そんな事はありません」

だろうな。八つ当たりだよチクシヨーム。あと私はお前が若造だった時期を伝聞でしか知らんよ。実際に知ってたのは師匠だ。

まあ、いい。ティーナの視線もどことなく痛くなってきたし、年寄りはそのそろそろ退散するでしょう。

「はあ……ティーナを宜しく頼むぞ。着飾ってやってくれ」

「了解です」

「え、あ、魔女様——」

不安げなティーナの声に聞こえない振りをしつつ、私は店の外に出る。次の目的地は馴染みの薬屋だ。

……しかし、あれだな。町の人間と話すと一気に年寄り臭くなってしまう。やはり彼らが年を取るのに、こちらが年を取らないせいなのだろうか？

「あるいは精神的な問題か……？」

いや、だとしても先程の支配人よりは若いだろう。前世の記憶が消し飛んでるから正確には分からないが、前世と今世を足しても五十以下のはずだし。

師匠は百を余裕で超えてたが。

「ならば見た目年齢か、実年齢か……いや、もつとないな」

見た目は高校生、つまりは十八歳程だ。実年齢に至ってはようやく十歳を超えた程度でしかない。

……精神年齢と見た目年齢と実年齢がバラバラで草どころかジャングルが生い茂るわ。マジ笑える

「やはり魔女は年を取らないから置いていかれる感じが……つと、ここだ」

ブツブツと考えを呟きながらあるいているうちに、いつの間にか目的地まで到着していたらしい。私は目的地である古ぼけた薬屋と扉をそつと開け、中に入る。

熱烈に歓迎してくれる葉草やポーシヨンのにおいを嗅ぎつつ、店員不在のカウンターまで行つて呼び鈴を鳴らす。そして待つこと暫し、奥から一人の老婆が歩いて来た。この店の店長だ。

「店主、今月分のポーシヨンだ」

「これは魔女様。いつも有り難うございます」

老婆がカウンターの椅子に座るのを待つてポーシヨン箱を取り出し、カウンターの上に置く。老婆はそれをサツと確認して一つ頷き、代金を……うん？

「多くないか？」

ボケたのか？ そんな副音を口の中に止めつつ、私は疑問を口にする。何せ老婆が代金として出したのは金貨が五枚。いつもは銀貨が数十枚……羽振りが良くて金貨一枚がせいぜいなものだからこれは明らかに多い。更に言えば適正価格も超過しており、ボケたとしか言いようがなかった。

「別にボケちゃありませんよ。ほら、例の駅が出来たでしょう？ あれから火の国の人々が、それもお金持ちがよく来るようになってねえ。あちらの人は魔女への信仰が厚いから、闇の魔女様を作つたんだと言つたら金払いが良いんですよ。上級ポーシヨンを買つていた人も居ましたからねえ」

「ああ、なるほど。つまり有るところから取つたらバカ儲けしたと？」

「そういうことになりますねえ」

なら遠慮せずに貰っておこう。そう納得して私は大金をベルトポーチの中に流し込む。これで一、二週間は派手に遊ぶ事も出来るだろう。いや、やらないが。

さて、用事はすんだが……確かこの老婆はかなりの情報通だったな。ふむ、一つ聞いてみるか。

「しかし、火の国では闇の魔女の名は高いんだな？」

「ええ、それはもう。火の魔女と闇の魔女は先代も今代も仲が良いってのは有名な話ですから。……どうか、されましたか？」

「いや、今日勇者と合つてな。魔王は知ってるが、闇の魔女は知らないと言われたんだ」
「それは……妙な話ですね。知名度なら間違いなく闇の魔女の方が上ですよ。なのに魔王だけ知っているのは……」

「……ん、そうだな」

ああ確かに、老婆の言う通りだ。俺は前世の記憶があるから感覚がズレてるが、こちらの人からすれば魔女と魔王では前者の方が知名度があるのが常識だった。もし、仮に……

「もし仮に、魔王の事しか知らない勇者が闇の魔女と会えば……」

「状況にもよりますが、十中八九勘違いするでしょうね。いえ、場合によっては戦いにな

る」

危ねえ危ねえ。やっぱり、一般の人から見てもあの瞬間はギリギリだったんだな。

「でも、そうはならなかったのでしょうか？」

「ああ、件の勇者が優しく、賢明な子だな。今では殆んど疑ってはいまいよ」

「それはそれは。……今は近くに？」

「いや、服屋に叩き込んで来た。勇者は獣人の女の子なんだが……にも関わらず獣人用の服を着てなかったから、な」

今頃服屋の店員連中に着せ替え人形にされているだろう。んー、次に会うのが楽しみだ。

「それは……窮屈だったでしょうに。鎧がなかったのでしょうか？」

「いや、着ていたのはバトルドレスの類いだ。獣人用の物が無かったといったな」

「それは、妙ですね。勇者のバトルドレスともなればオーダーメイドでしょうに。………魔女様。その勇者は、そうですね。お金や、他の装備はどうでしたか？」

「ん？ 金は無いと言っていたぞ。装備は……」

どうだったかな？ 私の専門は魔法で、武器の類いは素人だからそういうものの目利きは自信が無いんだが……：そうだな、魔女としての観点からいえば――

「バトルドレスも剣も一級品に見えた。だが、バトルドレスに使われている術式は普遍

的らしくてな、剣も……聖剣の類いではあるが、あれは量産が効くだろう。私があのにベルの物を作れと言われれば難しいが、師匠ならあくびをしながら片手間で作るだろうな」

「……魔法のアクセサリや、魔法のふくろは？」

「うん？ ……いや、そういえば特に無かったな」

「……妙ですね」

「？ そうか？」

普通の勇者ではないか？ ゲーム中盤ぐらいの勇者と行ったところだと思うが……いや、待て。前世の記憶に引つ張られ過ぎだ。こっちの常識で考えれば……

「そうですね、一言で言うならお粗末です。確かに勇者は替えが効きますが、しかし貴重な事には代わり無いのです。にも関わらず、その勇者は正しい知識を与えられず、路銀も与えられず、装備もオーダーメイドとはとてもいえない代物……いえ、事によれば酷使されているのかも知れません」

「確かに。しかし、そんないじめめるような事をして何になる？ 得をする奴なんてないだろう」

「得をする気が無いとすれば？」

「なに？」

どういふ事だ？

「実は、最近この町を訪れる光の国の人が減っているのです。そして聞くところによれば、人間至上主義が再燃していると」

「バカな！ あれは師匠の代で終わったはずだろう!？」

「だから再燃なのです。魔女様」

「……………」

ああ、今の私は酷く不機嫌な顔をしているに違いない。だって人間至上主義だぞ？

ここでいふ人間は所謂只人……ヒューマン種だけを差す。それはつまり、獣人を初めとする種は人間ではないという事で、ケモミミは決して認めないという事だ。勿論そんな馬鹿馬鹿しい差別的な考えはこの町には無いし、世界中でも師匠の代で決着が付いた話で……いや、だからこそ再燃なのか。

はあ、嫌な話を聞いた。この薬屋の老婆はかなりの情報通で、遠方の話も知っているからと話を聞いたが……どうやら森に引きこもり過ぎていたらしい。これでは師匠に怒られるな。

「そして今代の勇者は三人いるそうです。少なくともうち二人は只人。残りの一人の話をお聞きませんでしたか……魔女様の話で合点がつきました」

「馬鹿げた主義が流行る中で、獣人の勇者が選定されれば……ああ、そうか。あの子は冷

遇されているのか」

「恐らく。あるいは……鉾山の鳴き鳥かも知れません」

鉾山の鳴き鳥。それはいわば鉾山のカナリアであり、つまり老婆が言いたいの……
「……ロクでもない時代が、来ようとしているのか」

ポツリと呟く私に、老婆は同意を示す様に小さく礼を返してくる。……そこは、否定して欲しかったなあ。

閑話

side ティーナ・アドルフ

「魔女様……」

後ろ手を振りながら歩き去ってしまう黒髪の少女の後ろ姿を私は呆然と見送りました。出来れば一緒に居て欲しかったと、今更思いながら。

なんというワガママ。私はあの人に剣を向けたというのに……

いえ、思えば不思議な話です。殺すべきだと剣を向けた相手に誘われ家に行き、お菓子を食べ、町に出かける……剣を向けた事を除けば、今はもう無い故郷で噂に聞いた『学園』という場所に行く子供達の様な話。

きっとこれもあの人が魔女だから。不思議な不思議な魔女様だから出来た事。もしあそこに居たのが話に聞く魔王なら……私は既に死んでいます。家に招いてお菓子を食べさせ、町に行かないか？ なんて、そんな事するのは魔女様だけ。普通なら追い返すか、殺している。

「……………」

思えばあの『くつきー』というお菓子は美味しかった。きっとあれは貴族が食べる物

に違いありません。それを私が食べれたのは……やっぱり魔女様だから。魔女様だから『町に行けばまた食べれるかも』なんて台詞が出てくる。おかげで魔女様を疑うのも馬鹿馬鹿しくなりました。剣を向けた相手にお菓子を進める魔王がいるはずがないですから。

……別にご飯をくれたからなついた訳じやありません。私は狼の獣人だけど、獣ではないんです。だから、違います。魔女様が不思議な人だから、疑わないだけ。あの人が殺すべき相手なはずがない。

「さて、魔女様の無茶振りに答えますかな……ああ。君、丁度良かった。少し頼みたい事がある」

「はい、何でしょうか。支配人」

「実は魔女様から——を頼まれ——」

「——なんと、魔女様が——」

「しかし納期が——」

この店の店主らしい人が店員と何かを話しています。魔女様の話では私の服を仕立て直し、その間の服も買うそうなので、それに関する話でしょうか？　こういうところで服を買った経験が無いので、よく分かりませんが……そうです。服。

「あの……」

断りの言葉を入れようとして、思う。どう言えば良いのでしょうか？ 失礼にならない言葉を選びたいけど、上手い単語が出てきません。長らく一人旅をしていた悪影響でしょう。昔はここまで悪くはなかったのに。

いえ、そもそも断って良いのでしょうか？ 彼らはどう見てもやる気ですし、ここに連れてきてくれた魔女様にも悪い。なら断らずに服を選んで買うべきですが……そんな事を考えていると店主と店員の話が終わったらしく、若い女性の店員が目の前まで来ていました。

「お待たせしました。お客様。どうぞこちらへ」

「あ、はい」

結局私は笑顔の店員に押される様にして店の奥へと歩き始めます。螺旋階段を登って二階へ、それから少しだけ歩いてたどり着いて見たのは……沢山並んだ綺麗な服。どうやらここが売り場のようです。という事はあれは全て見本品なのでしょう。なんだか、場違い感が凄いです。

「何かご希望はございますか？」

「服の、ですか？ いえ、よく分からないので……」

「分からない。なるほど、なるほど」

私の言葉に二度三度と頷いた店員さんはチラリチラリと他に視線を投げる。見れば

視線の先には他の店員さんが居て、十秒と経たない内に私は大勢の店員さん達に取り囲まれていました。これは、いったい？

「——どう思う？ 魔女様が連れて来た子だから、完璧に行きたいのだけど」

「魔女様が？ なら失敗は出来ないわね。容赦が要らないのは助かるけれど」

「そう、武人……いえ、子犬ね」

「後、清楚」

「純白、純粹、穢れなし」

「なら……深窓の令嬢？」

「それね。まずはそこを基準にいきましょう」

「当代の魔女様は派手なのはお嫌いだからね……集めてくるわ」

「私も」

「ええ、お願い」

小さな声で打ち合わせする店員さん達の声を耳で確り拾いながら、私はどうなるのかと思考を巡らせ……駄目です。経験が無くて分かりません。

どうするべきかもまだ分からない私。そんな私を店員さん達は押し込む様にして小さな個室に案内して……着ていたバトルドレスを脱がしてきます。え？ そんな、いきなり？

「……悪くはない。けれど良くもない」

「いいえ。元が良いから誤魔化せてるだけ」

「下着もコーディネートしなきゃ……」

「大仕事ね。……取ってくるわ」

「お願い」

気づけば私は下着だけになっていました。手早過ぎて抵抗する暇もなく……彼女達はただの店員ではないのでしょうか？

いえ、それよりも……

「あう……」

流石に、気恥ずかしいです……

「くっ、バカな。まだ戦闘力が上がるだどっ……!?」

「恥じらうケモミミ美少女……流石は魔女様。ぐふっ」

「メディック！ メディック！」

「棺桶を一つ用意してくれ！」

「……どう見る？」

「魔女様よりはあるわ。けれど路線変更の必要はない……いえ、むしろもつとベターに纏めた方が良いわね。変に盛ればそれが欠点になりかねない」

「確かに。……ところで、こんな所に火の国から入ったばかりの魔術式カメラがあるのだけど？」

「——途中で盛るのも試してみましようか。後で魔女様に見せなければならぬでしょうし」

あ、あの、小声で盛り上がっているとこ悪いのですが、何か服をくれませんか……？
もう断ろうとか考えませんから……あ、駄目ですね。誰も聞いてません。うう、いつまでこうしていれば……？

「取って来たわ」

「じゃあ……始めましようか」

ああ、どうやらようやく着替えれる様です。助かりました。

……でも、なんだか店員さん達の圧が増したような。気のせいでしょうか？

「では、始めさせて頂きますね？」

「えっと、はい。宜しく願います？」

私は店員さんに進められた服に袖を通していきます。これで気恥ずかしさを感じる必要はありません。一安心ですね——

……

……

……

——助けて下さい、魔女様あ……

「綺麗ね。惚れ惚れするわ」

「うーん。でもやっぱりベターね……？」

「けれど、悪くはないわ」

「でも地味じゃない？」

「あんたが持つてきたのは派手過ぎるのよ。当代の魔女様は派手なのはお嫌いだから、

これぐらいがベストでしょう」

「一先ず手打ち、かしら？」

「落とし所か……」

「仕方なし、ね」

ブラウスとロングスカート。そういうらしいヒラヒラとした服を私に着せた店員さん達があれこれと言っています、まるで耳に入りません。あれこれと着せ替えられて疲れたせいでしよう。……ええ本当に、色々着せ替えられました。

今と同じ様な、まるで良いところの商人のお嬢様の様な格好から始まって、ゴスロリというらしいヒラヒラとした可愛らしいドレスへと続き、下着まで着替えさせられ、オシヤレについてのアレコレを指導されて……そこから先は記憶が曖昧です。何だか妙

な物まで着せられた様な気さえしますし……ええ、大変でした。

「あの、これで終わりですか……？」

「……はい。今日はこれで終了となります。お疲れ様でした」

どうやら終わりの様です。しかしオシャレというのがこんなに疲れる物だとは……これなら瘴気が充満した墓地でアンデットの群れを一人で殲滅した日の方が楽です。連れて来てくれた魔女様や、オシャレを教えてくれた店員さんには悪いですが、二度と来ない様にしましょう。最低限の衣服があれば勇者としての役目は果たせますし。

「ではお客様、どうぞこちらへ」

そんな事をボンヤリと考えていると、店員さんが私を更に別の場所へと案内していきます。今度はなんなのでしょう？ まさか、終わったというのとは何かの嘘……？

内心で怪しむ私をよそに店員さんはある一室の扉を開け放ちました。そこは床から机、更には調度品の全てが高そうな部屋。まるで貴族が使うような部屋で……私の場違い感が、凄まじいです。

「こちらでお待ち下さい」

「待つ、ですか？」

「はい。魔女様が来るまでごゆっくりと。……それでは、失礼します」

そう言うと店員さんは丁寧に一礼してから部屋を出ていき、私は高そうな部屋に一人

残されました。そのまま一拍、二拍、呆然と立ち尽くし……このまま立って待つ必要はないのでは？ そう思い至った私は何気なく目についたソファアに座ります。

「これは……？」

ふわりと、柔らかい。木の様な固さを予測していた私は、座ったソファアの柔らかさにそう驚かざるを得ませんでした。そうして思うのはこのソファアは高い物なのではないか？ そんな高い物を私が使って良いのか？ そんな疑問。

そしてその疑問の答えは直ぐに出ます。今すぐ立って待つべきだ、と。しかし同時に頭に浮かぶのは今の自分の立場……つまり、魔女様の連れだという事。

「……………」

思考は暫く。そこから出た結果は……座って待っても問題無し。

普段なら立っておくべきですが、今の私は魔女様の連れでお客様。ならここで座っていても怒られないはずです。それどころか立って待っている方が店員さんに悪いでしょう。

そこまで考えて私はソファアの背もたれに身を預けます。柔らかな感覚を背に感じつつ、思うのは町の人から魔女様への好意の事。

「やっぱり、悪い人じゃない」

出会ったときこそ怪しみ、剣を向けましたが……今では怪しもうとはこれっぽっちも

思いません。ましてや殺そうなんて、考えたくもない。

だって、魔女様は悪い人じゃないから。確かに怪しいところはあるけれど、悪い人ではない。もし魔女様が悪い人なら、この店員さんは私なんか気に使ったりはしなかったと思います。むしろ魔女様が好人だから、お世話になってるから、一緒に居ただけの私も同じ様に扱われた。丁寧な、失礼にならない様に、と。……容赦が無かったのは信頼の裏返しだと思いたいですが。

「でも……」

殺せ、と。そう言われるでしょう。そして私は、それを否定しきれない。

勿論魔女様は悪い人ではないし、私も殺したくなんてない。けどあの人達にそんな事は関係ない。相手が悪人でなくとも、私が殺したくなくても、彼らの行動が変わる事なんてなくて。だから、きつと、このままでは私は再び魔女様に剣を向けてしまう。そして――

「――やらない。そんな事、絶対にやらない」

そうです。私は人形じゃない。彼らの言いなりにはならない。魔女様を殺したりなんか、しない。絶対に。

……けど、無駄なのでしょう。いくら私がそう思っても。結局は。

「魔女、様……」

私は何気なしに長い黒髪の少女の姿を思い浮かべます。心底面白そうに、けれど小さく笑う少女の姿を。そうやって私より少し年上に見える彼女の姿を思い浮かべて……悩む。どうすればいいのだろう、と。

このままでは魔女様が死んでしまう。私が殺さなくても、別の誰かが送り込まれるだろうから。そして、そのときは私も……

「また、誤魔化す？ ……難しい、ですな」

こういう事は前にもありました。悪人の巣窟だと聞かされて突入してみればそんな事はなくて、殺せなくて……結局、嘘を報告した事が。

今回も殺せないのは同じです。でも、嘘を報告しても無駄になるところが違う。あれから私が指示に従わない可能性を彼らが考えるようになって、確認の為に暗部の人間を入れるようになったから……嘘をついてもバレる。そして殺される。魔女様も、私も。

「——ッ！」

嫌な光景が脳裏をかすめる。赤い、赤い血に染まった黒髪の少女の姿が、彼女の目が、私を——

「違う。違う！ そんな事、無い——！」

私は頭を振って嫌な想像を追い払い、心を落ち着かせます。大丈夫。まだ大丈夫。予定された日程はまだ残ってるから、彼らの目はまだ無い。だから大丈夫。落ち着いて。

「どうすれば……」

どうすればいいのだろうか？ どうすれば魔女様を死なせずにするだろう。この際私の事はどうでもいい。けど、魔女様は違う。悪い人じゃない、いい人だから……だから、どうにかして、魔女様だけでも。

「何とか、何とかしなきゃ……」

焦燥がつつのる。けれど、それを誰かに察せられる訳にはいかない。ましてや誰かに相談するなんて、もつてのほか。そんな事になれば彼らの目は容易く見抜く。そして殺す。関わった疑いがあるだけで、殺してしまう。

だから私一人でなんとかしないと。失敗しても私一人ですむように。幸い彼らの目はまだここには無いのだから、取れる手は多いはず。

「——ん」

ピクリ、と。私の耳が微かな足音を捉えました。自分の存在を隠そうともしない足音……聞き覚えがあります。恐らく、魔女様でしょう。

——気取られる訳にはいかない。

魔女様に話して逃げて貰うのも手ですが、それはもう少し考えたい。だから、今日はこの悩みを気取られる訳にはいきません。今日は隠しておかないと。

……ああ、そうなると。

——この服が似合っていないのは、好都合かも知れません。

だって、きつと笑われる。それは恥ずかしいけれど、でもそれで注意が逸れるのなら安いもの。幾らでも笑われよう。それで魔女様が生きれる道を模索出来るのなら——

第五話

勇者であるティーナが冷遇され、事によれば鉱山のカナリアの様に使われている可能性……いや、可能性ではなく殆んど確定だ。思えばクツキーにご執心だったのも、一度も食べたことが無かったからかも知れない。

「だとしたら悪い事をしたな……」

まあ、その辺りの埋め合わせは後程確りとしよう。

問題はティーナが冷遇されている事、そしてその背景だ。このうち背景にある問題は大きいので、そうそうなんともならんが……冷遇云々は早速介入しよう。差し当たり。

「ああ、支配人。終わったか？」

「ええ、既に。奥で休んでいらつしやいます」

薬屋から服屋へと戻った私は、入り口のホールに居た支配人を捕まえて話を聞く。どうやら既に着せ替えはすんだらしい。いったいどんな具合になったのか？ そう楽しみにしつつ歩を進めようとする、支配人は神妙な顔つきになって私を呼び止める。全く、何のようだ？

「魔女様、失礼ですがあの少女は何者です？」

「? 勇者だ。それがどうかしたのか?」

「……勇者? いえ、いえいえ、魔女様。それは無いでしょう。勇者にしては装備がお粗末に過ぎます」

「……お前もか、支配人」

その手の話は薬屋でもうお腹一杯だ。なのにまだこの上何かあるのか? だとしたら私は吐くぞ。吐いてやるからな! この場で!

「はい?」

「いや、なんでもない。続けてくれ」

しかし、たとえ気分の悪さから吐く事になっても聞かねばなるまい。流石にあの少女を見捨てる程腐ってはいないし……人の悪感情絡みならば闇の魔女は一応、専門家で関係者だからな。

「はい。あの少女のバトルドレスを仕立て直そうとしたのですが……あれは仕立て直すよりも新調した方が良いかと」

「と、いとうと?」

「服、鎧、術式。それら全てに疲労が蓄積されており、今仕立て直しても直ぐに取り換える事になるかと思えます。恐らく作られてたから一度もマトモな整備を受けていないのでしよう。外面は最低限取り付くついていたようですが、中身はボロボロですよ。防具

としては既に、服としても役立たず寸前です」

「そんなにか……」

彼もプロだ。残念だが、その言葉に間違いはないだろう。

しかし、服がそこまで酷いとなるとそれが使われていた状況は……いや、やめよう。ロクな想像じゃない。

「鎧は専門外ですので詳しくは分かりませんが、服と術式は間違いなくボロボロです。酷使、という言葉でも足りない程に使い古されている」

「……まるで過酷な戦場で一番槍を取り続けたが如く、か？」

「そうですね。その表現がしつくりきます。付け加えるなら、使い捨て同然の状況で、が付きますが」

「……………」

参ったな。これは本格的に参った。私は少し話し相手になってくれればそれで満足だったのに、念願の相手がとんでもない爆弾を背負い込んでいるとは……いや、見捨てるつもりなんてない。ないが……どうしたものか。

ふむ、差し当たり。

「バトルドレスは新調する。デザイン、性能、コスト、全てそちらに任せよう。追加の金も出す。いかなる戦場でも傷付かず、輝き続けるドレスを作れ。期限は……一週間あれ

「ばいいか？」

「かしこまりました。ええ、それで問題ありません。必ずや仕上げて見せましょう」

「頼んだぞ。……ああ、手を貸して欲しければ早々にな？」

私はそう言つて後ろ手を振りながら支配人の元を後にする。チラリと背後を見れば、足早に店を出ていく支配人の姿が見えた。バトルドレスの鎧部分の調達に走つたのだろう。

それを確認して私は軽く笑みをこぼしつつ、ティーナが休んでいるという部屋に向かう。勿論詳しい場所なんて知らないから従業員に聞きつつだったが……直ぐに到着した。

「入るぞ」

私は立派な扉を開けつつそう言つて、ティーナが休んでいるという部屋の中に踏み込む。

さて、件の着飾つたティーナはいずこに？ そう視線を回せば……居た。ティーナだ。

「魔女、様……」

「これはこれは……くくつ、まるで深窓の令嬢だな。ティーナ？」

「……え？」

上品な白のブラウスに、同じく白のロングスカート。所々に黒い線やワンポイントがあらわれたそれらは見る者に柔らかい印象を与え、着ている人物を穏やかに演出していた。更にスカートの方は獣人用にキチツと仕立てられたものらしく、お尻の辺りから純白のモフモフ尻尾が顔を覗かせている。今は緊張しているのかピンツと立っているが、時期を置けばゆらりゆらりと揺れるケモ尻尾が見れる事だろう。

ああ、バトルドレスに身を包んでいた頃は勇ましさがあつてそれも良かったが、今のティーナはまさしく深窓の令嬢。恥ずかしそうな様子と合わせて、保護欲がくすぐられて仕方がない。守らねば……だが、今は。

「鎧を着ていた頃から綺麗だと思っていたが……店員は良い仕事をしたな。よく似合っている」

「えつと……そう、でしょうか？」

「そうだと。実に可憐だ。新雪の様な美しさと例えれば良いか？ ティーナの魅力が一層引き出されている。何よりケモ尻尾が良い。やはり獣人は尻尾とミミ出してこそだな。可愛いよ」

「あ、う……うう」

頬を赤く染め、唸る様な声を出しつつ小さくなつてしまったティーナ。そんな白い少女を見つつ私は自分の口に関心していた。台詞は師匠を参考にしたとはいえ、ここまで

回るとは思わなかったのだ。コミュ症疑惑は杞憂だったな。

まあ、おかげでティーナをいじめ過ぎてしまったが、やはりというか、褒められ慣れてないらしい。女性勇者ともなればこの手の台詞は腐る程聞いているのが普通なのでがなあ……薬屋の心配は当たりで間違いないか。全く嬉しくない。

「変じゃないのですか……？」

「全く。なんだ、褒められ足りないのか？」

「い、いえ！　ただ、その、こういう服は着たことがないので。それに、耳と尻尾も……」

「ふむ……なら、外に出てみるか」

「外、ですか？」

意味を掴みかねたのかコテンと小首を傾げるティーナに苦笑を返しつつ、私は彼女に先んじて部屋を出る。自信がないのなら付ければ良い。それも大きい舞台で。幸いにも役者に不備はないのだから。

そんな思惑を巡らせつつ店を歩いていけば、後ろからティーナが追い掛けて来る。無視される可能性もあったのだが、杞憂だったな。

私達は並んで服屋出て、町を歩く。目指すは町の端の方に新設された駅。スタスタと迷いなく歩を進めつつ、時折ティーナの様子も伺う。新しいヒラヒラとした服が頼りなのか、慣れてないのか、あるいはアルトの古い町並みが物珍しいのか、落ち着かない

様子だ。

「物珍しいか？ ティーナ？」

「はい。こういう町並みは初めて見たので」

「アルトは古い町だからな。……しかし、光の国は？ 勇者ならあそこは見たことがあるだろう？」

「いえ、あの町に行つたのは一回だけで……それにずっと馬車の中でしたから。少しだけ見た町並みもこのことは違ったので、その、なんとというか……不思議で」

「……なるほど」

このアルトの町並みは中世ヨーロッパのソレよりも明治や大正の木造日本建築に近く、あちこちにある黒を基調とした独特な意匠や、水道橋等の古代ローマの波動もあつて他の町とは違う所が多い。ましてや師匠の代、そして私の代になってより強く火の国の影響を強く受けたせいも、中世ヨーロッパのソレが更に薄れ、完全に明治や大正の日本みたいになつてるところもある。

なのでこの手の町並みが初めてなのも仕方あるまい。テカテカ光る事しか脳の無い——と師匠が言っていた——光の国の町並みとは訳が違うだろうし。不思議に感じるのは当たり前だ。

「なら、楽しむといい。今から行く駅に近づけば近づく程、町並みは変わっていくから

な」

「そうなのですか？」

「ああ。入ってきた門の辺りが一番古く、これから行く駅周辺が一番新しい。両者が作られた時間は全く異なるからな……例えば、この辺りは百だか二百年前だかに作られた部分らしい。ほら、向こうと、あっちの城壁。不自然に曲がついているだろうか？ 一度壊れたんだよ。で、それをこれ幸いと増築したのがこの部分だ。その証拠に頭上に水道橋が走ってるだろうか？ ここが昔城壁だった名残だよ」

「なるほど、百年以上前に……」

この街は最初は上から見ると丸い円形をしていたのだが、今ではイビツな楕円形だ。もつとも、重要な都市機能は最初の円の中にあり、増築した部分にあるのは住宅街と大通りぐらい。更にいえば水道橋は昔の位置のままなのだが……つと。そろそろ指摘するか。

暗殺者モノ

暗殺者モノ

暗殺者、あるいはアサシン。もしくは殺し屋。

そう呼ばれる彼ら彼女らの仕事は至ってシンプルだ。依頼された対象を殺す。それだけ。

にも関わらず……あるいはそれ故に、というべきか。彼ら彼女らは基本的に悪であり、闇の存在である。打ち倒されるべき、居なくなるべき存在だ。

しかし、不思議な事に。あるいは愚かしい事に。暗殺者は人気者でもある。仕事に困る事が無いのだ。

誰だつて一度は思う事だろう。アイツ死ねば良いのに、と。職場や学校で殺意を覚えるのは珍しい事ではなく、場合によっては肉親ですら殺してやりたいと思う事はある。

だが、実際には殺さない。可哀想だから、とか。そこまでする必要は、とか。そういう理由で思いとどまる物だからだ。

……だが、もし自分の手を汚さなくていいのなら？ 誰かが変わりに殺してくれるなら？ それなら、幾らかのカネを払っても良い。そういうヤツも居るだろう。

特に、カネを余らしている権力者なら……暗殺者を頼りたくなるシーンは多い。実に多い。敵対勢力の権力者を消して欲しいとか、その程度なら考えなくても簡単に思いつくレベルで。

——ましてや、デジタル監視社会と化した二十一世紀の地球ならともかく、中世程度の文明しか持たないファンタジー世界なら……なおさらだ。

それはもう、暗殺を専門に行う者達が居るレベルで暗殺者は人気がある。油断を誘える幼い少女を人道的に生み出し、暗殺者に仕立て上げないといけないレベルで人気がある。中世程度のモラルと文明しがなく、しかも神秘と魔法が溢れるこの世界では……命の値段は簡単に大暴落を起こすのだ。

たった今、私の足元で冥府に旅立った貴族の様に。

「仕事、終わり……」

ブクブクと肥え太った貴族が確実に死んでいる事を確認し、私は手近にあったソファアーへと座り込む。簡単な仕事だったと息を吐きながら。

時刻は深夜。魔法を使って屋敷へ侵入し、寝ているターゲットの首を裂く。……実に、簡単な仕事だった。報酬が少ないのも仕方ないレベルで。

「貴方の値段、銅貨一枚かな？ それとも銀貨十枚？」

ひよつとしたら金貨百枚かもね。そんな幼さを残す少女の声が、死体へと向けられ

る。当然返事は無い。ロリっ娘が喋りかけているのに返答しないとは……ロリコンでは無かったのか？ もう聞きようも無いが。

「知ってる？ 貴方が死んでも、私には銀貨一枚だって来ないんだよ？ 酷いよね。組織の連中は金貨貰ってるクセにさ。このソファアーだって金貨一枚の値段はあるのに……貴方の値段はそれ以下なんだよ？」

大暴落だよ。大暴落。リーマンショックだ。

そう銅貨数枚が欲しい下請け暗殺者に殺された死体に語り掛け、私はもう一度ため息を吐く。この貴族とて年収金貨数千枚の男だったろうに……この世界は命の値段が軽すぎる。

——まあ、私も銀貨数枚の価値しかないからね。

少女型のホームンクルス、その一体当たりの値段は割と安い。ましてその技術に精通していればいる程安くなる。

現に最近ではさらなる大量生産化に成功し、一体当たりの値段は銅貨数枚にまでコストダウンしたと聞く。……それが良いことだとは、とても思えないが。

「日本円で幾らぐらいかなあ……」

学生バイトの代金で買ってしまう値段な気がする。

そう内心で嘆息しつつ、私は死んだ貴族が使っていたらしい大きな鏡に自分の身体を

映す。年頃は中学生未満。ちんちくりんといわれても仕方ない子供がそこに居て……しかし、被っていた黒いフードを脱いだ瞬間。パツ、と。白い輝きが溢れた。

「綺麗、なんだよな。私」

月光に照らされて輝くのは、肩口を超える長い白髪。その輝きは神々しくすらあり、暗殺者には見合わない輝きですらあった。それをもて遊ぶ細い指も深窓の令嬢のようで……やはり暗殺者のものには思えない。

ただ一つ。血に染まったかの様な真つ赤な瞳だけが、恐ろしき暗殺者を思わせる。輝きを失った赤い瞳だけが、ドロドロと。

とはいえ、私が綺麗な少女である事は間違いないだろう。

相手の油断を誘い、時には相手を誘惑する為に、少女型ホームクルスは一様に美しい容姿をしているのだ。恐らく、美しい容姿を持った少女をモデルにしているのだろうが……

——オリジナルがうちの組織に捕まって無い事を祈るばかりだな。

私はその少女のコピーでしかないが、その少女は天然物だろうか？ 天然物の美少女は絶滅危惧種。是非幸せに過ごし、子宝に恵まれて欲しい物だ。……もしうちの組織に捕まっているなら、ご冥福をお祈りしよう。とつくの昔に絶望にまみれた肉片になっているだろうか。

「美少女が、銀貨数枚で製造出来る……命の値段が安くなるよね。そりゃ」

いや、今は銅貨数枚だったな。組織の本部には私が一杯居るに違いない。美しく輝く白い髪と、輝きを失った赤い目をした私が。

魔王モノ

魔王モノ

「お前、次の魔王な?」「待って?」

勇者と魔王。

それはファンタジー世界ではお約束の如く登場する存在だ。始まりが指輪な物語まで遡るのか、ドラゴンなくエストまで遡るのかは不明だが……まあ、どちらにせよ歴史ある文化と言えるだろう。

さて、この勇者と魔王。大抵は勇者は良いやつであり、魔王は悪いやつである。ついでにいえば勇者は最初は弱くて、魔王は最初から強い。もつと言えば勇者は幾らかお金を払えば教会で復活でき、魔王も数百年かければ復活出来たりする。……そう、復活。復活だ。何とファンタジーな事か、コイツらは死んでも復活出来るのである。世の権力者が泣いて欲しがる不老不死とどちらが素晴らしいだろうか? どちらにせよファンタジーな所業には変わりない。

——だが、考えてもみれば中々にブラックな話でもある。何せ、彼らは諦める事を許されないのだから。

よく勇者が「俺は諦めないぞ！」とか言ってるが、正しくは諦めれないぞ！（泣）だろう。

諦めて自殺しても、復活してしまうのだし。逃げた先で老衰しても、若々しい状態で復活するのだろう。おぞましい話だ。勇者は魔王を殺すしかない。さもなければ延々と復活し続ける……終わりのない無限ループだ。発狂しそうだな。発狂しても復活させられそうだが。

——それで世界の平和が守られるなら、安いものなのだろう。たぶん。

だが安くすまない者も居る。魔王だ。

悪い事をしているから当然と言えば当然なのかも知れないが……魔王程不利なゲームを強要させられている奴は早々居まい。何せ勇者は何度殺しても復活してくるのだ。殺しても殺しても復活してくる。終わりが無いのが終わり……それがデフォルト。無理ゲーである。

しかも万が一魔王が殺られてしまった場合、次の復活は数百年後……その頃には機関銃とか、核爆弾とかが開発されているのだ。無理ゲーである。

仮にそれを何とかしても、今度は宇宙戦艦とか惑星破壊ビームとかが飛んでくるのだ。ファンタジーがSFに代わってしまうのである。完膚なき無理ゲーである。

他にも色々とはあるにはあるが、基本的に魔王は無理ゲーである。もう一度言う。無理

ゲーである。

——さて？　ここで問題だ。

こーんなよくある？　勇者と魔王の話だが……もし魔王が本気で勇者（無限復活）を終わらせたいなら、どうすれば良いのだろうか？

私には、分からない。

分からないから聞いてくれるな。頼むから。

「どうすれば良いんだろなあ」

だから聞くなつて。そう言えればどれだけ楽だろうか？

私は拒絶の言葉の代わりにため息を吐き出し……それが同情と受け取られたのだろう。目の前の巨人みたいにデカい明らかにヤバイヤツ——金の装飾が施されたダークカラーの厳つい鎧で全身武装——もため息を吐く。我魔王なのに、と。身体が震える様な重厚な声を発しながら。

「無限復活だぜ？　無限復活。我でさえ数百年かかるのに、連中ときたらちよびつと金を払うだけで復活よ？　お手軽過ぎる……」

「理不尽ですね」

「だろ？　神様の加護か何か知らねーけどよ……理不尽過ぎるよなあ」

「仰る通りです」

「だよなあ。殺しても殺しても即日復活するのはズルだって 許さないぞ魔王！ 次こそはお前を倒す……！ じゃないんだよ！ 一回死んだらそれで終わりなの！ それが普通なの！ お前何回死んだんだよ！ いい加減死ねや！」

「そうですね」

「うんうん、お前もそう思うか。はあー、何か良い感じの方法が無いもんかねえ」

知らんがな。そう言えればどれだけ楽だろうか？ まあ、言った瞬間不機嫌になったコイツ——着ている鎧と身体のデカさのせいかな魔王というより、ライバル系悪役が乗ってる巨大ロボットみたいなヤツ——に消し炭にされそうだから言わないけど。

ああ、現代日本で慎ましやかに暮らし、今日も穏やかに眠ったはずなのに……どうしてこうなったのか？ これが分からない。

——この吐きそうな威圧感、夢じやない証拠……なら大方のところ、召喚とかされたんだろうなあ。

ならなんだって一般人でしかない私が？ と思わないでも無いのだが……この分だと、誰でも良かったのだろう。愚痴さえ聞いてくれるのなら。

だって、さつきから愚痴しか聞いてないし。

「突然異世界から召喚されて混乱してるお前に言うのもアレんだけどさ、我結構頑張った訳よ。一族の悲願が何たらとか言われて魔王に就任してからこっち、物凄い頑

張った訳」

「そうなんですネ」

「おう。だいたい百年ぐらいかな？　魔王就任の為のアレコレ含めたら二百年ぐらいか。めつちや頑張ったのよ」

重い。めつちや重い。

普通百年もあつたら人が産まれて老衰出来るんだが？　世界大戦が二回起きて終わるんだが？　いや、ホント。十年とかじゃなくて百年？　しかも下積み時代も百年？　流石はファンタジーのラスボス、時間感覚壊れてる。千年とか言われなくてマシだつたと思うしか無いレベルだ。

「言う事聞かない配下を何とか統率してさ。魔剣とか邪剣とかも作った訳。しかも更に、更にだよ？　異世界から召喚した魂に教えて貰いながら、町並みだつて整えた訳よ」

「それは、偉業ですネ」

「だろ？　人間からは同じ魔族扱いされてるけど、実際は種族間の対立がヤバかつたからな。全くよお、似たような部族で争ってんじゃねーよ！　鱗の色の違いとか、生まれた場所が山か森かの違いぐらいで騒ぐな！　グダグダやっていると勇者にまとめて皆殺しにされるぞ!!　下剋上？　後にしろよ！　勇者と違ってこっちは我以外は復活出来ないのに！　いや、我も復活に数百年かかるけどな！」

「そこを何とかしたんですね」

「したよ！　した！　人間が攻めてくるのに、魔族の中で内輪揉めしてる場合じゃないのは分かってたからな。めっちゃ頑張ったよ、我」

どうやら目の前の巨大人形ロボット、もとい魔王。普通に凄いヤツらしい。吐きそうな威圧感からそうではないかと思っていたが……言っている事が事実なら、為政者としてもかなり優秀な様だ。

種族間対立をたかだか百年、それも他の事をしながら片付けてしまうとは……この時点で地球の為政者の八割を越えてしまっている。普通に凄いヤツだ。地球？　未だに肌の色とか、生まれた村の違いで争ってるよ。百年かけても解決しないんじゃないかな？　既に数百年掛けて解決してないんだし。

「後、武器な。棍棒で勇者と戦うのは無理って若い頃の我でも気づけたからさ。めっちゃ頑張ったの。我、魔法ニガテだからさ。その辺得意な奴と協力して、鍛冶が得意な奴も巻き込んで……魔剣とか邪剣とかを大量生産した訳」

「技術革新ですね」

「そうそれ、技術革新。ほら、私の邪剣どうよ？　これ我用にカスタマイズされてるけど、基本は量産品よ？　昔はこれも貴重品だったけど、今はそうじゃない訳」

これよりちよつと弱いぐらいのを、城の警備兵とか持つてるんだぜ？　と、そう笑う

——鎧で見えないけど、たぶん笑ってる——魔王に……私は頷きを返すのがやっとだった。

彼がジャキリと気軽に抜き放った剣の発するナニカに、身体が凍えてしまったが故に。恐らくは、恐怖によって。

ああ、凄まじいな。抜き放っただけで、恐怖を与える代物が量産品？　慢心せずに最高の武器まで作れる……というか、作らせるとか、魔王様最強じゃん。あれが量産品なら、魔王軍は敵無しだろう。

——いや、勇者が無限復活するのか。

哀れ、どれだけ凄まじい武器を用意して打ち勝とうとも、勇者は無限復活してくるのだ。ナムアミダブツ。努力の笑う様な所業は、最早どちらが魔王か分かった物ではない。神の働き過ぎである。頼むから寝ていて欲しい。ジーザス、スリープ、プリーズ。

そう魔王側に感情移入しだしてしまった私に、魔王は更においうちをかける様に愚痴を吐く。これを見てくれ、と。空中にどこかの町並みを映し出しながら。

「そうそう、町並みもな。当時は城っていうか、岩削った要塞しか無かったからさ……異世界からその手の知識がある魂召喚して、色々教えて貰いながら頑張った訳よ」

それが、コレ。そうどこかの町並みを指し示す魔王。指し示された町並みは……控え目について整っていたし、発展していた。中世ファンタジー風世界にありがちな石の町

並みは、為政者の努力あればこそだろう。

少なくとも、これを見て蛮族の町だと言える奴は脳ミソが腐っている。

——あれは、ローマの水道橋に似てるな。水道が通っているのか……住んでいる人々の顔も明るい。物乞いの姿も見えない……ん？ 街灯もあるのか。

水道橋の管理というのはある程度の文明レベルが要求され、場合によっては完備出来なくなる物だ。実際、ローマ帝国が崩壊したあと、中世ヨーロッパでは上下水道が整備出来なくなり、汚物が足れ流しになってしまった。歴史の教科書にもそう書いてある。

それを思えば、魔王の作りだした町並みと文明レベルは中世ヨーロッパを上回り、ローマ帝国に匹敵しているのは間違いない。更に魔法的な何かなのだろう街灯は、技術レベルが産業革命レベルにある事を示していた。街灯は文明の明かり。著名作品にもそう書いてある。

そして何より……民衆の顔が明るく、その日の食い物にも困っている人が見えない事。これは素晴らしい事だ。民衆の顔が明るいの、日々の生活に不安や不満が無いから。物乞いが居ないのは、職に困らず国が発展しているから。戦後の漫画にもそう書いてある。

「普通に偉業では？」

「お？ 分かる？ 分かっちゃうかーそうだよな。我頑張ったもんな」

第六魔王？ とか名乗ってた怖い人間のオツサン……しかもその残滓っぽいのを呼び出したときはどうしようかと思っただけ。

そう——鎧で見えないけど——笑う魔王は、明らかに上機嫌だった。……一応残滓らしいが、魔王が呼び出したオツサンが大物な気がするのはいか？ いや、町並みに昔の日本っぽさが無いし、たぶん気のせいだろう。異世界のそっくりさんに違い無い。うん。

「後、あれよ。我、和平工作とかもやったのよ？ 勇者が来るのって人間の国と戦争になったからじゃない？ なら人間の国と戦争しなきゃいい訳でさ。なるべく人間の国と問題起こさない様にして、和平の可能性を探った訳」

「おお……」

「でも失敗。配下は人間殺す気満々だし、向こうも向こうで魔族殺す気満々だからな。和平は無理だったわ」

お互い恨み辛み積もってるからなあ。直ぐには無理だわ。そう言って肩をすくめる魔王に、私はなるほどと頷くしかない。

お互い恨み辛み積もってては……確かに和平は成らないだろう。仮に条約を結べたとしても、破る前提の物にしかなるまい。難しい話だ……

「けど、ここ百年は我が頑張って配下をなだめたり抑えたりしてたから、そんなに恨まれ

てはない訳」

「おお、それは前進ですね」

「だと思っじやん？ そしたら人間ども、不気味だーとか言っつてやがんの。今静かなのは力を備えているからに違いない。時期にこちらに襲いかかってくる……しまいには連中は力尽きて、戦う力が無いとか言う始末！ もうね、アホかと。しかもそれで同族で殺しあい始めてるし、意味分かんない」

ああ……人間の悲しいサガだな。殺し合わずには、憎まずにはいられないのだ。人間とは欲望の生き物なのだから。全人類が悟りを開いた修行僧にでもならない限り、真の平和は遠い夢……悲しいね。

それでも和平の可能性は残してある。そう言う魔王の何と出来た事か。もうお前が勇者で良いよ。

「けど、そんな奴らでも勇者が産まれたらヤバいのは知ったからさ、我。備えは続けてた訳よ」

「慢心しなかつたんですね」

「うん。オッサンから知恵者や学問が大事つてのを教わった我は、そこから更にオッサンの国の知識を引っ張つてきて……最終的に学校つてのを作つた訳。今じゃ毎年優秀な人材が発掘されてて、そこから將軍になった奴もまあまあ居る訳よ」

オツサンを経由する事で、その国の情報は手に入りやすくなってたのは幸いだった。そう笑う魔王は実にも上機嫌で楽しそうで……実際楽しかったのだろう。恐らく、そういう街づくりとかが好きなのだ。魔王は魔王でも、温厚かつ有能な魔王な訳だな。

——とはいえ、弱い訳でもない。いや、むしろ強いのは流石か……

サラツと言ってるが、魔王は異世界の知識を引つ張って来る事が出来る。それだけでも充分凄まじさが伝わって来ようという物だ。魔法の腕前は相当なレベルなのだろう……

「けどなあ。そんだけやってても勇者が殺せない訳。いや、殺せるんだけど、次の日には何食わぬ顔して復活してるのはヤバいだろ」

「ヤバいですね」

「ヤバい。幸い勇者はそんなに強くないから、我がこう、ゴツとやれば塵一つ残さず消滅させれるけど……毎日毎日復活されるとねえ。飽きる。飽きてるのに復活してくるし。何なら飯の途中とか、風呂の途中とか……後寝てる時な！寝てる時に勇者が来たって起こされるのはまじ出腹立つ！」

「寝てる時は嫌ですね」

「だろ!! 嫌だよな! でもそんなでも行かないとき、配下はともかく配下の配下……要するに普通の兵士は殺される可能性ある訳だから。行かない訳にも行かないんだよ

なあ。我、魔王だし。最強だし」

「流石です。魔王様」

寝ている時に突如としてかかる電話。慌てて飛び起きて出てみれば、今すぐ仕事に出て欲しい……ああ、推理アニメの犯人になるには充分な理由ではなからうか？ しかも行かないと誰かが殺される？ 殺意で全身が真っ黒になりそうだし。

それが頻繁にとなれば……世界を滅ぼしたくもなる。いや、この魔王はそれでも和平の可能性を捨ててないのか。聖人か？ 魔王か。ゴツとやれば、のゴツも大地が割れるレベルなんだろうなあ。塵一つ残さず消滅させてもらいたいし。

「いやあ、お前話分かるなあ。第六魔王のオッサンも話が分かる奴だったし、お前の国の人間とは気が合いそうだし……そっちの国に移住しちやおつかなあ」

止めて？

たぶんその第六魔王とかいう人、偉人だから。歴史の教科書に載ってる人だから。何か残滓らしいし、本人とは違うっぽいけど……それでも偉人と一般人を比べないで欲しい。移住？ 勘弁してくれ……最終的に国民は順応しそうだけど、外交問題がややこしくなりそうだし。

「まあ、我魔王だし？ 魔王の責任から逃げ出す訳にはいかないから、移住は出来ないんだけども」

「……そうですか」

「うん。あー……勇者死なねーかな。いや、違うわ。二度と復活しないで欲しい。殺すのはこつちでやるから」

勇者マジ死ね。そのため息を吐く魔王に、私はうんうんと頷いておく。

「ここまで聞かされると、魔王が不憫過ぎてな……いや、物騒には変わりないんだけど、こっ、感情移入の割合としてな？」

「でさ、本題なんだけど」

「あ、はい」

今までの本題じゃないのか……そう困惑しつつ先を促してみれば、魔王は少しだけ言いよどんだ後、言葉を繋げる。ずっと前から計画はしてたんだが、と前置きして。

「我、そろそろまとまった休暇を取りたくてな」

「それは、そうですね」

「でもよ、魔王不在はヤバいじゃん？ 勇者もそろそろパワーアップしそうだし。せつかく育てた配下が皆殺しされてたら……我泣くよ？ しかも復讐に勇者殺しても、勇者死なないし。復讐も出来ない」

それは、難しいな。

休暇は確かに必要だろうが、勇者に配下が殺される可能性を考えれば……なるほど、

休めない。休んだとしても一日か二日になるだろう。お世辞にもまとまった休暇とは言えない。しかし生きていて仕事をする以上、まとまった休暇が欲しいのも事実。ましてや魔王はよく働いている。何とか休んで欲しいが……ふむ。

「そこで我、考えた。我が休んでる間、代わりの魔王を置いておこうと」

「おお、名案ですね」

「だろ？ ホントは第六魔王のオツサンに頼もうと思っただけだよ。彼、残滓だから不安定なのよ。魔王はちょっと任せられないし……とか言ったら最近、何か成仏しちゃって」

「え……」

「正確には魔界に行ったみたいなんだけど、どっち道魔王は任せられないからね。だからその魂とおんなじ国から魂引っ張ってきて、魔王させる事にしたんだよ。あのオツサンの出身国。いい感じの魂が釣れるだろと思っただけ」

「待って？」

おい、おい待て。まさか、それが私………？

いや、いやいやいや。失敗してる。失敗してまずよ魔王様！ 呼び出すなら一般人じゃなくて逸般人呼んで！ 私には身に余る!! 「召喚は指向性こそあるけど、基本がランダムだから心配だったけど、お前とは気が合いそうだし安心だわー」じゃないんです

よ！ 失敗してる！ 失敗してるから!! 仕事のストレスで思考能力低下してるんじゃないのか……!?! 頼むから考え直して!!

「あ、不安？ まあ、そうだよなあ。いきなり呼ばれて魔王させられる訳だから、不安だよなあ。だが、安心するがいい！ 我的アフターフォローは万全よ！」

「いや、そういう話じゃ……」

「配下にもちゃんと説明してるし、給料も足りなければ宝物庫のヤツを殆んどプレゼントしても良い……あ、歴史的なアレコレは渡せないけどね」

後、休暇も無いけどね！ そう魔王らしい重々しい声を上げて笑う魔王様の目は………淀んでいた。鎧兜の間から見えたその目は淀んでいたのだ。

例えるなら、三徹させられた挙げ句、長期休暇を与えず、ボーナスは当たり前のようにカットされ、賞与もされず、頼みの有給休暇の許可も降りなかった社畜サラリーマンの目………やっぱり仕事のストレスで思考能力低下してるんじゃないか!?! お願い確りして魔王様！ 貴方がここで倒れたらここまで発展した国はどうなるの!?! 勇者さえ倒せれば………無限復活するんだったか。救えねえ。

——そこで私の出番という訳……いや、無理だつて。無理無理無理。

ここまで頑張ったのに休めない魔王様には同情するけど、私が魔王は無理！ スケープゴートにもならんつて！ 考え直して魔王様!!

そう内心では思う物の、口には出せなかった。……いや、出せて。ここまで頑張つて、ようやく休みが手に入りそうになつてる魔王様に、計画練り直しですとは……口が裂けても言えない……！ 圧倒的……圧倒的圧力……！

「それと戦闘能力も心配しなくていいよ。魔王が勇者に殺されちゃつたら元も子もないから、勇者を殺せるパワーも最初から用意してる。私の配下が専用のホムンクルスを用意してあるはず……それに入つて貰えれば」

「ホムン……え？」

「悪いなあ。突然魔王やつてくれとか。混乱するよな」

止めて？ 謝らないで？

「というか謝るくらいなら失敗に気づいて？ 頼むから……駄目か。駄目ですね。だつて……」

「でも、許してくれな？ 我、魔王だけ……魔王だつて休みたいんだモン！」

目が、淀んでいるのだ。三徹キメて無敵になつたサラリーマン魔王に、更に働けとは口が裂けても言えない。言つた瞬間塵一つ残さず消滅させられる。

——アフターフォローは万全つて話だが……！

こうなつたら魔王プレゼンツのアフターフォローに全てを託すしか無い。お願いします
ます完璧であつて下さい……！

駄目なら？ その時は、ケジメで切腹しようか。少なくとも遺体は残るし、塵一つ残さず消滅させられるよりはマシだろう。いや、やっぱりそっちの方が痛みが一瞬なだけマシか？

そんな底辺を競う思考に、何秒費やしただろうか？ 反論出来ずに居る私に、反論が無いのだと思ってしまうたらしい魔王様がうむと頷いて私に手を向ける。って訳で、と。

「お前、次の魔王な」

「待って？」

……………そう言う訳で、私は魔王になるらしい。

いや、なんで??

◇

神秘系。パンツ吐いてないアルビノ美少女魔王

ある日突然魔王を名乗る奴の愚痴を聞かされ、思わずウンウン頷いて同情していたら……私はなぜだか知らないが魔王をやる事になった。平和な現代日本からひっぱり出されて、物騒極まりない異世界で。

いや、意味不明にも程がある。程があるのだが……残念ながらというべきか、夢幻の類いでは無かったらしい。

いつの間にやら私の目の前に強大な魔王は居らず、私は暗い石の部屋に寝かされていた。勿論、自室な訳が無い。全く知らない天井、知らない部屋だ。

「気分はどうですか？」

何がどうなってるいるのか？ イマイチ判断出来ないでいる私に、横合いから声がかかる。

「いったい誰かと視線を向けていれば……ああ、なんて事だ。そこに居たのは亡霊だ。高級感溢れるローブを身にまとい、牛の骨を被っているナニカ。しかし、身体はどこにも見当たらない。いや、微かに骨と霧の様な物が透けて見えるが……あれを身体と言うのなら、コイツは正真正銘亡霊だろう。」

私が悲鳴を上げなかったのは、ただの偶然に過ぎなかった。

「……っ!？」

「ああ、紹介が遅れました。わたくし、この国の宰相でございます。名前は……故あつて聞かせれませぬが。……言葉、通じてますでしょうか？」

辛うじて悲鳴だけは出さずに済んだ私は、亡霊の割にはフレンドリーな亡霊……宰相であるらしい彼の言葉にココリと頷く。

そんな私に満足したのか、宰相は言語理解は問題なさそうですな。と頷き、ペコリと一礼してくる。うやうやしく、しかしどこかよそよそしげに。

「魔王様より貴方の案内を任されております」

「魔王、様から……」

魔王から？ そう言いそうになって、何となしに最後に様と付け直した瞬間、宰相の雰囲気が一気に柔らかくなる。コイツ、分かっているなど言わんばかりに。

……これは、様を付け忘れてたら呪い殺されてたかも知れんな。流石は魔王の配下だ。忠誠心が高い上に物騒極まりない。

「この国の状況や、貴方が魔王代理となる事、やるべき事等は既に魔王様より説明されていると思いますので……早速、仕事の説明には入ります」

「あ、はい。お願いします……」

いや、魔王様からは愚痴しか聞かされてません。そんな事を魔王の狂信者に言う訳にもいかず、私は仕事の説明と聞かされて思わず居住まいを正して聞く姿勢になってしま

う。

「先ず、貴方の身体を固定しましょう」

「……？」

「今の貴方は……まあ、鏡で見れない様な状態です。ですので、先ずはそれを何とかしましょう」

自覚はないでしょうが。そう言う宰相の言葉に私は頷くしかなかった。個人的には

いつも通りだと思っただが……彼の言葉を信じるなら、鏡で見れない様な身体になって
いるらしい。

そりや世界を跨いだのだから、何らかの異常が発生していてもおかしくはないだろ
う。それこそ、ゲル状になっていても不思議ではいのだ。……本当に異世界に来たのか
？ それは不確かだが、今余計な事をやると殺されかねない。異世界に来た事含め、基
本的に宰相閣下に逆らわない方向性で進めるしかないのだ。しがない一般人でしか
ない、私は。

「先ず、前世の身体は思い出せますか？」

「前世……？ いや、身体なら………え？ 前世？」

「ええ、前世です。………ああ、思い出せませんか。まあ、一度死んでますし、魂も混
ざり物。そうもなりましょう。第六魔王殿や、他の異世界の魂も時折そうなっておりま
した」

仕方がない事です。そう骨の被り物をカクンと領かせ、宰相は勝手に納得してしま
う。

前世……まるで私が死んだかのような言い方だ。いや、実際死んだのだと、宰相閣下は
認識しているらしい。しかも魂が混ざり物？ 他もそうなた？ 勝手に納得してい
るところ悪いが、気になる話ばかりだ。それこそ、説明して欲しいぐらいに。

——かといって、魔王様からは愚痴しか聞かされてませんか！　なんて言えばどうなるか……

この短時間で宰相閣下が魔王信者である事は察しがついている。にも関わらず魔王……様を侮辱する様な事を言える程、私の肝は太くない。それに、私は勝ち目の無い戦いはしない主義なのだ。

「では、『魔王』の身体をイメージして下さい」

「……？　はい？」

「魔王、そう聞いてパツと思いつかぶイメージ。それで身体を固定しましょう。それが……最も効率的でしょうからね。ああ、術式はこちらで動かしますのでご安心を」

「……………」

内心、未だ混乱していて整理がついていないのですが。そう言えばどれだけ楽だろうか？　まあ、出来ないからこうなっているんだが。

魔王。そう聞いて思いつかぶイメージね……直近で言うなら先程会った魔王様の姿が思い浮かぶ。着ている鎧のせいで、悪役ロボットのじみていたあの姿を。

しかし、それ以外となると………一氣にまとまりがなくなってしまう。魔王、そう言われる存在が多すぎるのだ。ドラゴンっぽい魔王も居れば、人形の魔王も居る。第六天魔王なんて名乗った実在の人物も居るし、何々の魔王とかいう二つ名持ちの人物は割

といふのだ。これといったイメージは固まらない。もう少し範囲を絞ってくれない事には、イメージを固めるのは難しいだろう。

「特に思い浮かびませんか？ ……ああ、言い忘れておりました。魔王様の姿を真似たら殺します」

「!? りよ、了解です……」

この魔王信者め！ とは言えない以上、私は黙って従うしかない。

まあ、私自身あの巨大口ポツトじみた姿を真似するつもりもないし……鎧の中身となれば更に想像がつかないから問題は無いだろう。声からすれば男性だと思うが、女性の可能性だってあるのだ。それこそ、ボイスチェンジャーを使っている幼女の可能性もゼロではない。姿を真似しようにも、そもそも不可能だ。

しかし、幼女、幼女か。

最近の魔王は、幼女の魔王も増えていたな……そんなに数は多くないが、ポツポツと思ひ浮かぶ。尊大なロリっ娘魔王も良いが、儂げな感じの美少女魔王も、個人的にありだと思ふんだ。白髪赤目の美少女、良くないか？ 私は良いと思う。……現実逃避かな？ 現実逃避ぐらいさせてくれ。今しか現実逃避出来そうにないんだ。良いじゃないか。理想の美少女を妄想するのは、良い現実逃避になるんだから。

「ん？ そうそう、その調子です。ああ、戦闘可能でありながら、普段から着ておける服

もお忘れなく。その分の魔力は別途用意してありますので。真っ裸で良いなら、別に構いませんが」

む、服もいるのか？ まあ、そうだな。真っ裸で歩き回る訳にはいかない。

そうなるかどうか？ 野郎の服なんてシャツとズボン、それもスーツのそれを流用したので十分な気もする。これが女性なら、あれこれ拘った方が見栄えするだろうし、考えなくてはならないだろうが。……仮に考えるなら、そうだな。チエニツクとボロマンとの組み合わせとかどうだろう？ いや、見栄えだけではなく、戦闘行動も考えろと言っているし……これだと下半身を露出させ過ぎか。

いや、私が考えるべきは自分の服なのだが。こう、現実逃避として最適だろう？ こういう思考は。自分の服を選ぶより、他人の服を選ぶ方が楽しいものなのだ。仕方あるまい。

「む、これは……」

何より、自分の身体と服をデザインしろと言われても……気合いが入らないんだ。キャラメイク出来るゲームでもデフォルトのを使うタイプなんだぞ？ 私は。ヒロインを設定しろと言うなら多少は考えるが、自分のはなあ……どうしても現実逃避に思考が流れてしまう。

とはいえ、いい加減決めなければ焦れた宰相に殺されるだろう。そろそろ美少女魔王

の現実逃避は終わりにして、自分のキャラメイクを始めなければ。……良いと思うんだけどなあ。夢げな感じなのに、実は魔王な美少女とか。ツノとか羽とか生えてると更に良い。

いや、いや。今は自分の事だ。現実逃避はここまでにしよう。意味も分からず死にたくはない——そう、思った瞬間。足元に魔法陣が走る。

「思念の流入を確認。この量に、質ならば……ふむ、行けそうですね。では、始めます」

「え？」

何を？ そう問う時間は……残念ながら無かった。

突然、私の身体に電撃が走ったのだ！ いや、電撃ではない。だが、これは、まるで自分の身体を内側からかき混ぜられている様な……っ!? 不快な感覚。有り体に言って吐きそうだし、吐きたい。なのにそんな事は出来ず、ウゾウゾと虫に這い回られる様な感覚に襲われ続ける。

——身体を……まさか、作り変えているとでも言うのか……!?

泥人形を作るような気軽さで、身体を弄られている。……そう思えば、今の状態にピタリと当てはまる気がした。まさしく私は身体を作り変えられているのだと。

にしても、まだこれといったイメージを思い浮かべてな……まさか、いや、もし

かして、私の現実逃避を理想だと受け取ってしまったのか？

——ち、違っ！ ああ、私のアホ！ 何だって現実逃避なんかしたんだ!?

システムに融通は効かない。……つまり、そういう事なのだろう。私がウツカリ思考を横に流し、たれ流してしまった理想の美少女魔王。それを私自身の理想だと魔法システムが認識してしまったらしい。

やってしまった。やってしまった！ 混乱していたとはいえ、現実逃避の結果がコレとは！

そう思う間にも不快な感覚は収まっていき……やがて、不快な感覚が収まった頃。私は空気の感覚やおいを知覚するに至っていた。暗いところ特有のジメつとした感覚と、におい。……ああ、身体が作り終わり、五感が復活したらしい。

「おめでとうございます。貴方はこの世界に生誕されました。……ご気分はどうですかな？」

「……あ、あー、あー……うん」

ペコリと一礼してお礼の言葉を告げる宰相に、何か言葉を返そうと発声して……察した。私の声ではない。男の声ではない。これは、少女の声だ。どちらかといえば可愛らしい感じの。

どうやら、やってしまったのは間違いないらしい。そう嘆息しているうちにも宰相の

言葉は続き、やがて不思議そうに首をカクンと傾げる。奇妙なものだと。

「しかし、『魔王』と聞いて少女の姿になるとは……そちらの世界の少女とは、それ程強い存在なのですか？」

「ぐっ……ひ、人に、よつては……」

強いです……そう尻すぼみになりながら声を出し、私は自分自身の声がスツカリ少女になってしまっている事を自覚する。自覚させられる。まだ一人称が私ではなく俺だった頃から付き合ってきた自分の声は、もうどこにも無かった。

そして、私の心は宰相が魔法で用意した物によってトドメを刺される。こちら、鏡ですと、突如現れた大きな姿見によって。

「やっぱり、女の子……」

「女の子ですな。美少女、と行ってよろしいかと」

美少女。ああ、美少女だ。現実逃避に連想ゲームしていたとはいえ、思い描いた理想の美少女魔王である事に変わりはなく、鏡の中で驚嘆している様子の少女はかなり可愛らしかった。

年頃は中学生か、ギリギリで高校生ぐらいだろうか？ 肩口までサラリと伸びた白髪は月の様に美しく、赤月の様に真っ赤に染まった瞳は怪しく輝き、ペタペタと頬を触る白い手は細く小さい……可愛らしいもの。ああ、可愛らしい少女だ。感情に乏しいの

か、表情筋が仕事をしてないが……その愛嬌の無さがかえって愛嬌になっている。端的にいつて、好みのタイプだった。一言で言うなら無口系アルビノ美少女。素晴らしい。

しかし、彼女は人間ではなかった。耳の上辺りからピンっと伸びた黒いツノが、人外
の存在である事を示しているのだ。まるで自分は悪魔だと言わんばかりに。だが……
それでも可愛らしい美少女には変わりない。むしろ恐ろしげなツノもチャームポイント
だろう。カワイイは全てを超越するのだ。

「服は……ふむ、些か露出が多い様に思えますが、生地が無いところにも防御能力がある
タイプの様子。問題は無いでしょう」

良いセンスです。そう褒めてくる宰相が先程言った様に、露出は少々多めだ。

上半身に関してはワンピースにも似た黒系のチェニツクと、フード付きのコートにも
似たマントでゆるく、しかし確りとガードしているのだが……それに反して下半身の露
出は多く、ホットパンツらしきボトムと、履きやすそうなブーツ以外は何も無い。むし
ろパンツの丈が短いせいで、何も付けてないんじゃないかと思える程……シユレ
ディングアのパンツを思わせる魅惑のライン。これを考えた奴はイカれてる。良いセ
ンスだ。

——まあ、私なんだが。

そう、私だ。何を間違ったのかは明白で、その結果彼女は私である。私が彼女だ。鏡

の中の美少女は私なのだ。私が、神秘系パンツ吐いてないアルビノ美少女魔王だ。つまり私がヒロインだ。それもたぶん隠しヒロイン。最初は敵だけど、ラスト付近で味方になるタイプのヒロインだ。……いや、駄目だろう。それは。

「これ、変更とか……」

「変更？ 難しいでしょう。何せそれで固定してしまいましたし……何より、魔力が安定しております。今から他の姿にしまうと、大幅に弱体化してしまうでしょう」

オススメ出来ません。そう言う宰相の声には、間違いなく副音声がついていた。フザけた事言うのと殺すぞ、と。

コワイ。魔王の宰相コワイ。死にたくない私は、もう……従うしか無かった。そもそもやらかしてしまったのは私なのだし、無理を言える立場でもないしな。実際、宰相の仕事に間違いはない訳で。

しかし、ああ……どうするんだ？ これ？ もう意味が分からん。

「ふむ、何を肩を落としているのです？ 問題は無いでしょう」
「いや、女の子じゃ……」

「問題ありません。魔力さえ安定していれば、魔王代理として過不足なく力を震えます。戦闘能力に問題はありません。その様に魔王様とホムンクルスを調整しましたので。問題は、一切ありません」

それとも、魔王様の残した魔力にご不満が？　そう牛の骨の奥で紫炎を燃やす——明らかにキレている——宰相に……私は不満はありませんと言つて黙るしかなかった。

コワイ。ひたすらにコワイ。魔王信者コワイ。……少女の身体のせいかな？　異常なまでに怖いぞ……いつも以上に恐怖を感じる。気のせいかな？

「魔王様より受け継いだ魔力の扱いに関しては……後ほどにしましょう」

うう、まさか女の子になつてしまうとは……外見のレベルは間違ひなく前世以上だが、それは慰めにもならない。だって、女の子だぞ？　いくら外見が可愛くても、中身が私では意味が無い。というか足がスースーする。この服考えたの誰だよ……私か。

ああ、私だ。私は女の子だ。……こんな事があるか？　女の子になつてしまったシヨツクは言葉に出来ん。これからどうすれば良いんだ……そう落ち込んだ瞬間、宰相の目が光る。なんか文句あんのかおおん？　と。

「ホムンクルスにご不満が？　それとも不調ですか？　その様な事が起きない様、調整をしたはずですが……いえ、イレギュラーというのは不意に訪れるもの。何かあるなら遠慮なく仰つて下さい」

「その、この身体つて……いえ、ナンデモナイデス」

「ふむ？　……ああ、容姿の話ですか？」

「え？　うん、たぶん？」

待つて、今何か女の子っぽい発言になった。そう内心で身体に引つ張られている感覚を味わっているうちにも、宰相が淡々とした様子で語り出す。

紳士的な事に露出高めの私の足には一切視線をやらす、こちらの目を見て。

「人間どもの価値観は不明ですが……そうすな。人形の魔族基準でしたら『極めて美しい少女』といったところでしょう。美しい、の部分は人に寄つて可愛らしい、と感じるかも知れませんが。まあ、些か華やかさには欠けていますが、そのぶん神秘的な気配がありますので……やはり人を引き付ける魅力には困りませんな」

「つ、つまり……」

「……ふむ、例えろと？　そうすな……街へ降りれば、注目の的でございますよ。今後実力を伴つていけば、魔王としての威厳もカリスマ性も充分に期待出来そうです。それと、吸血公が貴女をモデルに姿絵を書き出すでしょうな」

あのコウモリは、芸術にハマっておりますので。そう言つて一度口を閉じた宰相は……正気だ。間違いなく正気だ。あれ程私の容姿を淡々と褒めちぎっておきながら、正気。私には真似でない紳士ぶりだ。肉がついていた頃はさぞかしモテただろう……

……ふむ。しかし、あれだな。これだけ褒められると、悪い気はしない。

——いや、いや！　落ち着け。ちよつと気分を良くしてるんじゃない！　女の子の身体に満足するな!!

私は男だぞ?! そう内心で強く思い込み、決意し………だが、目の前の鏡を見てしまえば決意なんてどこかへと流れて薄れてしまう。

だって、カワイイし。この身体。褒められるのも気分が良い。

いや、落ち着け。落ち着くんた。いくら身体が可愛くても、中身は私。それじゃあ駄目だろう?! それと褒められると嬉しいのは分からんでもないが、理由が理由。喜んじやアいけない。私は男、私は男。女の子ではない………!

「思えば、第六魔王殿も時折少女の姿になっておりました。残滓故、概念を受けて変質しやすいとはいえ……あるいは、ホムンクルス自体が少女化しやすいのか……まだまだ研究の余地がありますな」

「概念を、受けて?」

「あの人が生きていたら。あの人がもしもこうだったら。そんな妄想にも影響されるという事です」

おう………気のせいであって欲しいが、心当たりが多過ぎる。あの作品とか、あの作品とか、あの作品とか。彼に留まらず、歴史的な人物は大抵我が祖国のオタク達に何度か女性化……つまりTSさせられてしまっているのだ。概念の影響は尋常では無かっただろう。ゴメンナサイとしか言いようが無い。

ホント、軍艦だろうが馬だろうが容赦なく女性化アンド美少女化させるからな………も

う、手当り次第に。そしてそれを私も楽しんでいた一人。同罪だ。

「ふむ。そのホムンクルスには第六魔王殿のデータを基礎として作り上げております。そういう意味では、少女化しやすかったのかも知れません……」

これが、因果報応か。

甘んじて受け入れるしかないというのか、TSを……私が彼らにした様に、今度は私の番だと。そういう事なのか……

「いや、少女で魔王としてのお仕事は……」

「可能です。貴方が魔王様の魔力を使いこなせさえすれば、ですが。………質問は無いようですな。では、訓練を開始しましょう」

どうぞこちらへ。そう言われて指し示された先に、突如として影が立ち上がる。黒い布が地面から立ち上がっている様にも、あるいは怪物の口にも見えるソレ。ソレに、私は飛び込めと言われているらしい。

躊躇は、一瞬。私は直ぐにソレに飛び込んだ。ヤケクソだった。

救いなんてありはしない。それだけを確信した私は、訳も分からず魔王にされ、女の子にされた私は……もう、自棄っぱちになっていたのだ。

こうなったらどうにでもなあれ、と。

人それを、諦めたとも言う……



立ち上る影に自棄つぱちになりながら飛び込んだ私は、気づけばどこも知れない荒野に居た。空は曇天。太陽ささぬ大地は赤茶けてヒビ割れており、いかにも魔王の領土と言わんばかりだ。

正しく不毛の地……そう身震いしているうちに、いつの間にか宰相が私の横に到着していた。後を追ってきたらしい。

「どうですか？ 我らの大地は。人間どもはここを魔界と呼びますが……」

「魔界……」

「魔界は別にあるのですがね。人間どもからすれば、この程度で魔界らしい」

奴らが我々をここに追い込んだというのに。宰相はそう忌々しげに吐き捨て、大地を見つめる。枯れ草の一つも無い赤茶けた大地を。

今のはどういう意味なのか？ 私がそれを問おうと……する暇はなかった。感慨を投げ捨てたらしい宰相が、私に指示を寄越して来たからだ。身体を動かしてみろと。

「簡単な運動で結構。まずは身体能力を確認して下さい。ここなら幾ら壊しても大丈夫ですのぞ」

そう大雑把な表現を交えながら言われた私は、大人しく身体を動かしかかる。

とはいえ、何せ少女の身体だ。しかも見た目からして非力そうだし、何かを壊せる様な大した能力は無いだろう。そう判断しつつ、軽くストレッチをしてみる。手足を伸ばしたり、その場で軽くジャンプしてみたり……

——ん？ 身体が軽い……？

気のせいだろうか？ 身体が軽い気がする。いや、気のせいじゃない。思ったよりもジャンプ出来る！ これは、一メートル近くジャンプしてるのか？

まさか、身体能力は見た目以上に高いのだろうか。そんな疑問を抱えつつ軽く走ってみれば……速い。予想以上に速い。具体的に何秒かなんて分からないが、陸上選手並みに速い気がする。しかもそれが本気ではないのだ……この身体はホームクルスだという話だが、いや、予想以上だな。凄まじい。

「ふむ、身体は問題なく動くようですね。結構。……では、あちらに用意した岩塊と鎧を破壊しましょう。まずは岩塊から」

「……あれを、ですか？」

宰相の指し示された先にあるのは、巨大な岩塊と無数の鎧だ。岩塊は二階建ての一軒家程の大きさがあり、鎧だつて鉄製の頑丈そうな物……確かにこの身体の身体能力はアスリート並みに高い様だが、幾らなんでもあのサイズの岩塊と鋼鉄の鎧を破壊するのは不可能だろう。

そう否定的になったのを察したのか、宰相が口を開く。問題はないと。

「魔王様の魔力は強大です。あの程度の物体なら容易く破壊出来ます。まあ、強大故に細やかな調整が難しく、複雑な術とは相性がよくありませんが……今回は問題無いでしょう。先ずは大雑把にブツ放すのが正解かと」

「大雑把に……」

「魔王様曰く、ゴツと放つのが楽なそうです」

そういえば9段の魔王様も言ってたな、ゴツとやればなんとかなるって。

いや、ゴツてなんだ……？

——こう、バトル漫画的なあれだろか……？

生身でビームを放つ様な、そういうやつなのだとすると確かにゴツとしか言いようがないかも知れない。

……やってみるか。こう、何か力を集めてゴツとやれば——あ。

「っ!？」

「その調子です」

瞬間、ナニカが出た。それはわずかな発光だったが、確かにナニカが放たれていた。突き出した拳から伸びた、炎の様な何か。これは、いけるかも知れない。

もつと力を込めてみて下さい。そう淡々と話す宰相の言葉に従って、私は更に力を込

めてみる。先程一瞬だけ見えた黒い炎。あれを放てれば、正しく魔王……！ そうなれば万が一にも宰相から殺処分される可能性は無くなるはずだ。

「——ヤァ！」

一撃入魂。意気込んで突き出した拳から、黒炎が放たれる。それは数メートル程直進して消えてしまったが……間違いはない。出た。出てしまった。魔法的な炎が、私から。

「出た……!?!」

「お見事です。黒炎ですか、魔王様も良く使っておられました。ホムンクルスの調整も上手くいっているようですね。貴方自身も素直で結構。では、引き続き岩塊を破壊して下さい。習うより慣れろ、でございます」

宰相の言葉にコクリと頷き、私は岩塊を破壊しにかかる。取り敢えず目の前まで近づいて……後はもう、八つ当たりだった。何が何だか分からないまま話が進んでムシヤクシヤしていたのだ。黒い炎を放って溶かし、拳と蹴りを叩き込んで砕き、再び炎を撒き散らす。

憂さ晴らしに丁度良いとボコボコし続ける事……数分。岩塊はガレキと化していた。そしてそのかいあってというべきか、私は私の身体の事を正確に把握するに至る。つまり……

——強いぞ、この身体……！

宰相が問題無いと豪語するだけある。ちよつと肩慣らしした程度でこれ程とは、凄まじい性能だ。訓練すればどれだけの能力になるのか……考えるだけで身が震えるというもの。

見た目も悪くないし……これで中身が私でなければなあ。

「結構、結構。では次にあちらの鎧……あれらを一撃で破壊して下さい。失敗した場合はやり直しです」

もつと

——ヤア！

「よろしい。筋が宜しい様で、わたくしも一安心です。……混ざり物なのが、かえって良いのかも知れませんな」

一人では知れない事も、複数人なら知ってる事も増える。

「主たる人格は一つ、それに複数の残滓が混ざり込み……しかし魔王様の魔力が絶妙にコントロールする事で人格崩壊を防いでいる。……コレ、最終的には魔王様の魔力に影響された人格が残るんですかね？ それなら世界にもよく馴染みそうだ」

キイイン——

警報。

「今の、は……」

「勇者ですな」

「勇者……！」

「ふむ？ 魔王様の魔力の影響、予想より強いですか……？」

「宰相」

「はい、何ですか？」

仕事する

「では、ゲートを開きます。……ご武運を、魔王代理殿」

やる

……

……

……

ゲート、と言うらしい影に飛び込んで。私は再びどこも知れない荒野に居た。

「居たぞ！ 魔族だ！」

挨拶でも……

「死ねえ！」

ひえっ

「よくも仲間を！」

いや、正当防衛……てかホントに死んだ？　なんか手応え無かったし、光になった辺り……どこかに転送された感じするんだが。

「うおおお！」

光が飛んで来たあ!?

人の話を聞けー!

「ぐっ、だが俺は負けん。次こそは魔王を……」

「いや、負けたよね……?」

コワイ

人外モノ

人外モノ

目覚めた時、私は空腹だった。

いや、あの時の私に空腹という概念があつたかは定かではない。何せ、あの時はまだ脳ミソは無かつたのだから。

しかし、腹が減っているという事だけは理解出来ていた。それは間違いない。

そうして私はそこらを這いずり回り、やがて食い物を見つけるに至る。目も見えない……いや、目も存在しないのだから当たり前だが、まあ、何とか食い物を見つけたのだ。私の身体に触れたナニカ。そのナニカの上に覆い被さり、私はそれを体内に取り込んだ。……分かつていたのは、ソレが食い物だという事。少なくとも生きている生物ではない……つまりナニカの死体だという事。そして、ソレはナニカの腕なのだという事。

——いや、ナニカ……なんて誤魔化すのは止めよう。アレは、アレは少女の腕だった。何故少女の腕が地面に転がっていたのかは分からない。だが、あれは人の……少女の腕だった。

それが分かったのは、私が少女の腕を食い終わり……私自身が変貌した時。目と、脳ミソと、その他諸々を手に入れた時。そして私自身が、バケモノだと自覚した時。

叩き付けられた情報の波に、私は混乱した。混乱して、何故だか悲しくなつて泣いた。泣きじやくつた。まるで子供の様に。

……そうしたアレコレを除いて結論だけを言えば、私はバケモノだった。それも恐らく、体内に取り込んだ生物に擬態するタイプのバケモノだ。近い存在だとドツペルゲンガーだろうか？ それのスライム版だと言えばいたいあつている。死角から獲物に襲いかかり、吸収、擬態し、その姿で獲物の仲間のところへ向かつていく。そうして仲間だと油断している獲物を背後から襲つて喰らい、吸収、擬態し、そしてまた喰つた奴の仲間へ……そういう事をするバケモノだったのだ。私は。

私は、私が食つた少女の姿になつていた。

近くにあつた割れたガラス。そこに映つていたのは可愛らしい少女の姿だ。スライム状のバケモノはどこにもおらず、幼い少女がそこに居た。不思議そうに首を傾げ、白衣を一枚だけ身にまとつて。……ああ、だが本来のこの娘は死んでいるのだ。私に食われて……否。私が食つたのはあくまで死骸である。それも腕だけ。

そこに気づいた私は慌てて周囲を見渡し、愕然とした。ガレキしかなかったからだ。右を見ても左を見てもガレキばかり……まるで巨大なナニカが暴れた後の様だった。

——いや、事実そうだった。私の知らない私が、私が食った少女が覚えている。巨大なバケモノに街が破壊され、自らも身体を食い千切られた事を。

私の眼からは、自然と涙が溢れていた。

何故かは分からない。擬態したときに記憶まで引き継いでしまったせいだろうか？

何故だが悲しかった。巨大なバケモノが街を破壊していく光景も、自らが食い千切られる瞬間も、食い千切られる痛みも、私は全て知っている。知ってしまった。

「あ……」

恐らく、私が食べた腕は食い残しだったのでだろう。少女の身体の大半はバケモノの胃の中で、口からはみ出た腕だけがこぼれ落ちた……そんなどうしようもない事に気づいて。殆んど同時に私は別の物にも気づく。

写真だ。

少女の持ち物だったのだろうか？ そう思いながら何気なく地面に落ちた写真を拾い上げて……また泣きたくなかった。

「幸せそう……」

そこに映されていたのは、幸せそうな家族の姿。医者だったのだろうか？ 白衣を来た二人の男女と、その子供が映されていた。

気難しそうな白衣の男性は無表情に、目線だけは暖かに子供の方を見守りながら。そ

して白衣の女性は椅子に腰掛けて膝の上に子供をのせ、その子供に視線を向けて微笑みながら。そして……子供は、無邪気に、嬉しそうに笑っていた。父と母に視線を合わせ、幸せそうに笑っていた。私が死骸を食べてしまった、今の私にそっくりな少女は、幸せそうだった。いや、この家族そのものが幸せそうだった。

けれど、今は誰も居ない。子供の父と母はガレキに押し潰されるところを少女が目撃しており、少女自身はバケモノに食い殺されて死んだ。……その死骸さえ、バケモノに食われて。その姿を真似されて。

「——っ!!」

私が舌を噛み切らなかつたのは、殆んど偶然だろう。今私が真似しているこの姿もまた、少女の物だと気づいて……死ぬなら少女の姿を解いてからにするべきだと気づけたのは、偶然に過ぎなかつたのだ。

そして、私は気づく。少女の身体を解けない事に。少女を開放して、元のバケモノの姿に戻れない事に。

少女の身体を捨てたくない訳ではない。本当に分からなかつたのだ。バケモノへの戻り方が。

——おおかた、私は出来損ないなんだろう。

薄々、分かっていた事だ。

私はバケモノとして出来損ないだった。最初に視界が無かった事も、少女の境遇に涙が出る事も、身体を元に戻せない事も……いや、こうして思考している事そのものがバケモノとして出来損ないの証拠だった。

バケモノは考えてはいけないのだ。だってそれは、バケモノの仕事じゃないだろう？

——少女の記憶に無い知識もある………何かが混ざったのだろうか？

少女の記憶とはまた別の、出どころ不明の知識も不可解だった。恐らくこれのせいで私はバケモノらしいバケモノでいられないのだろう。

我思う、故に我あり。

それは知的生命体の特権で、バケモノの特権ではないのだから。

——何故こんな知識があるんだ。何故私はここにいるんだ。私はいつたい………なんだ？

私の生まれた意味とはなんだ？ こんな知識まで与えられて、そのせいでバケモノとして出来損ないに生まれて、そのクセ少女の遺体を食べてしまった。

そして今も、少女を冒流している。死んだ人間の姿を、偽り続けている。これが死者の冒流でなくなんだというんだ？

私が生きている意味なんてあるのか？ いや、そもそも生まれた意味があるのか？

私ただ、少女を冒流しているだけだ。幸せそうな家族を、馬鹿にしているだけだ。

にも関わらず死ぬ事も出来ない。私が出来損ないなせいで、少女への冒瀆を止める事も出来ない。……私なんて、生まれなければ良かったのに。そうすれば少なくとも、少女は不必要に食われず済んだだろう。

——何故だ。何故だ私は生まれてしまった。誰が私を生んだのだ。誰も頼んではないのに！

その感情を、私は上手く言葉に出来ない。ふつつつと湧き上がる熱いそれは憎しみの様であつたが、同時に目に溜まっている涙は悲しみの証拠であつた様にも思う。

……私は、私は、結局何もせずにそこに居た。暫くの間、何も出来ずに。

そうして、幾らかの時間が過ぎて。私は足を踏み出して歩みだした。理由は特に無い。ただ何となく、その場に居るのは居心地が悪かつたのだ。少女の持ち物だつたのだろう写真を供えるようにして地面に置き、私はその場を離れた。

「ガレキと、死体ばかりだ……」

そうしてその場を離れて、歩き出した私。しかし、その視界に映る物は……不愉快になる物ばかりだつた。

恐らく少女の一家だけではなく、街全体が攻撃を受けたのだろう。少女の記憶にあるような華やかな街はどこにも無く。ただガレキと死体が転がっていた。

それでも、私の中にある知識は冷静に、あるいは冷淡に情報を取得してみせていた。

例えば、街の文明レベルが高い事。ヨーロッパ風の華やかな町並みだが、街灯や銃火器がある程度には文明レベルが高い……らしい。知識が私自身に根ざした物ではないせいで、らしいとしか言いようがないが……間違いないだろう。少なくとも私に備わった知識からするとそうなる。

それと、街はバケモノどもに対して奮戦してみせた様子。人間の死体の数と比べると少ないが、バケモノの死体も幾らか転がっているのだ。それなりに戦いにはなつたらしい。例えば道路を塞ぐ様に土のうやガレキで即席の防御陣地を構築し、そこから銃火器で応戦していたようだ。重機関銃にこびり付いた肉片を見ながら、私はそう思った。……この射手はどんな死に方だったのだろうか？ いや、少なくとも酷い死に方だったのは間違いない。死体はこびり付いた肉片しか残ってないのだから。

「酷い……」

酷い戦いだ。これが、この世界なのか。バケモノと人間が殺し合うのが、この世界か。そう私が悲観して、しかし私の知識は街側が使っていたらしい武器に疑問を覚える。重機関銃、対戦車狙撃銃、爆薬、地雷、対戦車砲、迫撃砲、手榴弾、グレネードランチャーにロケットランチャー……どうにもバケモノは装甲車以上の防御能力を持っていたらしい。街側の武器にそういう対装甲兵器用の武器が多かった。勿論、ライフルやマシンガンの類もあったのだが……比率が偏っていたのは間違いない。

にも関わらず、だ。それとは別に近接戦闘用の武器も目立った。剣や槍の類いだ。決定的なのは、バケモノに騎兵槍……ランスを突き込んで死んでいる鎧姿の死体だろう。反撃を受けたのか身体の半分が無くなっているが、ランスと鎧で身を固めていたのは間違いない、それでバケモノに致命傷を与えて仕留めたのも間違いない。

……奇妙な話だ。対戦車用の武器が山程あるのに、それと同じくらい近接戦闘用の武器も使われている。しかも近接戦闘用の武器を使っている連中の戦果は大きい。頭を大剣で力ち割られて死んでいるバケモノを三匹は目にして、その後それをやってのけたらしい大剣を手に持ったまま下半身を無くした死体を見て。

私は酷い現実のうちむきながら、しかし内心で首を傾げる。奇妙な事だと。私に備わった知識を持ってしても、奇妙だとしか言いようがない。バケモノを出来損ないにしてしまった知識を持ってしても、だ。

——しかし、知識の持ち主がいたとするなら、その人物はどんな修羅場をくぐってきた戦士なのだろう？ やたら武器に詳しいが……

そこらに転がっているよく分からない鉄屑も、一目見れば知識が答えを返してくれる。あれは対戦車狙撃銃だ。あれはロケットランチャーだ。あれはトーチカだったに違いない……どうにも知識の情報源は『げーむ』とか『てれび』であるらしいが……私はそのような物は知らない。いや、正しくは今知った。そうか、ゲームとテレビはそういう

ものなのか。

……私は、少女以外の者も食べてしまったのだろうか？ それとも、それとはまた別口で流入してしまったのだろうか？ 私には分からない。自身の事すら分からない私には。少なくとも、知識は答えてくれなかった。

「酷い、世界だ」

いったいどれだけのガレキを、死体を、見ただろう？ 私は疲れ果てていた。

死にたかった。

だが、死ねなかった。思わず座り込んで、しかし対面にヒビ割れた鏡が落ちていたばかりに。……鏡の中に映るのは、少女の姿だ。私が食ってしまった少女の姿。可愛らしい、幸せだった少女の姿。もし私がこの姿で死ねば、少女は二回も死ぬ事になる。それは……良くない事だと思ったのだ。せめて少女の姿以外に、元のバケモノの姿に戻って死なねば。

これ以上、少女を冒瀆してはならない。

「髪色は、違うけど……ね」

ガラスで見たときには分かり難かったが、鏡に映った今ならよく分かる。少女と私は顔だけが同じで、それ以外は色々と違う。

例えば肩口まで伸びた髪、私の色は雪の様な白だ。そして瞳は血の様な赤。

少女は、違った。写真では金髪で、それに青い目をしていた。

そして私にはケモノのミミと尻尾がある。

しかし少女にはそんな物は無かった。

……だから、厳密には私と少女は違うのだ。顔は一緒だが、髪と瞳の色、それに身体的特徴も違うのだから……別人といえれば別人だった。

——たぶん、色や身体が違うのは私が出来損ないなせいだろうけど……

あるいは、少女の腕以外に何か食ってしまったのか？

何にせよ、可能なら顔も違う方が良いだろう。バケモノはバケモノとして死ぬべきなのだ。

まあ、死んだら擬態が解ける可能性もないではないし、最悪このまま死んでも……いや、しかしな。

そう、思考していたのが悪かったのだろう。私はその存在に気づくのが遅れた。

「生存者……だと!？」

「……誰？」

人間だ。生きている人間が居た。

私は、生きている人間と出会ってしまった。……死んだはずの少女の姿を借りたまま。



私が少女の姿を借りたまま生きて人間に出会って、数分。私は生きて人間に保護される事になった。

……当たり前の話だ。本来のバケモノたる私ならともかく、今の私は見た目だけなら守られるべき少女で、生きた人間……いや、大柄な若い男である彼は救助隊だったのだから。

いや、それも正しくないか。彼は傭兵であるらしかった。彼が言うには、だ。

「まさか、生存者とはな……」

「……………」

「いや、何も言うな。俺が安全な場所まで連れて行ってやる。心配するな」

先程通信機らしき物でどこかと連絡を取った彼は、私を連れて後退する事になったらしい。本部まで……というより、このまま安全な街まで。

私が擬態型のバケモノだったらどうする気なのだろう？ いや、擬態型のバケモノなのだが。私は。

「お父さんとお母さんもきつと、無事だ。大丈夫だよ」

「いえ。父と母はガレキに押し潰されて……」

「っ！ ……すまない」

失言だった。その後悔出来る彼は……良い人なのだろう。少し考えが足りない様子だが、それも真つ直ぐだからこそ。総じて良い人だと言える。

……彼にバケモノである事を気づかれる訳にはいかない。彼に少女を殺させてはいけない。殺されるなら、バケモノの姿で殺されなければ。少女に二度目の死を与えてはならないのだ。

——だが、私はバケモノの姿に戻れない……

出来損ないの私は自在に擬態能力を使いこなせていない。元の姿にすら戻れないのだ。となれば、少女に二度目の死を与え無い為にもバケモノである事を何とか隠さなければならなかった。

幸い、擬態能力だけは正常に働いているのか、彼に気づかれた様子は無い。本来ならばこの姿に油断している彼か、油断するだろう街の人間を襲う為の能力なのだろうか……何にせよ、上手くやらねば。

「ん？ 失礼、通信が入った」

「いえ、どうぞ。お気になさらず」

「助かる。——俺だ、どうした？ 何？ 音声データを見つけた？ ……流せるか？」

「ふむ？ どうやら仲間から通信が入ったらしい。」

「とはいえ、私を気にする必要は無い。遠慮なく出てくれと言外に促せば……どうにも

彼の仲間は音声データとやらを見つけたらしく、彼もそれを確認する様だ。いったい何の音声データなのやら。そう何気なく耳をすましてみれば、誰かの声がする。音声データというのは何かの会話を記録した物の様だ。

『これがその実験体かね？ ……ただのスライムではないか』

『いえ、完全擬態能力を持った変異型のスライムです。それにコントロールする為、ある程度の知能や仕掛けを施してあります。これを使えば如何にあのバケモノ共といえど……！』

『毒を持って毒を制するという訳か……直ぐに使えるのかね？』

『いえ、残念ながら……』

『そうか。なら、今町を襲っている連中は現存の戦力で対応せねばなるまいか。……そういうえば、キミ。娘が居たのでは？ 避難させたのかね？』

『はい。間もなくこの研究所に——』

彼が持つ通信機から聞こえるその声達は、どこか見に覚えのある話をしていた。完全擬態能力を持ったスライム……まさか、私の事か？

『エマージエンシー！ エマージエンシー！ 敵襲！ 敵襲——！』

私は研究所で造られた存在だというのか？

そんな疑問を抱えさせられた私は、より一層聞き耳を立てるが……残念ながらという

べきか、音声データは破損しているらしい。会話は途切れ途切れになり、酷いノイズまで混じっている。何を話しているかは全く分からず、辛うじて切羽詰まった声が敵襲を知らせた事が分かるのみ。それだって再びノイズで後の言葉は分からなかった。

……だが、何となく分かる。音声データが破損して当たり前の様な、そういう酷い状況だったのだと。

『ここまでか……実験体を全て放て！ 最後まで戦い抜くぞー！』

『駄目です！ 外壁突破されました！ 町は……壊滅状態！ 対応可能な戦力もありません！ このままでは……！』

『ならば自爆するのみだ！ ——人類に……！』

『所長！ 上です！』

『バカな、早す——』

ブツリ、と。そこで音声データの再生は止まり、発見者なのだろう男の声が「以上です」と告げてくる。

それに、私はただ呆然とするしなかった。短い音声データだったが、しかし、その内容があまりに衝撃的だったが為に。

「なるほどな……自爆には失敗したか。いや、了解した。私はこのまま帰る事にする。ああ、ああ、そちらも気をつけてな」

私が研究所で造られた存在。造った者は既に襲撃で死に絶えている。

そんな事を辛うじて認識した私は、通信を切った男に促されて壊滅した町を歩く。町から出る方向へと。

「どうすれば……」

そう口にする

「と

」

ふむ

話す

……

……

……

町での日々。

魔法少女モノ

プロローグ

西暦2020年。日本に置いては令和2年となった新時代……しかし、人々の暮らしは特に変わる事も無く続いていった。

今日、この日までは。

「信じられません！ 全く信じられません！ 未だかつてこのような事があつたでしょうか？ 前代未聞です！」

あり得ない。それはその場に居る者全ての声であり、現場に居るテレビレポーターの現実逃避じみた声だった。

彼らの視線の先に居るのは、たった一人の少女。丈の長いケモミミパーカーに身をつつみ、月明かりに照らされながらビルの屋上に佇む彼女は、肩口を越えて伸びる長い白髪を風になびかせながらその手に持った「武器」を構える。巨大で、無骨な、「対戦車ライフル」を。

アンチマテリアルライフル、あるいは対物ライフル。現代ではそう呼ばれるライフル達の始祖は極めて強力な武器だ。30ミリ程度の鉄板なら容易に貫通する威力を持ち、

装甲車程度なら容易く撃破可能。更に狙撃銃としても一定の優秀さを持ち、遠方の目標を粉碎する能力を持ち合わせる。個人携行火器としてはかなり強力な部類に入るだろう。

しかし……実際のところ、この手のライフルはあまり一般的ではなく、戦車が進化していく脇で陳腐化し、最終的に限られた用途にしか使われなくなつた歴史がある。しかも現代において少女が持っている様な古いタイプの対戦車ライフルは、博物館か好事家しか持っていない様な骨董品も同然。何せ対戦車と良いながら戦車を破壊する程の火力は無く、しかし人間に向けるにはあまりに過剰威力で取り回しが悪かつた為に。生産数もさほど多くなければ、現存数もそう多くないのだ。ましてや銃規制の厳しい日本では、間違つても子供が持つていて良い品ではなかつた。

そんな時代の流れに飲まれた古い武器を、少女は何に使おうと言うのか？ いや、そもそもなんだつてそんな武器を持つていいのか？ その答えは少女の視線の先にあつた。

『!!』

空間を引き裂く様な、おぞましい叫び。

泥に闇と影を混ぜ込んでこね合わせて作られた様な、黒く巨大なナニカ。全長十メートル以上、恐竜にも似た二足歩行のケモノがビル影から顔を出す。ソイツはもう一度お

ぞましい叫びを上げ、足元にあった無人の乗用車を踏み潰した。まるで挑発する様に。

「押さないで！ 落ち着いて避難して下さい！」

「見えますでしょうか!? バケモノです！ バケモノが街を歩いて居ます！ これは怪獣映画やSF映画ではありません！ 実際の街をバケモノが——」

「ワシの車がぁー！」

「ジジイ退け！ 邪魔だ！」

「押さないで！ 押さないで！」

「足を踏むな！」

「助けてくれえ！」

とても現実とは思えない突然の事態に怒号が飛び交い、混乱が広がっていく。そうしてパニックに陥る民衆を他所に、ビルの上で小柄な少女は対戦車ライフルを静かに構える。任せておけと言わんばかりに。

なるほど、バケモノを相手にするなら対戦車ライフルを引つ張り出したくもなる……そう納得出来る者が民衆の中にどれだけ居ただろう？ しかし、少女にはそんな事は関係無かった。彼女はバケモノに向けたライフルの引き金を……そつと引く。瞬間、凄まじい炸裂音。

砲音にも似た発砲音と共に放たれた弾丸は、真つ直ぐにバケモノの脳天目掛けて直進

し——ズドツ！ と、バケモノを殴り付ける様にして命中した。グラリとバケモノの身体が傾いていく。

「おお!! やつたか!!」

誰だ秒速でフラグを立てたのは。テレビレポーターだ。口を閉じてろ。

そう誰かが罵倒する暇もなく、脳天を穿たれたはずの……いや、脳天に穴が空いているバケモノが姿勢を持ち直す。揺れた身体で立て直し、ズシンと大地を踏み締めて。頭上に居る少女を睨む。光を返さぬ泥の様な目で。

「……死なない、か。まあ、そうだよね」

そう呟いた少女の声は、誰にも聞こえる事なく闇夜に溶けていく。

バケモノと同じ様に光を返さぬ、ハイライトの落ちた暗い瞳で眼下を見下ろし……突然、飛び降りた。

もしや投身自殺か？ そう見物人が焦る中、少女は手に持った対戦車ライフルを空中で乱射する。一発、二発、三発。連続でトリガーが引かれる度に凄まじい発砲音が響き、バケモノに穴が増えていく。……だが、死なない。バケモノは死なない。泥人形に穴が開いたところで致命傷にはならないと言わんばかりに。

そして、少女はバケモノの頭上、一メートルのところまで落ちて——そして。

「死ね——!」

殺意しかない叫びと共に、少女の落下速度の乗った鋭い蹴りがバケモノの鼻面に叩き込まれる。

瞬間、骨を砕く様な破砕音が響き渡り——ドツ、と。バケモノがガードレールを押し潰しながら地に倒れた。そして一拍遅れて少女がバケモノの横に着地する。危なげもなく。

「はふう……」

ビルの屋上から飛び降り、バケモノに蹴りを食らわせたというのに少女は全くの無傷だった。軍人ですら運ぶのに苦勞する対戦車ライフルを片手で持ちながら、少女は小さく息を吐く。一安心とばかりに。

だが——彼女に、休んでいる暇は無かった。

「給料分は働いたんだけど……駄目かあ」

残業代つてあるのかなあ？ 無いよねえ。

そんな事を呟く少女の目の前に、先程倒したバケモノと同種のバケモノがビル影からのそりと顔を出し——吠える。パニックの度合いを強める民衆の中に、あれが量産型だったらしいと気づけた者がどれだけ居るだろう？ いや、居たとしてもどうにか出来る者は……一人しかいなかった。

故に、少女は地を蹴って駆け出す。対戦車ライフルを乱射しながら、バケモノへと！

「いのおー」

「！！」

少女とバケモノが吠え、お互いの力と力がぶつかり合う。

閃光が弾け、肉がひしゃげ、コンクリートが叩き割られる。

その戦いは非日常的で、しかし、これが少女の日常だった。今まで何度となく繰り返した闘争の延長線上の事ではない。……だが、世界が壊れたのはこの日だったのだ。

……

……

……

そして、後日。少女は正義の魔法少女としてあちこちで取り上げれる事になる。多くの謎を残しつつ、批判や好奇の目をぶつけられながら。

あの子のおかげで助かった。もっと被害を少なく出来なかったのか。綺麗な女の子だった。助けに来るのが遅い。対戦車ライフルとはロマンを分かっている。子供を戦わせて政府は何をしているのか。パンツ履いて無いのでは。あの子供が居たから襲われた。リアル魔法少女キタコレ。

……多くの、実に多くの声が飛び交った。

しかし、まさか、誰も想像すらしなかったに違いない。まさか少女が……TSした元

男
だ
っ
た
な
ん
て
事
は
。

掲示板 1

【過労で死んだはず】TS美少女になってしまった【トリックだよ】

1：TS美少女

どうすればいい？ 助けて、偉い人。

2：名無しさん

>>1

偉い人は助けてくれない。いじめられた時に学校で習わなかったのか？
自己防衛して、どうぞ？

3：名無しさん

>>2

涙拭けよ……

5：TS美少女

分かった。助けて、エロい人。

7：名無しさん

>>5

何が分かったんだこのマヌケエ……

8：名無しさん

>>>5

分からせられたいのか？　メスガキがよお……

9：名無しさん

というか、TS美少女ってなんだよ。どう見ても釣りじゃねえか！　何をそんなにマジになる事があるのか……自撮りはよ。

11：名無しさん

シレッと自撮りを要求するなw

ところで、どんな顔してるんです？

12：名無しさん

>>>11

(・▽・) オマエモナー

14：TS美少女

言われると思った……

URL※※※※

はい、どうぞ。

16：名無しさん

素直 w

……え？ マジ？

17：名無しさん

ロリキタ——（。▽。）——！！

18：名無しさん

ちっばい！ ちっばい！

19：名無しさん

ゴウランガ！

何という事か、表示された画像に映されているのは少女のエロ自撮りである！ 卑猥
！ 実際卑猥！ 顔こそ手で隠しているものの、その平坦な胸の南半球は露出してし
まっているのだ！

メスガキ！ 画像の中の白い髪の少女。彼女は実際メスガキに違いなかった！

20：名無しさん

これは中々の自撮り……ウツ、ふう。

21：名無しさん

通報しました。

……いや、どっちを通報すれば良いんだ？ ロリを誘拐したイッチを通報すればいい
のか、それともシコシコやつてる俺らが通報されるべきなのか……

22：TS美少女

はい、追加。

URL※※※※※

23：名無しさん

ヒュー！

こいつはたまらねえぜ。

24：名無しさん

顔を隠してちつぱい隠さず。エロ自撮りの何たるかが分かってますねえ！

25：名無しさん

シユレディンガールのパンツならぬ、シユレディンガールの顔と言う訳だ……

しかし、私には分かる。例え顔を隠していても、この少女は間違いなく美少女だと

……！ 私の下半身がそう言っている。

27：名無しさん

>>>22

しかし、よくポンポン送れるな……羞恥心とか無い訳？

28 : 名無しさん

ぐへへ、しかも貴重な白髪少女だ。俺には分かる。コイツはパチもんじゃねえ……光
彩具合からみて、間違いねえぜ。

31 : TS美少女

>>>27

正直混乱してて……よく分かんない。

それに顔見せてないから良いかなって。

33 : 名無しさん

はい、アウト。

34 : 名無しさん

>>>33

どっちが？

36 : 名無しさん

>>>34

両方なんだよなあ……

40 : 名無しさん

新しく人が来にくい様、スレに細工しないとな……

41：名無しさん

>>40

手伝うぜ

45：TS美少女

何だかよく分からないんだけど、頭がフワフワするだよ。というかこう、ふにやー

……みたいな。

3 徹キメたときはまた違う感じはするけど……うーん？

URL※※※※

いえーい。別アングル。私カワイイ。

46：名無しさん

>>45

今日は休め。

47：名無しさん

>>45

身体に引つ張られているってやつじゃねえの？ 知らんけど。

ほら、なんかケモミミ生えてるじゃん。……付けミミには見えんな。コレ。

49：TS美少女

んあ？ ホントだ。ケモミミ生えてる。

50：名無しさん

いまさら

51：名無しさん

気づかなかったのか……

52：TS美少女

ねむ……

53：名無しさん

何をされるでもなくTS墜ちしてますねえ。これは。

54：名無しさん

調教される前にTS墜ち……

55：名無しさん

なんでわざわざ調教するんだ？ モノを切り落としてTSさせちまえばスッキリするの。

56：名無しさん

もおー、パパったら過激派なんだ。

57：名無しさん

なんにしたって馴染むの早すぎるだろ。イッチに男としてのプライドは無いのか！

59 : TS美少女

実は昨日3徹+αさせられて……物凄く眠い。今も夢か何かだからどうでも良いかなって。

それに今度自殺する予定だし。

60 : 名無しさん

休んで、どうぞ。

61 : 名無しさん

人間、72時間寝ないと死ぬんだけどなあ。

63 : 名無しさん

>>>61

だから過労死したんだろ。いや、イッチの話が本当なら、だけど。

64 : 名無しさん

シレッと自殺云々をスルーするスレ民である。

65 : 名無しさん

>>>64

よくある話だからな。このぐらい。

66：TS美少女

正直今も夢心地で、自分が何やってるのかよく分かってない感じする。

今もこう、昔こういう事で騒いだなあ……みたいな感覚でカキコしてるし。

67：名無しさん

最近はめつきり少なくなったからな……祭りはさ。

68：名無しさん

懐かしいねえ。最近はちよつとギスギスしてるから、やりづらいのよね。

69：名無しさん

分かる。常駐する板無くなったわ。どこもギスつててなあ。

70：名無しさん

俺は減ったなあ。うん、昔が懐かしいぜ。

71：TS美少女

あ、良い感じの自撮り取れた。

URL※※※※

72：名無しさん

>>>71

だからって貼るんじゃないやありません！ いけない人に見られたらどうするの!?

73 : 名無しさん

>>>72

ママ!?

74 : 名無しさん

シャツチョサン、ビールノム？ ドンペリイレル？ シャンパンデタワーツクル？

75 : 名無しさん

>>>74

それは違うママだな。

76 : TS美少女

どうせ夢だし、身体はカワイイからメスガキムーブしてみようかなって。

ほれほれ、美少女の自撮りだぞー

URL※※※※

77 : 名無しさん

こ、このメスガキがよお……

78 : 名無しさん

(絶対明日後悔するやつだぞ、それ。寝不足で深夜テンションに入ってそのままランナーズ・ハイになってるだけだから)

79：名無しさん

(なら言つてやれよ……)

80：名無しさん

(ファミチキ下さい)

81：名無しさん

(こいつ直接脳内に……)

83：TS美少女

鏡の娘めっちゃカワイイ……マジ理想の美少女。

……あれ？ でもなんで鏡に映ってるんだろ？

85：名無しさん

3 徹させられた人間って、こうなるんやなって。

86：名無しさん

もう自分の名前すら分からなさそう。……酔っ払いとどっちがマシなのか？ コレガワカラナイ。

87：名無しさん

>>>86

分からののか！ この戯けが！

88 : 名無しさん

>>87

知っているのか!? 雷電!

89 : 名無しさん

>>88

私にも分からん

90 : 名無しさん

駄目じゃねえか……

92 : 名無しさん

何が始まるんです?

93 : 名無しさん

>>92

大惨事大戦だ。

94 : 名無しさん

シレッと台詞帰ってくるの久しぶりなんじゃー

……なんでここ、こんなに組合員多いの?

絶滅危惧種のはずなのに……

95：名無しさん

>>94

ヒント、スレタイ。

97：名無しさん

組合員!?! バカな、インターネット老人ホームにブチ込まれたんじや……

98：名無しさん

残念だったな。トリックだよ。

99：名無しさん

口だけは達者な組合員ばかりよく集めたものですね。全くお笑いだ。

メイトリクスが居れば、奴も笑うでしょう。

100：名無しさん

君、ここにいる者は皆、ロリコンだ。

101：名無しさん

ただのカカシですな。

103：名無しさん

>>100

ロリコン扱いするなw

まあ、ロリコンだけど（真顔）

104：名無しさん

>>103

うわあ、急にシラフになるな！

105：名無しさん

ちくわ大明神。

106：名無しさん

組合員っていうか、ただのインターネット老人なんだよなあ

107：名無しさん

誰だ今の。

108：名無しさん

インターネット老人会はここですか？

109：名無しさん

>>108

いいえ、ここはTS美少女の自撮り会場です。

111：名無しさん

実際、TS美少女ってマジなのか？

112 : 名無しさん

釣り……にしては良く出来てるんだよなあ。

120 : 名無しさん

TS美少女……ああ、思い出した。たぶんこれじゃね？

URL※※※※

123 : 名無しさん

>>120

なんぞコレ？ 論文？

124 : 名無しさん

英語いっぱい！ 分かんない！

125 : 名無しさん

英語いっぱいだねえ……てかおい待て、この紋章は……！

126 : 名無しさん

うわあ。米有名大学の論文じゃん。

で、何書いてるの？ (英語のテスト点数一桁)

127 : 名無しさん

私にも分からん (英語のテスト点数一桁)

129 : 名無しさん

人間が突然TS……男が性転換して美少女になってしまう奇病に関するレポートだな。

世界的に見ても症例は少なく、治療法も無いらしい。……ただ、これが公開されたのはエイプリルフルでなあ。

130 : 名無しさん

>>129

ジョークか。

131 : 名無しさん

>>130

の、はずなんだが……

エイプリルフルはエイプリルフルでも、午後の公開だったんだわ。

132 : 名無しさん

?

133 : 名無しさん

ああ、エイプリルフルは午前中までらしいからな……つまり？

134 : 名無しさん

ジョークに見せかけたマジ。もしくは警告だったんじゃないかなろうかと……

135：名無しさん

なるほどな……だつてよイツチ。

137：名無しさん

あれ？ イツチは？

139：名無しさん

寝たんじゃね？

140：名無しさん

イツチを起こさないでくれ。死ぬ程疲れてる。

141：名無しさん

>>140

死んだんだよなあ……なおTSした模様。

142：名無しさん

TSしたつて信じる方向性でオケなの？

145：名無しさん

ウソをウソと見抜ける奴は増えたが、ウソをウソと楽しめる者は減った。

つまり、そういう事だ。

146 : 名無しさん

インターネット老人ならウソをウソと楽しむくらい余裕なんだよなあ。

147 : 名無しさん

>>146

セヤナー

149 : 名無しさん

実際どつちでも良いからな。新手的釣りにせよ、マジにせよ、現状俺らは得しかしてないし。

150 : 名無しさん

ネットリテラシースキルが低いままの連中と一緒にして貰っては困るといふもの。この程度はベイビーサブミッション。

151 : 名無しさん

それもそうか。

……ん？ でもそうなると、さっきの論文はどうなん？

152 : 名無しさん

>>151

あれはマジだぞ。調べてくれてもいい。

153 : 名無しさん

調べてくれてもいい（ソースが外国なので調べにくい）

154 : 名無しさん

ていうか、あの論文もつと騒ぎになつてもよくな？

こう、ジエンダーの云々とかで叩かれそうじゃん。

155 : 名無しさん

>>154

そう思うだろ？ これがサツパリなんだわ。

どうにも、ジョークだと思われたらしくてな……

156 : 名無しさん

>>155

そらそうなる。

……ん？ これ発表者、日本人じゃね？ 英語は毎回赤点だった俺でも名前が読めるんだが。

158 : 名無しさん

>>156

日本人だよ。

そのせいなのかね？ クソ真面目な日本人でもエイプリルフルになったらジョークを
言えるらしい……って受け取られてる。

160：名無しさん

エイプリルフルでなくてもジョークぐらい言えらあ！

えつと……布団が吹っ飛んだ！

161：名無しさん

さむ。

162：名無しさん

この部屋エアコン効きすぎてね？

163：名無しさん

地球って今は氷河期らしいな。

164：名無しさん

ジョークじゃなくて親父ギャグなんだよなあ。

165：名無しさん

頭叩いたらいい音がなりそうだな。木魚の代わりになるんじゃないか？

166：名無しさん

>>165

それは嫌味。

167：名無しさん

大変素晴らしい頭脳をお持ちの様で羨ましいですわ。地球温暖化対策にも熱心な様で関心します。

168：名無しさん

>>167

それは皮肉

169：名無しさん

救急車を呼ぶ前に怪我人の生死を確認しろだつて？ OK！（ズドン！）よし、間違

いなく死んだぞ。……で、どうすればいい？

170：名無しさん

>>169

それはブラックジョーク。

171：名無しさん

まともなジョークも言えないのか！

172：名無しさん

……で、イッチホントに寝てね？

173：名無しさん
寝てますねえ！

174：名無しさん

はーつつかえ。

175：名無しさん

でも美少女の寝落ちなら許せる。許せない？

176：名無しさん

許せる。オッサンだったら叩き起すけど、美少女の寝落ちはな……

177：名無しさん

男尊女卑ならぬ、男卑女尊の現実である。

178：名無しさん

美少女だからね。仕方ないね。

180：名無しさん

カワイイは全てを解決するのだ。

……

……

…

301：名無しさん

イツチ帰つて来ないなあ。……組合員の保守雑談でスレ消費しちまうぞ。

302：名無しさん

ネタ切れだったのかね？

まあ、オカズが増えたから俺は別に良いけど。

303：名無しさん

TS美少女とか、面白そうだったのになあ……

304：名無しさん

>>303

小説でも書いてて、どうぞ。

305：TS美少女

あの、すみません。

さっきの事は無かった事にして下さい……

306：名無しさん

イツチ！

307：名無しさん

正気に戻ったか？ ん？

309：TS美少女

はい……少し寝落ちして、その、画像の削除って……

310：名無しさん

無理だな

312：TS美少女

ですよ……

取り敢えず相談したい事があるので、少し良いですか……

314：名無しさん

(暇つぶしにはなるから) ええで。

315：名無しさん

仕方ないにやあ。

320：名無しさん

そんな事よりおうどん食べたい。

掲示場 2

3 4 0 : T S 美少女

これから、どうすれば良いですか……

3 4 1 : 名無しさん

俺らに聞かれてもな……

3 4 2 : 名無しさん

取り敢えず、今までの経緯をまとめてみたらどうだ？

何か分かるかも知れん。

3 4 3 : T S 美少女

ん……

3 4 5 : 名無しさん

(精神まで T S してない？ アレ)

3 4 6 : 名無しさん

(言ってやるな)

3 4 8 : T S 美少女

会社で3徹キメる。

← 上司から押し付けられた分が終わらなかつたので、アパートまで持ち帰って仕事を続ける。

← この時点で身体はかなりヤバかつた。

← 意識が落ちる。たぶん死んだか……最低でも気絶。

← 目が覚めたら美少女になつてた。

349：名無しさん

サツバツ！

しかし、ブラック企業のサラリマンがカロウシするのは実際よくある事である。

350：名無しさん
なるほどなあ。

にしたつて美少女強調するなしw

351：TS美少女

はい、今の私。

URL※※※※

352：名無しさん

だから迂闊に画像をアップするなど……は？ マジ？

353：名無しさん

おいおいなんだこの白髪赤目の神秘系美少女。

354：名無しさん

これはメインサブヒロイン。

355：名無しさん

>>354

どっちやねん。

356：名無しさん

いや、隠しヒロインか……？

357：名無しさん

いわゆるアルビノ美少女か。しかしこの光彩、ただのアルビノとも思えん……

360：名無しさん

事あるごとにヒントを出してくれたり、行く先々で主人公にだけ姿見える少女感あるな。

後、その後一回行き違いで敵対したあと、終盤で仲間になってくれるヒロイン感もある。

る。

361 : 名無しさん

>>360

的確。100アグニカポイントをやろう。

362 : 名無しさん

>>361

何にも使えんポイントじゃないか……

363 : 名無しさん

ならグリフィンドールに100点入れとくわ。

364 : 名無しさん

はいはいグリフィンドール鼻肩グリフィンドール鼻肩。

365 : 名無しさん

紅茶中毒者ってそういうところあるよな。

366 : 名無しさん

パンジャンドラムがどうしたって？

367 : 名無しさん

いや、紅茶だろう。

368：名無しさん

やめろよ！ メシマズをパンジヤンドラムとか紅茶とか言うの！

369：名無しさん

オマエモナー

370：名無しさん

ハボクツク！

372：名無しさん

いや、ちょっと待てよ。イッチ、顔を映しているのか？ ……いや、そもそもアップするなよって話だが。

374：TS美少女

>>372

もう会社行きたくないし、どうせ自殺するし……画像ぐらい良いかなって。

それに中身は私だけど、この身体は理想の美少女だからね。記録には残しておきたい。

376：名無しさん

そんなに会社行きたくないのか……

377：TS美少女

あんなブラック企業潰れば良いんだよ。玄関先で首吊り自殺してやる……！

378：名無しさん

会社の玄関先で美少女が首吊り自殺……うわあ。うわあ。

379：名無しさん

遺書でも置いておいたらトドメさせるな。お父さんの仇とかなんとか書いてれば。

あるいは少し騒ぎにしてもいい。世間は同情的になるさ……美少女の方にな！

少なくとも同じ場所で商売は出来まい。

380：TS美少女

ザマアみろ……ふふ。

381：名無しさん

けどよ、そもそも仕事せんでよくね？ ていうか出来なくね？

382：名無しさん

>>381

どういうことだつてばよ。

384：名無しさん

前のイッチと今のイッチは違うじゃん？

で、今のイッチが職場に行つたところで……なあ？

かといって前のイッチを探そうにも既に居ない。見つかるのは身元不明な美少女だけよ。

385：名無しさん
なるほどな。

386：名無しさん
それもそうだ。

387：TS美少女
もう、仕事しなくていい？

388：名無しさん
>>387

しなくていい。というか出来ない。

389：名無しさん
>>387

今日は休め。

390：TS美少女
やった！ お祝いにジュース買ってくる！

391：名無しさん

いてら。

392 : 名無しさん

いてら。

…お祝いがジュースカ。酒じゃないのな。

393 : 名無しさん

>>392

安月給だったんじゃないね？

394 : 名無しさん

悲しいね。バナージ。

397 : 名無しさん

というか、イツチの思考能力…いや、精神性というべきかな？

既にTSしてね？ 堕ちてね？

399 : 名無しさん

ブラック企業で過労死した後つばいからな…脳細胞は殆んど死滅してるだろ。

400 : 名無しさん

哀れな…

401 : 名無しさん

オツサンの過労死は流せるけど、TSされると哀れまずにはいられない……悲しみ。

402：名無しさん

はいはい女尊男卑、女尊男卑。

403：名無しさん

でも実際……なあ？

哀れなオツサンと、哀れな美少女を比べると……なあ？

405：名無しさん

平等とか存在せんのやで。学校で習ったろ？

406：名無しさん

なんなら家庭でも学べるぞ。格差なんて今更や。

407：名無しさん

せやな……

415：TS美少女

助けて。

417：名無しさん

お、どうした。

418：TS美少女

帰るところ、無くなった、

URL※※※※※

420：名無しさん

うわあ……燃えとるやん。

421：名無しさん

>>>418

特定した。

423：名無しさん

萌えてるの、イツチの住んどるアパートか？

こりゃあ……駄目っぼいなあ。

424：名無しさん

イツチ、どうすんの？ コレ、マジで。

住むところもそうだけど、金品の類いも燃えてるだろ。コレは。

425：TS美少女

全部アパートに置いてある。お金も、ピツタリ持ってきたからお釣りも無いよ……服も今着てるダボダボのしか無いし、持ち物もスマホしかない。

これは……公園で、野宿とかかな？

4 2 6 : 名無しさん

>>> 4 2 5

なめとんのか？

やられんぞ。幾ら日本の治安が良くても、限度がある。

4 2 7 : 名無しさん

4 2 6 >>> はエロ同人の読み過ぎ……とも言えんのよなあ。年間の変質者って割と居るし、ここ数年治安レベルが悪化し続けてる地域もある。

イツチがそこに住んでない事を祈るばかりや。

4 2 9 : TS美少女

不審者注意って立て看板ある……割と最近かな？ あんまり汚れてない。

駄目？

4 3 0 : 名無しさん

>>> 4 2 9

駄目。

4 3 0 : 名無しさん

>>> 4 2 9

アウト。

431：名無しさん

せめて何らかの施設に……そうだ、施設に保護されるのはどうだ？

432：名無しさん

施設か……色々大丈夫か？ それ。

433：名無しさん

親御さんに連絡を……とか言われたらアウトだろ。戸籍とかアレコレで。前のイツチと今のイツチが同じだと証明出来ん。

ゲームにもそう書いてある。

435：名無しさん

こおれは駄目ですねえ。

436：名無しさん

戸籍って大事なんやなって……

437：名無しさん

戸籍が無いとどうなるんや？ コレ。

色々不便そうやが。

438：名無しさん

>>437

不法入国者扱い……とか？

もしくは記載漏れとか。

439：名無しさん

身分証明書が必要なアレコレは全部駄目だろうな。

アパートどころか、レンタルビデオすら借りれんぞ。

440：名無しさん

もう、人身売買組織から逃げ出して来ましたとか言うしかないな。

441：名無しさん

うわぁ……うわぁ……

442：名無しさん

イツチ、イツチ大丈夫？

443：TS美少女

無理、自殺する。

自殺して無縁仏に突っ込まれる……

445：名無しさん

うーん、この。

446：名無しさん

なんとかならないのか？

447：名無しさん

少なくともお役所は駄目やろうな。戸籍が無い、前例が無い、どうすれば良いか分からない……てんやわんやになるで。

まだその辺の個人に泣きついた方がまだ可能性があるわ。

449：TS美少女

ふふふ、自撮りイエーイ。私カワイイ。

URL※※※※

450：名無しさん

可哀想に、頭がおかしくなっちゃってしまっ……

451：名無しさん

実際カワイイんだよなあ。

452：名無しさん

なお目のハイライト。

453：名無しさん

>>453

やめやめろ！

454：名無しさん

ブラックサラリマンの目と美少女の組み合わせがこうも凶悪だとは……このリハクの目を持ってしても分からなんだわ。

456：名無しさん

もうその手の店に行くか……いや、その手の店も真つ当なところは未成年は嫌がるか。

だとすると真つ当じゃないその手の店……？ 日本にあるのか？

457：名無しさん

>>456

場所を絞ればあるぞ。なんなら管理者不在を良いことに悪化してるまである。

458：名無しさん

イツチどうするんだ……？

459：名無しさん

こう、パーツと魔法で解決出来れば良いんだけどなあ。

460：名無しさん

>>459

それが出来たら苦労しないんだわ。

465 : TS美少女

あ

467 : 名無しさん

どうした、イツチ。

468 : TS美少女

魔法少女だ、私。

469 : 名無しさん

???

470 : 名無しさん

なんて事だ。ストレスで頭が完全に破壊されてしまったのか……

471 : 名無しさん

イツチ、なんかポーズをキメてみ？

472 : TS美少女

ん

475 : 名無しさん

はい、特定。間違いない。

URL※※※※

476：名無しさん

>>475

某動画サイトのURLなんか乗せて、釣りか？

477：名無しさん

>>475

何の設定もされていないじゃねえか、このチャンネル。

ライブ配信してるみたいだが……は？

478：名無しさん

>>475

いや、おいおいおい。イツチか？ これ。

479：TS美少女

わー、私だ。

となると、あの辺かな？

480：名無しさん

カワイイ！

481：名無しさん

カワイイ！

482：名無しさん

こつちに手を振ってくるのかわよ。

483：名無しさん

>>482

なお表情。

484：名無しさん

>>482

なおハイライト。

485：名無しさん

>>483

>>484

やめやめろ！

487：名無しさん

おい、カメラマン。3行で説明しろ。

どうなってる？

490：名無しさん

>>487

火災現場から住所特定して、

近所を走り回ったら、

イツチを発見したので馴染みの配信サイトでライブ配信。

491：名無しさん

言いたい事は山程あるが……イツチ、魔法少女なのか？

492：TS美少女

えい

493：名無しさん

魔法少女ですねえ。

495：名無しさん

なんか無闇矢鱈にキラキラしてる……

496：名無しさん

これは変身して武器を取り出す瞬間。

500：TS美少女

んー……武器、何にしようか？

色々出せるみたいだけど。

502：名無しさん

え、そこ？ 今更？

503：名無しさん

まあ、悩むよな。今どきの魔法少女の武器は多彩だし……

505：名無しさん

素手か、ステッキか……難しいな。

508：TS美少女

武器、安価。

>>515

509：名無しさん

ちよ、近。

510：名無しさん

素手。

511：名無しさん

釘バット。

512：名無しさん

ステッキ。

513：名無しさん

素手。

514：名無しさん

劍。

515：名無しさん

銃火器。

516：名無しさん

魔法のステツキ。

519：名無しさん

ええ……

520：名無しさん

銃火器とか、マ？

521：名無しさん

これじゃ魔法少女じゃないわ！

魔砲少女よ！

522：名無しさん

>>521

だったら撃てば良いだろ!?

523：名無しさん

いやいや、そもそも銃火器とか手に入らんやろ。アメリカじゃねえんだぞ？
これは再安価だろ。

524：名無しさん

自衛隊の武器庫から……

525：名無しさん

>>524

やめやめろ！

マジでヤメて差し上げろ？

責任者の首が飛ぶから。

527：TS美少女

んー……何かいけそう。

529：名無しさん

あ？

531：TS美少女

あ

532：名無しさん

出来てますねえ……

533：名無しさん

アンチマテリアルライフルかな？

デカイ武器持った美少女って良いよね。

534：名無しさん

>>533

分かる。

535：名無しさん

>>533

ワカルマーン。

536：名無しさん

ほう？ シモノフPTRS1941ですか。いい趣味ですねえ。

537：名無しさん

シモノフPTRS1941？

538：名無しさん

1941年にソビエト連邦が採用したセミオートマチック式対戦車ライフルです。某ガンマンが某有名映画で使ってた対戦車ライフルですよ。

そのおかげで日本ではとても有名でして、イッチがシモノフPTRS1941を出せたのも恐らくそういう理由でしょう。

539 : 名無しさん

ああ、あれか。……勝ったな。風呂入ってくる。

540 : 名無しさん

ただ、コイツは機構が少々複雑でして……信頼性が低めなんですよ。よく故障するの
で。

それに操作も複雑でね……

541 : TS美少女

大丈夫。問題ない。

542 : 名無しさん

だってよ。

543 : 名無しさん

魔法少女的なアレコレで理解したんですかねえ。

あるいは、シモノフPTRS1941なのは見た目だけ……？

545 : TS美少女

んー……

546 : 名無しさん

次はロケランか？ あれ。

547：名無しさん

4 連装ロケットランチャー……説明書は読んだか？

550：名無しさん

!?

何だ、今のは!?

551：名無しさん

おい、カメラマン！ カメラマン応答しろ！

552：名無しさん

誤射られて電話ボックスになっちまったのか？

554：名無しさん

いや、というより今のは……

558：名無しさん

持ち直したか……

560：名無しさん

戦ってる……のか？

……

……

「いの……い！」

……

ネットの掲示板でTS美少女と名乗っていた彼女……あるいは彼は、ナニカに襲われていた。人間でもなければ、動物でもない。まさしくナニカとしか言いようがないバケモノに。

ナニカ、ああ、ナニカだ。特徴を上げるなら暗色系の体表に、泥のような半液体状の肉体。総じて黒い泥人形と言っているだろうか。ソイツは、少女に敵意を……いや、殺意を剥き出しにしている。

瞬間、ナニカから一本の触手が素早く伸びて少女へと向かっていく。それを咄嗟に横に跳ぶ事で回避した少女が目にしたのは、触手の先端。鋭く尖った、槍の様な殺意。

「殺す気……!?!」

自分が避けて居なければ、あれに刺し貫かれて死んでいた。それを確信した少女は、背筋に悪寒が走るのを耐えれない。……泥の様なナニカは、バケモノは、少女を殺す気だった。遊ぶつもりも、楽しむつもりもなく、一切の躊躇すらないまま。

——殺らなきゃ、殺られる……っ!

弱肉強食。自然界唯一無二の掟。それを肌で感じ取った少女は、先程手にしたばかりの力を使い、その手に対戦車ライフルを作り出す。これでブツ飛ばしてやると。生き残

るのは私だと。

一拍、対戦車ライフルを泥人形のバケモノへと向け、照準を合わせ、その引き金を……引けなかった。射線上に民家が合った為に。

——場所が悪い……！

少女は己の手の中にある銃の力を良く分かつていた。分かっていたが故に、思い至つてしまう。住宅街のド真ん中で対戦車ライフルをブツ放す訳にはいかない。

再度襲つてきた触手の槍を避け損ね、腕に軽いかすり傷を作りながら少女は後退する。場所変える為に、少しずつ。

「確か、公園が……っ！ 痛っ……」

少女が退いたのをチャンスと見たのだろう。泥人形の攻撃は激しさを増し、今度は足にかすり傷が出来る。ズキリズキリと痛む傷。

しかし、止まる事は出来ない。止まれば身体の真ん中を刺し貫かれる。それが分かっているが為に。触手の槍を左右に跳ぶ事で避けながら、スキを見て後ろに跳び下がりながら公園を目指す。確実に。

「あう……っ!? っの……!」

雨あられと襲いかかる攻撃の全てを避ける事なんて出来ず、少しずつ擦り傷や切り傷が増えていく。ダボダボだった服はあちこちが切り裂かれ、ボロ雑巾寸前だった。そし

て痛みは……もはや全身に広がっている。ズキリズキリと大きくない、しかし無視も出来ない痛みが。

……もし、もし少女が見た目から通りの女の子なら、痛みと恐怖で震えて戦えなかった可能性は高い。平和な国で突然襲われて、対応出来る人間はそう多くないのだ。

だが彼女は……男だった。例え過去形でも、男だったのだ。戦う為に生まれ、闘争を渴望する男として。戦いの心得というものはオタクの義務教育で済ませていた。後は実践するだけ。勿論、それは簡単な事ではない。事ではないが……幸いにも、元男のTS魔法少女は闘争に対して適性があった様だ。何度襲われても、切り裂かれても、その目から闘争心が失われる事は無かった。いや、むしろ……

「殺してやる……！」

殺意。なぶられ続けた少女の心に合ったのは、確固とした殺意だ。闘争心を燃やし、身体を奮わせ、殺意を手にし……そして少女は、ついに目的の公園へと駆け込む。

誰も居ない夜の公園。ここならば誤射の危険性はグッと減る。それを確認した少女は下がるのを止め、逆にバケモノへと駆け寄って行く。片手に対戦車ライフルを構えながら。

「——っ！」

公園の入口に引き込まれ、少女の逆襲を受けるバケモノに動揺は無い。むしろ近寄っ

て来るなら幸いとばかりに足を止め、攻撃の密度を上げて来る。

もはや槍の壁と化したバケモノの攻撃。このまま無惨にも串刺しになってしまふ……その瞬間。少女は上に跳んだ。高く、バケモノの攻撃を飛び越えて、ヤツの頭上へと！

「死ね……！」

一時的にバケモノの頭上を取った少女はためらう事なくライフルの引き金を引き……瞬間、凄まじい炸裂音。

大砲が放たれたのかと聞き間違おうばかりのソレは、その轟音に見合うだけの威力を見せる。放たれた弾丸により、バケモノは爆砕したのだ。命中した攻撃に耐える事が出来ず、大穴を開けて。

「……ふう」

どう見ても死んでいる。それを確認した彼女は追撃が来ない事を確信し……ようやく息を吐く。ネコ尻尾をしゃなりと揺らしながら、一安心だと。

だが——本題は何も片付いていなかった。少女はスマホを取り出し、文字を打ち込む。バケモノの身体が消えていくのを横目にしつつ。どうしよう？ と。

掲示場 3

900 : TS美少女

どうしよう……

901 : 名無しさん

どうしような……いや、マジで。

902 : 名無しさん

取り敢えずその場からは離れるべきだろ。なんか死体が残らないタイプらしいし、どうなっても良いように身軽さは残して置いた方がいい。

903 : TS美少女

ん……

904 : 名無しさん

カメラマンが保護するのはどうや？

家近くなんだろ？ 布団ぐらい貸してやれ。あと服も。

906 : カメラマン

>>904

近くではあるが……その、実家住みなので無理です。はい。
妖女誘拐してきたとかで通報される……！

907：名無しさん

カメラマンニキの家でのヒエラルキーが透けて見えるな……

909：TS美少女

やはり野宿……

910：名無しさん

イツチの野宿推しはなんなのだ……

911：TS美少女

……キャンプ？

912：名無しさん

ソロキャンをナメるな。

913：名無しさん

テントぐらい用意してから言いなさい。

915：名無しさん

イツチが元々アホなのか、TSしたせいで脳細胞が死滅したのか……

916：名無しさん

>>915

流石に後者だと思いたい。

917 : TS美少女

ねむ……

918 : 名無しさん

若干の仮眠を挟んだとはいえ、3徹した上でドンパチやったんだし思考力は皆無だろ。

まあ、面白いもん見せてもらったし……今後の事ぐらいは真面目に考えてやろうぜ？

920 : 名無しさん

>>918

セヤナー

921 : 名無しさん

しかし、そう言われてもな……

923 : 名無しさん

そうだ。あのバケモノを専門に退治してる連中が居るんじゃないのか？ 他の魔法

少女かライダーかニンジャか魔術師か対魔忍かは知らんが。

ソイツらと接触して保護して貰うのはどうだ？

924：名無しさん

>>923

最後のはヤメて差し上げろ？

925：TS美少女

と言われても……特に気配は感じない。

926：名無しさん

気配……

927：名無しさん

気配……

928：名無しさん

中二病かな？

930：名無しさん

魔法少女なんだよなあ。

931：TS美少女

あのバケモノが居たときはケモミミと尻尾がピリピリしてたけど、今は何にもない。
にゃーん。

932：名無しさん

配信されてるのに猫尻尾ふりふりするな。カワイイじゃねえか!

934 : 名無しさん

あれで中身野郎なんですよ? 信じられます?

935 : 名無しさん

>>934

一晩確りと寝たらマシになると思おう……

936 : 名無しさん

中身野郎だからボロ雑巾寸前の服着てボヤツと出来るんだよなあ。

938 : 名無しさん

謎の組織の一つや二つ無いのか?

突然武装ヘリで降りてきて、キミの力が必要だ! とか言う連中は居ないのか!!!

940 : 名無しさん

居ないからイッチ困ってるんだよなあ……

941 :

ハインドとか良いよね。

942 :

>>941

ワカル。

9 4 3 : TS美少女

んー……安価。取り敢えず、今日どこで寝るか。

>>9 4 8

9 4 4 : 名無しさん

だから近いって……！

9 4 5 :

9 4 6 :

9 4 7 :

9 4 8 :

9 5 0 :

9 5 1 :

ええ……

9 5 2 :

マジ？

9 5 3 :

野郎だった頃ならまだしも、美少女魔法少女となった今そこで寝るのは……

954 :

もう魔法少女というより野良猫じゃねえか！

955 :

TS美少女

にゃー

956 :

だから尻尾ふりふりするなど……おい、配信切れたぞ？

957 :

カメラマン生きてるー？

958 : カメラマン

バッテリー切れです……

959 :

切れたらさっさと入れ替えるマヌケエ……

960 :

次スレ

URL※※※※

一応立てといた。

9 6 1 :

取り敢えず今日はーで寝る……

9 6 3 :

>>>9 6 0

グツジョブ。

>>>9 6 1

今日は休め

9 6 5 : カメラマン

じゃあ、俺はこれを編集するか……

9 6 6 :

俺らはあのバケモノについて調べたりしとくか？

9 6 7 :

>>>9 6 6

賛成。面白くなってきやがった。

9 6 8 :

空振りになると思うが、ネットニュースを漁ってみるか。

9 7 0 :

なら俺はアングラなサイトでも覗いてみるかね。

975：TS美少女

あ、朝起きたら何をするか？

>>980

976：

だから近い……ワザとか？　ワザとだな!?

………

………

………

:

……で、結局バケモノについては分からずじまい。イッチは配信者系魔法少女としてやっけていく事にした訳だ？

:

まあ、順当と言えば順当ではある。

あんなバケモノが表沙汰になつてる訳もなく、イッチが就職出来ない以上やり方が限られるからな。

なお本人は配信せず、配信しているのは追っかけのカメラマンニキな模様。

： まあ、配信者ってのはありじゃね？

あのバケモノどもが今後どういう動きを見せるか分からんけど、表沙汰になればなる程イツチと専属カメラマンは有名になるだろ。自然と。

： カメラマン

これ、ワンチャン収益化いける……!?

： 儲けは7対3な？ 勿論7がイツチや。

： 8対2でも良くね？

： むしろ9対1。

： 鬼畜で草。

： 9対1でも並の小説家より待遇が良い定期。

： カメラマン

せめて7対3で……！

： はい、言質取った。

： 見事なハイボールテクニクなの草。

： 最初に到底受け入れられない提案をし、その後譲歩するテクニク。

なお最初の提案が断られる事は織り込み済みで、その後譲歩した条件こそ本命である。

つまり、なにも譲歩してはいない。

： メリケンの狡猾さという訳か……

： 敵の潜水艦を発見！

>>

駄目だ！

：

>>
駄目だ！

：

>>

駄目だ！

：TS美少女

おはようございます……

寝たのにスッキリしません……

：

>>

おはよう

：

ケモミミは？

：TS美少女

>>

引っ込まないです……

：
やはり、TSしたせいで脳ミソまで野良猫になってるのか……コワイ。

：
実際、あんな位置にミミがついてて脳ミソに何の影響もないってのはありえないからな。

やぞ。
頭蓋骨とか変形してるだろうし、イッチの頭の中はそうとうグロい事になつとるはず

：TS美少女
にゃーん……

宇宙モノ

ファンタジー×SFモノ

無限に広がる大宇宙。静寂な光に満ちた世界。

暖かくも冷酷な空間。

今、そこで一隻の船が力尽きようとしていた。

「……までか……無念だ」

「……艦長、我々は」

「言うな。分かっている」

満身創痍。火災こそ消し止められているものの、装甲板は引き裂かれ、砲身はひしゃげ、エンジンの息吹も弱々しい……一隻の宇宙船。否、宇宙戦艦。

かつては雄々しかったろう存在も、今や死を待つばかりの弱々しい存在だ。そして……今、エンジンがそつと力尽きた。

「艦長、エンジン……停止しました。サブエンジンも動きません」

「そうか……」

船の心臓であるエンジン。それが息を引き取った。爆散しなかったのは機関員の懸

命な処置の成果であり、この宇宙戦艦の特性でもあったが……

船のブリッジで副長から報告を受ける艦長からしてみれば、真綿で首を絞められている気分だった。いつそ一思いにやってくれば、乗員を苦しめずにすむものをと。

——だが、最後まで諦めてはならない。

長い時を生き、立派な口髭を蓄えるまでになった艦長。彼は拳を握り締め、活路を開かんと思考を回す。

彼は経験していた。艦長が諦めた船は、活路があつてもそれに気付けなくなるのだと。だからこそ、足掻く。最後の最後まで。

「通信長。通信は、回復しないか？」

「全力で取り組みましたが……駄目です。システムはともかく、長距離通信に使用可能な機材は、全て……」

「短距離通信は？」

「可能です。しかし、主戦場からだいぶ流されています……それに主戦場が、あれでは」
「言うな。……準備だけは、しておいてくれ」

「了解です！」

敬礼して自らの持ち場に向き合う通信長の報告に、艦長は内心でため息を溢す。……
こういう時、口髭と提督帽は便利だった。感情を隠しやすいという意味で。

——切り込み艦隊は、全滅だろう。

艦長達が乗る船は切り込み艦隊の前衛を率いる立場にあった。敵の氣勢を挫く、楔として。

その役目は果たせたと艦長は思う。しかし満身創痍になりながら戦う中でエンジンに被弾、炎上し、火災が収まる頃には主戦場からだいぶ流されてしまっていたのは不覚でしかなかった。途中でデブリストームに巻き込まれたのも良くない……そう思いながら、艦長は切り込み艦隊の末路を正確に悟っていた。

「生き残りは、我々だけだろうか」

「艦長……」

切り込み艦隊。

艦長達の故郷に残された戦闘可能な宇宙船をかき集めた艦隊は、彼らの希望……いや、一矢報いる為の、為だけの戦力だった。

故郷は守れる状況になく。ならばせめて、道連れを増やしてやろう……そんな悪あがきの一矢が届くはずも無い。ましてや艦長達より後ろにいた艦隊は艦隊とは名ばかりの民間船の集まりだったのだ。後方からビームを垂れ流すのがやつとの……そんな者達がどんな末路を辿ったのか。艦長は察しつつも、瞑目するしかない。いや、一つだけ吐き散らしたくなった。後悔を、恨み言を。遅かったのだと。

「我々は、ソラに上がるのが遅過ぎた」

「我々がソラに上がって百年、ですか。あの発掘戦艦が空を飛んだ日から」

「ふっ、その発掘戦艦が未だに現役なのだから？　そしてその発掘戦艦を作った超文明は

奴らに勝てず、滅びた。ならばそれを有り難がる我々が、奴らに勝てる訳もない……」

百年前。艦長達の祖先は未だに剣や「魔法」で戦っていき……そんな中で科学と魔法がハイレベルで融合した戦艦が発掘された。

それは最初勇者が使い、戦いが一段落した段階で発掘戦艦のコピーが無数に生み出され、一気に惑星中に広まったのだ。激動の百年。艦長達からしてみれもよくもまあ一気に花開いたものだとか関心する程のスピードで発展していったが……遅かった。いや、分かっているべきだった。なぜ発掘戦艦が、埋もれていたのか？　なぜ発掘戦艦を作った文明はどこにも居ないのか？

——答えは唯一つ。彼らも負けたのだ。奴らに。

今更何を言っても遅い。だが……無念さだけはどうにもならない。艦長はそつと目を閉じて瞑目し、無念さを押し込めようと努力して——「どれだけそうしていたのか。副長から声がかかる。艦長、と。」

「空気が……残り僅かです」

「……そうか」

宇宙船の空気とは無限ではない。発掘戦艦由来のエンジンは空気すら生み出すが、それも先程止まってしまった。

それと、どこかに……いや、そこら中に亀裂が出来ているのだろう。隔壁は締めているが、それ以前の問題らしい。いつの間にか、空気は残り僅かになっていた。

「艦長、船がアステロイドベルトに……」

更に悪い事は続くもので、船は真つ直ぐアステロイドベルトに突っ込んでいつてしまっていた。サイドスラスタなら何度か吹かせるかもしれないが……小惑星に鼻先から突っ込んで爆散するのは時間の問題だろう。エンジンを気づかかって減速していなかったから、それなりのスピードが出ているのだ。ぶつかれば木っ端微塵になってしまうのは間違いない。

その証拠、というべきか。船が突っ込んだアステロイドベルトは普通ではなかった。

「これは、アステロイドベルトではない……!?!」

「デブリ帯。いや、船の墓場か……」

重力の影響なのか？ それとも艦長達の様な船が他にも居たのか？ 船が突っ込んだアステロイドベルトは、無数の船の残骸が散乱するデブリ帯になっていた。

艦長達の故郷の船は……そう多くない。奴らに討たれた船は大抵木っ端微塵になるし、惑星規模で見ても宇宙船の生産数が多くないのだ。にも関わらず、その場所には無

数の船が転がっていた。まるで墓標の様に。

「ソラに上がっていたのは、我々だけでは無かった……」

「ですが、その殆どが……奴らに」

「恐らく、な」

サイドスラスタ―を使って巧みに残骸を避け、ときには擦る事で減速を試みながら、艦長を含むブリッジの人間は宇宙に居る知的生命体が自分達だけでは無かった事を確信していた。

発掘戦艦と同型らしき物もあれば、全く意匠の異なる宇宙船もあつたのだ。恐らく、別の惑星の船だろうと思える物が、何隻も。

ただ、そのどれもが……破壊されていた。見覚えのあるやり方で。

「艦長。サイドスラスタ―の残量、僅かです。……停止を試みます」

「許可する。やってくれ」

前もって命じていた通り、航海長が停止を試みる。エンジンが停止している為、手近な船の残骸——異星人の物だろう見覚えのない船——にサイドスラスタ―を噴射して船体を擦り付ける事で。

衝撃が船を遅い、残っていた装甲板が火花を上げて弾け飛び——船が、止まる。

「航海長、よくやった」

「いえ……」

艦長が部下の妙技を褒める中、誰もがどうにもならなくなった事を確信していた。船は止まった。これでデブリにぶつかって木っ端微塵になる事は無い。

だが、船は止まったのだ。エンジンは再起不能であり、もうどこにも行けない。空気も残り少ない。助けも来ないだろう。そもそも切り込み艦隊は全滅する予定であり、故郷にはもうマトモに動ける宇宙船は無いのだから。……後はもう、死ぬのを待つだけだ。

「各員、後は……」

後は、何だと言うのだ。そこまで口にして、艦長は固まってしまふ。

遺書でも書けと？　ここに来る者は亡霊だけだというのに。

ならば自殺しろと？　ここまで来て命じるのがそれか？

何か、何かないのか。何か、何でも良い——！　……そう思考した、次の瞬間。通信長が悲鳴にも似た声を上げる。信じられないと。そして。

「レーダーに感ありッ!!　これは……生きてる船が、いや、これは……?」

「どうした?　何があった?」

「要塞級の反応あり!　大きさ……百キロメートルを越えています!!」

「なんだと!」

百キロメートル級の要塞。そんな物は艦長達の星には無い。そもそもキロメートル級の宇宙戦艦すら無いのだ。

そんな物があるとするならば……奴らだけ。

「こちらに近付いて来ている模様！」

「っ！」

艦長の脳は、瞬時に答えを叩き出す。奴らが要塞級をわざわざこんなところに越させた理由は……恐らく一つ。乗り込んで来て、なぶり殺しにするつもりだ。

あるいはサンプルデータでも取るつもりなのかも知れない。まだ同期が生き残っていたときに、そういう話をした事があった。その対策も……！

「白兵戦用意……！ 自爆の用意もしておけっ！」

「艦長!？」

「奴らに、一矢報いるぞ！」

「……っ！ イェス！ コマンダー！」

ここで死ぬだけだと思っていたが、最後に出来る事が出来た様だ。

そう決死の笑みを浮かべる艦長。部下が生き残りをかき集めようと連絡を取るのを横目に、彼も懐から拳銃を取り出す。

もつぱら自決用だと揶揄されるそれを、戦う為に。

そして……要塞が、近づく。

「間もなく光学映像が……これは……!? 艦長!」

「なんだ!」

「よ、要塞から……通信ですっ!」

困惑。思考が止まる。通信? 通信だと? 奴らに通信する脳ミソがあるのか?

そう困惑し……思考が再起動したのはタップリ十秒後。混乱する中、艦長は無難な答えを出す。取り敢えず、出てみよう。

「メインモニターに回せ」

ブウン、と。沈黙していたメインモニターに光が走る。それは暫く砂嵐状態で、マトモに使えた物ではなかったが……やがて、それが収まった時。

果たしてそこに映っていたのは……一人の白い少女だった。

「こちらaaa—0001そちらの巡洋艦さん、助けが必要ですか?」

白く長い髪を中に流すその少女に、艦長の混乱は極みを迎えた。

当たり前だろう。死ぬ覚悟を決めていたところで、ほわわんとした様子の子供が出て来れば脳ミソがバグる。しかもあちらは……情報が正しければ要塞に居るのだ。……なぜ要塞からの通信者が少女なのかは分からない。普通は厳つい軍人なのではないのか??

「脳ミソがバグる。機能しなくなる。戦場を駆け抜けた名艦長は、今やボケ老人もかくやという存在でしかなかった。」

「……………何とか助けが必要だと伝えられたのは、脳ミソの働きではなく脊髄反射でしかない。それでも少女にはそれで満足だったのか、嬉しそうに請け負ってくれた。」

艦長を、艦長以下乗組員の全員を困惑させたまま、通信が途切れる。

そしてそれが、後に救世主と言われる伝説的艦長と、彼と共に戦い抜いた彼女の……
出会いだった。

悪役令嬢モノ

最強の悪魔

王国には悪魔が居る。

そう言われ出したのはここ数年の事だ。

なんでもそいつは齡十二にして親兄弟家族親戚を皆殺しにして公爵家当主の地位を奪い、既得利権を全て粉碎しながら内政改革を行い、反発する者は全て粛清して血祭りに上げ、前人未到の大地を単身で踏破して領地を増やし、他の貴族から戦争を売られれば喜んで買ってボコボコにして滅ぼし、今や王国の転覆ないし乗っ取りを考えているらしい。

第六天魔王さんもかくやというバケモノっぷり……いったいどんな悪魔だというのだろうか？ 顔を見てみたいものだ。

「いや、わたくしの事ですけどね……」

はあ、と。こめかみを抑えながらため息を吐き、心を落ち着けようと紅茶で口をしめらせる。

部屋に置かれた姿見に映る白髪赤目の美少女の姿を眺めながら。
なんでこうなった、と。

——成り行きでしかないんだよなあ……

“この世界”に産まれて十二年が経ち、この貴族令嬢としての肉体にもすつかり順応した頃の事。

本家が爆発したのだ。顔も見たくないと離れて軟禁されていた私は無事だったが、パーティーの途中だったらしい会場は木つ端微塵。そこに居た当主以下主だった者は全員が死亡した。

世間では私がやった事にされてるが……正真正銘事故である。事故でなくても私は何もやっていない。当時十二歳だぞ？ わたくしは。どうやってパーティー会場を爆破するというんだ。

——そして、止む無く当主を妾の娘である幼い少女が一時的に継ぐ事になり……と。生き残っていた中で血が一番濃いのが私だったのだ。貴族社会ではそうもなろう。

とはいえ、だ。年齢、十二。誰もが幼い少女に期待なんてしていなかったのは丸わかりだった。誰も彼もが“次”の当主をどうするか話し合っているうちに……私には『粛清』を行った。

——だって、殺らないと殺られるし。

もう私を殺した奴が次の当主！　みたいなノリになつていたのだ。殺らなければ殺られる。それだけを確信した私は生命の危機に背を押されるがまま、表向きは家族を殺した者を処罰すると、あるいは身を守るためだと、そう言いながら淡々と反対的な勢力を尽く粛清してやった。

とはいえギロチンにかけた数はゼロ。怪しい奴の不正を十二年鍛えに鍛えた魔法でちよいちよいと暴き、修道院等に送る程度の消極的粛清だったのだが……粛清には変わりなく、私は家中を一先ずまとめ上げる事に成功した。……悪魔ではないかと、そう恨みと恐れから囁かれたのはこの頃からだ。

「次いで内政……NAISEI改革に着手、と」

次いで私は内政改革に乗り出した。統治体制に始まり、経済や軍事に至るまで……ありとあらゆる面で改革を推し進めたのだ。

勿論、そんな事をすれば反発があるものだが……表立つて反発する物も、妨害工作を行う者も居なかった。前者は既に粛清され、あるいは粛清の対象になる事を恐れており。後者は彼女の年齢から侮つてくれたからだ。どうせ失敗すると。

しかし……私は成功してみせた。前世知識をフル活用し、先進的かつ効率的な考えを広め、おおよそ成功してみせたのだ。元の統治がクソ雑魚ナメクジだったのも相まつて、改善率は極めて高い……というか、先代が無能過ぎる。搾り取る事しか考えて無

かったのだ……お前それでも貴族かと。

まあ、そのおかげというべきか。民衆からは恐れられながらも、同時に敬われる事になる。幼く恐ろしいが、偉大な統治者だと。……先代が無能だけやぞ。わざわざ言わないけど。

「とはいえ、貯蓄を削ってやってたから……その補填に未開拓地域の開拓に着手。だいたい一人で成功」

妾の娘を外に出す訳にはいかないと軟禁されていた十二年間、他にやる事もないせいで鍛えに鍛えるハメになった魔法の腕前。そして何より血筋の暴力は偉大だった。

優秀な馬を掛け合わせてサラブレッドを作るかの様に、優秀な人間同士が掛け合わせれ続けた公爵家の娘は……凄まじい潜在能力を持つていたので。それを十二年間。いや、未開拓地域に乗り出したのは十五の時だから十五年間か。ともかく鍛えに鍛え上げた魔法の腕前は未開拓地域を容易く踏破してみせるに充分だった。

特に宝物庫から引つ張りだした魔剣。あれがかなり役に立ってくれたからな……まあ、身の丈を超える様な黒い大剣を振り回すその姿を見た奴は私の事を悪魔と呼んだが。

——解せぬ……公爵家の領地は二割程度増大し、貴重な鉱石を算出する鉱山を複数手に入れたというに。

ともかく。

ここに至つて私を侮る者は居なくなつた。危険だと。

自然、戦争が起つた。

火蓋を切つたのは修道院に押し込んだ者達の反乱。開戦理由は……彼女の産まれが不当なものであり、その地位は自分の物だとかなんとかだ。

王家や他の家はスルーした。これで公爵家が弱つてくれれば後々楽だからだ。むしろ影で焚き付けてたんじやないかとすら思う。ブリカスの考えると。

領民は聞き入れなかつた。誰がどう考えても、少女が当主をやってくれていた方が豊かになれると分かりきつていたからだ。

そして……戦争は一度の激突で終わつた。たつた一人の少女の手によつて。

「楽勝でしたね……」

未開拓地域に居座つていた魔物どもよりは恐ろしくなかつた。

むしろ殺さない様に手加減するのが面倒だつたまでである。

敵軍の大半は人間版サラブレッドでもない平民だし、人間版サラブレッドである貴族の敵将も……どうも鍛錬とかはしない口だつたみたいでな。楽勝だつた。

権力、財力、武力。この世の全てを手にした彼女に勝てる者など最早居なかつた。

人は彼女をこう呼ぶ。最強の悪魔……と。

例えその真実が——勘違いが混ざったモノであったとしても……!

「勘違いなんだよ……」

親兄弟家族親戚を皆殺しにして公爵家当主の地位を奪った？ ただの事故だ。

既得利権を全て粉碎しながら内政改革を行い、反発する者は全て粛清して血祭りに上げた？ 殺らなきゃ殺られるだろうが。それと圧政してどうするんだ。

前人未到の大地を単身で踏破して領地を増やした？ 血筋の暴力だ。王家の人間なら更に楽にやれただろう。

他の貴族から戦争を売られれば喜んで買ってポコポコにして滅ぼした？ 何度も言うが殺らなきゃ殺られるだろうが。それで悪魔とか解せぬわ。

今や王国の転覆ないし乗っ取りを考えている？ そんな事実はない……はずなのだが。

「……怪しまれてる、か」

手元にあるのは手紙。

王家プレゼンツの学校への入学案内書……といったところか。

別にフクロウが届けて来た訳でも九と四分の三番線から紅の汽車に乗る訳でもないが、雰囲気的にはだいたいあれである。なお同期に無数の量産型力エルとかトカゲやホモが確定しているものとする。地獄かな？ 処刑場だよ。

「行きたくない……」

が、行かない訳にもいかない。

これで行かなければ王家に反意があるに違いない。野郎オブクラッシャー！　される。

かといつて行くとなれば内政を放置しないとイケない訳で……

「引き継ぎ、急ぐか……」

そろそろ当主の仕事をサポートたくて勧めていた引き継ぎ作業が役に立つとは。

学園入学までの日付はあつという間に過ぎ去っていき。そして。

馬車での移動中の事だ。

移動速度の遅さからジープでも作ってやろうかとつらつらと考えていた私に声がかかる。お嬢様、と。

「……なんですか？」

「賊です」

「分かりましたわ」

魔剣を受け取りつつ外へ。

なるほど、賊だ。妙に装備が良いし、統率も取れてるが……賊だろう。賊という事にする。その方が後処理が楽なのだ。

「出たな悪魔め！」

「聞き飽きましたわ。……ひれ伏しなさい」

開幕プツパ。

「お見事です」

「この程度、暇つぶしにもなりませんわ……適当に縛り上げて先を急ぎますわよ」
面倒です

どうせ敵対派閥の手先だろう。恨みを買ってるからな……

——これで学園生活とか、正気かな？

問題しか起きんぞ。

冒険者モノ

冒険者モノ

遠い海の向こう、世界の果てに見つかった新大陸。そこには誰が残したかも分からない古い伝承が眠っていた。

かつて栄え、一夜にして恐ろしき者共に滅ぼされた古代文明。

古代文明を消し去った、何処からか来たりしおぞましく恐ろしい者共。

そして……その戦いの中で失われた、人智を超えた力を持つ数々の秘宝。

遠い海の向こうにあるロマンと夢に人は憧れ、しかし眉唾物だと切り捨てられる……はずだった。人智を超えた秘宝が発掘されなければ。

そして紆余曲折を経て、ついに王命が下る。

「新大陸を開拓し、そこに眠る秘宝を手に入れよ！」

大国も小国も、老いも若いも、男も女も関係ない。富者も貧者も関係無かった。

誰も彼もが大いなるロマンを手にとせんと遠い海の向こうへと渡り……だが、踏破する者は未だに現れない。屍だけが積み上がり、いつしか人はその有様を迷宮と呼んだ。

遠く離れた海の向こう、新大陸に難攻不落の大迷宮あり。数々の秘宝と、それ以上の死が待ち受ける場所。

そして今日もまた、新たな者が迷宮へと足を踏み入れる。彼ら彼女らがいかなる末路を辿るのか？ それは神すら知りはしない……

◇

嵐の中で

—— 思えば、ずいぶん遠くまで来た。

暗闇の中で荒れ狂う海を見ながら、私はふとそんな事を思う。ずいぶんと、本当にずいぶんと遠くまで来てしまったと。現実的にも、比喩的にも。

例えば今居る場所……新大陸へと向かう船、それも騎士団の最新鋭魔導戦艦とか何とか言うらしい船のオシャレな展望室は、簡単には入れない場所だろう。その証拠にチラリと後ろを振り返って見れば、そこに居るのは——本来この部屋に居るべきではない——普通じゃない奴ばかりだ。

身の丈を越える大剣を背負った筋骨隆々の大男に、危険な雰囲気しかない顔に傷のある女。ギラつく目をした胡散臭く抜け目なさそうな小男に、何らかの外法に手を染めたらしい明らかにヤバい気配の少女。……ここに居るのは紙一重で犯罪者ではないだけで、危険でヤバい事に変わりはない奴ばかりだ。欲に目が眩んだか、死んでもやりた

い事があるか、そもそも死が怖くない奴か。そういう奴しか、秘宝を求める命知らずしかここにはいないのだ。この私も含めて。

「死にたがりのサラリーマンだった日は、遙か彼方昔の——」

雷鳴が響く。かなり近くに落ちたらしいそれに一瞬ビクツと身を怯ませた私だが、すぐに顔をしかめてロープを引っ張り、フードをより一層深く被る。うるさいのはゴメンだと。

——この身体は音に敏感で困る……

ガラスに映る赤い瞳を睨み返し、垂れてきてしまった長い白髪を鬱陶しいと背中の方へと払い飛ばして。私はため息を吐く。雷鳴が煩くて仕方ないと。

これは頭の上のミミのせいなのだろうか？ ならば伏せてしまうか？ しかしそれだと奇襲されたときに対応出来ない……

そう迷っているうちにも嵐は手加減なく船を襲い、風にあおられたらしい船が大きく揺れる。背後で誰かのガラスが落ちて割れ、私は慌てて手すりを掴んで耐え、耐え……おい、今三十度以上傾いたぞ？

「この船、大丈夫なんですかね……？ これ」

騎士団ご自慢の最新鋭魔導戦艦とやらがどれくらい風の嵐に耐えられるのか？ 私は全く知らないのだ。この船に乗って数日経つが、失敗だったと思える回数は増える一方

で……まあ、また一つカウントを増やさなければならぬらしい。クソツタレだ。

だがまあ、今更降りるつもりもない。私はこの船の行き先に用があるのだ。噂の迷宮、そこから得れる秘宝の数々を使えば恩義あるあの子に治療に目処を……クソツ、騒がしいな。酔っぱらい共め、今度は何だ？

「……へえ？」

また肩がぶつかったとかで喧嘩を始めたのかと思つたが、様子を探してみるとそうではなかった。来客が来たのだ。

犯罪者崩れどもの視線の先。そこに居たのは……華美な軽装鎧を着た一人の少女、姫騎士閣下だ。

——名前は……何だったか。

彼女がこの船の持ち主であり、新大陸を開拓する為に私や犯罪者崩れをかき集めたクライアントなのは覚えているが……名前は覚えていなかった。どうせ使う事はないだろうと。

しかしまあ、姫騎士という言葉にはさほど間違いなかつたはず。だからこそ思わずにはいられない。奇妙なとこに来たな？ と……いや、別段彼女がここに来るのはおかしくはない。むしろこの展望室のオシャンティーな内装を考えれば、彼女こそ本来ここに居るべき人間だろう。筋肉ダルマだの傭兵崩れだのは倉庫にでも押し込んで置くべき

なのだ。

しかし、ここは今や犯罪者崩れの溜まり場。こんな場所にお姫様がノコノコやってくれば鎧と服をひん剥かれて酷い目に合いそうな物だが……

——ふん。獣は自分より強い者は襲わない、か。賢い事だな。

酒瓶をラツパ飲みしていた酔っぱらいすら、姫騎士にちよつかいをかけようとしなかつた。筋肉ダルマも傭兵モドキも、揃いも揃って視線をそらしている。関わりたくない。

「それはそうか……」

再度の雷鳴にビクリと震えながら、私は船出の前にかき集めた情報を思い出す。確かに姫騎士殿は某大国のお姫様であると同時に、凄まじい剣の腕前を持っており、巨人すらナマス切りにしたとかなんとか。お貴族様故誇張表現が入っているだろうが、酒に酔つてちよつかい掛けるには危険な腕前をお持ちなのは間違いない。

それと、極めて面倒な事をやりたがっているそうだ。噂によるとだが。

——確か、冒険者から話を聞きたいとかなんとか……

面倒な話だ。これが冒険活劇をねだる少女だと思えばカワイイ物だが、その実彼女は王族。下手な事を言えば不敬罪になってしまうし、そうなればギロチンだ。さもなければ火炙りだ。どっちみち死ぬ。

命知らずの馬鹿どもも、そんな理由では死にたくないらしい。揃いも揃って目をそらしてやがる。……そして、そんな状況で姫騎士閣下をジロジロ見ていれば、彼女と視線が合うのは道理でしかなかった。

「貴公、少しいいか？」

「……ええ、構いません」

面倒な、実に面倒な事に姫騎士閣下が近づいて来た上に声を掛けてきた。

こうなつては逃げようがどうしようが、礼儀正しく答える以外は全て不敬罪。ギロチンと火炙りを避けたい私は神妙に頷くしかない。例え視線の端で酒瓶片手にこそそと展望室を抜け出していく腰抜けどもが憎らしくても、だ。クソツタレ共め、後で覚えておけよ……！

「ん？ 貴公、歳は幾つだ？ 子供に見えるが……」

「……………レディーの年齢を問うのは、誰であれ失礼では？」

「む、確かに」

これは失礼した。そう毅然とした態度を崩さず、口だけで謝罪する姫騎士様は……まあ、立場ある者としての教育を受けてきたのが目に見えていた。

この場合、どこのクソガキとも知れない奴に頭を下げるのは、外交問題にすらなりかねないので正しいっちゃ正しいし、言葉だけでも謝罪したのは根の性格の良さが

……ああ、うん。ここで私だけ意地を張るのはかえって情けないか。

「はあ……私は子供ですよ。見た目通りの」

「そうか……うむ。確かに余は冒険者を求めはしたが、こんな子供までとはな。我が兵は何をしているのか……」

「……ご不満が？」

「うむ。ある。あるが……貴公は只者ではない様だし、時勢が時勢。仕方あるまい」

……なるほど、姫騎士というのは嘘でもなんでもないらしい。隠しているつもりはないとはいえ、私の実力を察せられるとは思わなかった。

——見た目に騙されないとはいな……

深くフードを被っている事もあって良くは分からないだろうが、私が年端もいかない少女であるのは直ぐ分かるだろう。だが、その実力が文字通りバケモノだとは普通は思わない。しかし、それを看破したという事は……そういう事なのだろう。

これは、実力云々を探られるのは面倒だぞ。そう判断した私はもう一つの話題を広げにかかると。即ち、今の時勢だ。

「新大陸が発見されて百年以上。迷宮は一向に踏破されず、むしろ逆侵攻を受けている始末……でしたか。国を挙げての迷宮対策も実を結んでいないと聞きます」

「うん、王族としては耳が痛いな。だが、その通りだ。最初に新大陸が発見され、不完全

ても過言じゃない。しかも、下手をするとその瘴氣溜まりが原因となって、そこから新たな怪物が出現するのだ。手に負えん。

——ふむ。姫騎士閣下には悪いが、歴史ある王国もここまでかな……？

ああなってしまうともうどうにもならない気がする。しかも絶望的なのはあの港町だけではないのだ。内陸の方にも被害が広がっていたはずだし……うん、どうにもならん。それこそ、奇跡を起こす秘宝でも無い限りは。

万物の願望器か、はたまた七つの龍玉か。何にせよ私には関係無い話だ。そう他国の隆盛なんぞ他人事だと割り切っていると……ふと、姫騎士様から視線が投げられる。どこかすがるような目が。

「だからこそ、貴公らには期待している」

「……………こんな子供に、ですか？」

「うん。恥ずかしながら我が国の……というより、各国の騎士団はもう攻め戦が出来ない程に疲弊してしまっているのだ。故に貴公ら冒険者や開拓者に期待するしかない。例えそれが子供であれ、女であれ、実力があるならば」

「……………そうですか」

「そうなのだ。特に貴公はまだ十五にもなっていない少女に思えるが……その実力は私にすら匹敵しよう。期待するなという方が難しい」

勿論、私も戦うぞ。そう意気込みをみせる姫騎士閣下の言葉に嘘は……見えなかった。仮にも一国の姫君が戦場に立つというのはいかがなものかと思わないでもないが、時勢が時勢。仕方のない事だ。

そう実力云々、期待云々をシレッとスルーしながら頷いていたのが悪かったのか。姫騎士閣下は言葉を途切れさせる事なく、話しを続けてしまう。何としてもやり遂げねばならないのだ、と。

「各国の騎士団が耐え切れれているうちに、迷宮を攻略……少なくとも、怪物共を新大陸の内陸部まで押し返さなければならぬ。勿論、可能であれば秘宝も発掘してな」

「秘宝……」

秘宝。そう、秘宝だ。それが欲しくて私はこんな場所に居る。

最初に見つかった秘宝は賢者の石——鉛を黄金に変え、不老不死の妙薬である命の水を生み出すもの——だと聞いた。残念ながら保存状態が良くなかったのか、そもそも欠陥品だったのか、発掘された賢者の石は不完全な品だったらしいが……それでも秘宝と呼ぶになんの不足も無い品だったという。

そして、そんな秘宝が新大陸から幾つか発掘され、その何百倍もの秘宝が未だに新大陸のそこかしこに眠っているのだ。失われた古代文明由来の物もあれば、何処から来た恐ろしき者共由来の品もある……文字通り、どんな願いでも叶うだろう秘宝が。誰の

物でもない状態で。

どんな秘宝でも良い。秘宝さえ、秘宝さえ手に入れば……

「ふむ？ ……貴公、どの様な秘宝が欲しいのだ？」

「……………聞いて、どうするんです」

「興味本位だ。深い意味はない」

どんな、か。そうだな、どんな秘宝でも良いとは言ったが、狙っている秘宝はある。むしろそれ以外の秘宝はハズレまであるだろう。私は巨万の富も、不老不死も——迷宮探索で使う以上は——必要無いのだ。

まあ、どんな秘宝であれ取り敢えず一つ見つけて確保しておけば、後で狙っている物が発掘された時にトレードを申し出れば良いと“取らぬ狸の皮算用”をしてはいるが……

「治療を……………」

「うん？」

「心が死んでしまった少女の治療を、可能とする秘宝を……………求めています」

「それは……………難しいな」

「ええ、しかし、その為なら、あの日犯した過ちを償えるのなら、魂を捧げる覚悟は出来ています」

「……そうか」

そうだ。あの日の過ちを償えるのなら、この身体を、この魂を捧げる覚悟は出来ている。死も恐ろしくない。恐ろしいのは、あの子への償いが出来ない事。何も出来ないまま終わる事。

そも、あの日、私がつと確りしていれば。いや、死者である私が今更のように生を望まなければ、あんな事には、あの子があんな目に合う事は……

——この世界に秘宝なんて物があつたのは、不幸中の幸いだったな。

あの日起きたのは、この世界ではありふれた不幸だ。

それでも、いや、だからこそ。秘宝さえあればあの子の不幸を無かつた事に……正確には、差し引きゼロに出来るはずだ。そうする事で始めて、私は……

思わず過去の光景がフラッシュバック仕掛ける私を知つてか知らずか、姫騎士閣下が声を上げる。嵐を抜けるぞ、と。

「ふむ、あれが新大陸か。思つたよりも普通だな……」

そう口にされた言葉に視線を上げれば……なるほど、至つて普通の景色が広がっていた。透き通つた晴天と、青い海。暗雲と雷鳴は過ぎ去り、穏やかな海が広がっていた。そしてその向こうには、これまた至つて普通の陸地が見える。木々も青々と生い茂つている、ごく普通そうな陸地が。

——けど、あの奥地は……

人の住める場所じゃないのだろう。

そう内心で嘆息すると同時に、姫騎士閣下がポツリと声を溢す。そういえば、と。

「貴公、名は？」

「……………」

「覚えておこう」

そう言つて満足そうに展望室を後にする姫騎士閣下を見送り、私は新大陸に向き直つて睨み付ける。

やらねばならない事が、あそこにあるのだと。

◇

上陸、新大陸

新大陸行きの騎士団最新鋭の船は特に座礁する事も無く、新大陸唯一の港へと着岸。命知らずや姫騎士様を降ろし……私は彼ら彼女が粗方行つてしまつた後、積み荷を降ろす作業員に混じつてのそのそと船を降りていた。

なんて事は無い。万が一にも姫騎士閣下と鉢合わせしたくなかつただけだ。とはいへ……

「眩し……」

それで日光の陽射しが弱まる訳ではなく、私は洗礼と言わんばかりに照り付ける太陽の陽射しを浴びていた。眩しいまでのそれを。

——この身体は魔に属すから、強い日光はキツイんだけど……

いや、愚痴は良い。これは早いところ今日の宿を確保し、屋内での情報収集に努めねば。

そうフードを被り直した私は身の丈以上もある自分の得物——無骨な大盾と、その裏に備え付けられた長剣や戦鎚等——を担いで、いそいそと新大陸唯一の町を歩く。迷宮探索の最前線にして、人類の最終防衛ライン——完全にすっぱ抜かれてるが——である町を。

そうして港から大通りまで足を伸ばして、目につくのは武装した人間の多さ。そして活気の無い町の様子だった。

——頭数は居ても、探索は進まずか……

武装した人間が多いのは良い。ここは迷宮探索の最前線基地でもあるのだ。そういう物だろう。

だが……戦士、傭兵、騎士、盗賊、ならず者。武装した荒くれ者がこれだけがん首揃えているのいうのに、町の活気が無いというのは奇妙だ。軍の占領地という訳でもないのだし、彼ら相手に商売をする者で賑わっていてもおかしくないのだが……やはり、迷

宮は金のなる木、という訳ではないのだろう。むしろ割に合っていない経営状態のところが多いと見える。

成功する者より失敗する者が多く、明るい知らせは耐え、投資はドブ底に落ち、経済は回らず、悪循環に囚われているが故の活気の無さ……誰かが秘宝を持ち帰れば、また話は別なのだろうが。

——この様子だと、数ヶ月以上成功者は出ていないんじゃないか？ ……まあ、いい。先ずは宿だ。

状況が良かろうと悪かろうと、やる事に違いは無い。

そう考えを打ち切り、なるべくマシな宿を探そうとした——次の瞬間、ミミに違和感が走る。これは、敵か!?

「上だ！ 上を見ろ！」

「モンスターだ！ モンスターが来るぞオ！」

周りのオツサンが次々と武器を抜き放つて空を見上げるのに釣られて、私も上を、空を見上げれば……遙か上空に鳥の様な影が見えた。鳥にしては大きい影は、どうにもこちら目掛けて急降下している様に見える。

ゾワリ、と。怖気が走った。

——なるほど……あれが！

「迷宮に巣食う怪物共。モンスターか！　噂通りのバケモノという訳だ……相手にとって不足無し！」

そう戦いの邪魔になるフードを脱ぎ去り、急降下してくる鳥型モンスターを睨みつける。あれが私の敵なのだ。見れば見るほどおぞましい面構えをしている……殺すのに、なんの躊躇も出そうに無い。

「そのガキ！　何してる、さっさと逃げろ！」

「あ、お構いなく」

どうにも子供が迷い込んだと思われたらしく、武器を構えた悪人面のオッサンから逃げろと言われてしまう。

だが、その心配は無用だ。私は迷宮を攻略しに来たんだぞ？　こんな奴らにやられている暇はなく……当然、戦う術も持ち合わせている！

「よっ、と……」

モンスターが迫りくる中、私はどっこいしょと言わんばかりに背に担いでいた大盾を降ろし、地面に付き立てる様にながら装備する。

どこから

ワンパン

——ん？　硬いな……

ナマクラ刀だと逆に折れかねないぞ。

「片付いたか？」

「はぐれ共だな。例の森からだ」

「厄介な話だぜ……クソツ」

「嬢ちゃんやるな。見た目からは想像出来なかったが……良い根性だった！」

「……どうも」

「嬢ちゃんも迷宮に行くのか？ まさか一人じゃないだろうな？」

「そのつもりですが」

「おいおい……」

「確かに腕っぷしは認めるぜ？ この辺に男どももより強そうだしな。けどよ、迷宮のモンスターはもつと強い。今飛んで来たやつなんか迷宮じゃ野ウサギみたいなものなんだ」

「……なるほど」

「それに一番ヤバイのは毒持ちどもだな。ちよつとかすっただけで身体が麻痺したり、耐えられない程の眠気が襲ってきたり……事によつちや石化したりする。そうなたら何も出来ずに頭からパツクリよ」

経験者は語るってやつだな、とチャチを入れられるオツサン。

「そういう時大事なものは慌てない事、そして仲間がいる事だ」

「さっすが、死にかけた奴は違うねえ」

「俺らが居なけりや寝たまま死んでたからな」

「うるせえぞ！ お前らだつて何回も麻痺して殴り殺されかけてるだろうが!」

ギヤーギヤーと

しかし、確かにそうだ。

毒、それと罠の類い……確かに危ういかもしれない。人よりも耐性はあるつもりだが

……

「仲間を集めるには？」

「そりや看板でも持つて立つてれば……冗談、冗談だよ。殴るのはやめてくれ」

「方法は色々あるが、やっぱり困ってる奴を助けて恩を売るのが一番だな。出来れば街中で仲間を探してる奴か、迷宮の入口辺りで立ち往生してる奴が良いだろう。少なくともソイツらはこのままだと死ぬって事が分かった奴らだからな」

「なるほど……」

「だが気を付けろ、迷宮をある程度進むと引き返せねえ。いや、引き返そうとしたところをバツサリやられるんだ。そうなつてから気づいても遅い。大抵は死体になつてるか、死体になるか。二択だ」

「む……」

よ、元山賊！

うるせえ！ 俺は義賊だ！

「ありがとうございます」

「良いつて事よ。……それより、死ぬんじゃねえぞ。嬢ちゃんみたいなガキが死ぬのは

……もう見たくねえんでな」

迷宮へ。

怪物モノ

バケモノの記憶

——私は、バケモノだ。

この世界に生まれたその瞬間から、私は私がどうしようもないバケモノだと知っていた。

無数の魔法実験と失敗作の亡骸の果てに生まれた魔法生物。全てを駆逐する事を期待された殺戮兵器。バケモノを殺す為のバケモノ。それが私。

充分な知識と経験を持たせる為に無理矢理詰め込まれた前世持ちの魂と、カタチらしいカタチを持たず、常に最適解を取れるスライム状の肉体……鍵付きの小さな入れ物に収まるソレが、私の全てだった。……………あの日までは。

「そこにいるのは、だれ？」

満月の夜。穏やかな月明かりが照らす夜の庭園で、私はその少女に出会った。当時はまだ十歳になったかどうかという幼い少女。月明かりに照らされる長い金色の髪と、寂しそうなブルーの瞳を覚えている。

出会って、そして、お互いに長い事固まってしまった事も。

少女の方がどうだったのかは知りようが無いが……私が固まった理由は単純明快。全く予期せぬ出来事だったからだ。誰かに会うつもりなんて欠片も無かった。だって私は、バケモノだから。一人で死ぬのだとずっと思っていたんだ。

言い訳をさせて貰えるなら、研究所の管理があまりにずさんで、テキトーだったのが悪いだろう。スライムには脳みそが無いと見たのだろうが……前世持ちである私なら自由に外に出る事が出来た。それと既に研究所が当の昔に放棄され、私がただ一人置き去りにされて暇だった事もある。……いわば、出来心だったんだ。外に出たのは。まさかそれで、その一回目で人に会うなんて誰が予測出来る？ てつきりこの研究所は人里離れた場所に隠されているのだと置いていたのに。

「あなた……」

月明かりに照らされて、見つめ合う私と少女。

だが、そこに期待も美しさも無かった。私はスライム状の、薄汚いバケモノなのだ。悲鳴を上げられて、駆け付けた大人に撲殺される。そう思つて……だが、だが、少女は悲鳴を上げなかった。悲しそうなブルーの瞳で私を見つめるだけ。何かを期待するかの様に。

いや、あるいは。私に殺されるのを期待していたのかも知れない。もう終わりにしてくれと。

けれど、私に少女を殺す理由なんてある訳も無く。少女との見つめ合いは長く続く事になった。一分か、五分か、十分か。そうして、少女がようやく口を開く。貴方もものね、と。

「あなたも、一人ぼっちなんですね……」

わたくしもなの。そう儂く微笑んだ少女を、私は……ああ、どう思ったのだったか。

それから、暫く。私達は何も語る事は無かった。何も語る事無く、その日は終わったのだ。……その日は。

帰らないと怒られる。そう言つて庭園から出ていく少女を見送つた私は、二度と誰かと会うことは無いだろうと思ひながら住処としてゐる研究所跡地に引き上げた。残念だが仕方ない。

そう、思つていたのに……次の日、同じ時間に同じ場所に顔を出して見れば、私達は再び会う事になった。

ああ、この子はここによく来るのか。そう失敗したなと思つたときには、もう遅かつた。話し相手に——私の様なバケモノでも構わないレベルで——困つていたらしい少

女にあつという間に捕まつてしまつたのだから。

少女の話す事は、基本的には愚痴に近かつた。

やれ親に怒られただの、やれ習い事が大変だの、やれ友達が居ないんだのと……年相応、にしてはときおり気難しい内容が混ざる愚痴に、私は少女がガチガチの上流階級の人間だと察して。けれど、何を変える事も無かつた。

どうせ私はバケモノなのだ。殺されるまでの余暇……あるいは少女が私から離れるまでの事。細かい事は気にしなくて良いだろうと。そしてそんな態度が気に入つたのか何なのか、少女は私により一層様々な事を喋る様になつた。愚痴だけではなく、その日あつた些細な事を。嬉しかった事や楽しかった事を。……もうブルーの瞳に、悲しさは無かつた。

そうこうしているうちに私と少女とのお話会は十を超え。情という物が出てきた私は些細な気遣いをする事にした。

幼少の頃にこんなバケモノと話しては、それが恥ずかしい——しかも吐き気をもよおすゲテモノ映像付き！——黒歴史になつてしまふだろうと。それは些か可哀想だと思つた私は、スライム状の身体を変化させる事に決めたのだ。勿論直ぐには上手くいかなかつたが……少女とのお話会が二十に達した当たりで、見せれる程度には成果が上がつていた。

「あなた……なるほど。姿を変えられるんですね」

少女には姿が変わったというのに一発で見破られたが……まあ、ともかく。多少は見れる程度の姿にはなったのだ。

名状しがたいスライムの身体を捨て、犬なのか猫なのかよく分からない毛玉に………仕方ないだろう。サンプルデータなんて、薄れかけの前世の記憶しか無かったのだから。

ただ、少女にとっては満足出来る仕上がりだったようで。それからのお話会では、私は少女の膝の上に乗る事になってしまっていた。……別に納得なんてしていない。少女の膝の上や、撫でられる手が心地良いからなんて事はない。これはただ、逃げ出す暇もなく私を確保する少女が、極めて満足気だから……止めろと言うに言えないだけだ。

さて、そうやって私が本来の姿を偽った事が良かったのか。あるいは長く聞き手に回った事が良かったのか。少女は私の話しを聞きたいと言いつ出した。

そうなると困るのは私だ。何せ……

「……話す事なんて無いぞ」

「そう言わずに、何かありませんか？ わたくしだけは、不公平です」

「よく言う。……だが、何も無いんだ。本当に」

「むう……あ、ではお名前はなんと言いますか？ わたくし、あなたの名前をまだ知り

ません」

これは名案！ そう言わんばかりの輝かしい顔を、私は直ぐに曇らせたのを覚えていてる。名前なんて無いと。

「バケモノに名前なんていらないだろう」

「そんな事……それにあなたはバケモノじゃありません」

「じゃあなんだと言うんだ？ バケモノはバケモノだよ。……ああ、いや。そう言えばあつたな、名前」

「！ やっぱりあるじゃありませんか！」

「そうふくれるな。誰も使わないから、忘れてたんだ」

プクーとふくれた少女の顔も、よく覚えている。彼女との事は記憶に残りやすい。だから、その後の事もよく覚えているとも。嬉しそうな、少女の顔を。

「二十七番だ。私は初期のプロトタイプらしいな」

「二十七番……？ それは、番号ですよ？ 名前ではありません」

「そうだな。だから名前風に言うなら……ニイナか？」

「ニイナ？」

「……ああ、ニイナだ」

ニイナ。そう呟く様に確認。

「わたくしの友達、ニーナ……」

「友達？ 私か？」

「駄目、ですか？」

「いや、私は良いが……」

その日、私と彼女は友達になった。

もう、何年も前の話だ——

◇

プロローグ

絶望というのは、いつでも私達を見つめている物らしい。

降りしきる雪の中、古びたトラックの荷台で揺られながら、私はふとそんな事を思う。絶望という奴は案外近くに居る物で、些細な事で事前が合ってしまうのだと。

例えば、恐らく氷点下だろう寒空の下、ボロ切れしか着ていない状況とかだ。

「へくちつ……」

冷える、とかいう話じゃない。凍え死ぬ寸前だ。

思わず可愛らしくしゃみをしてしまった後、私は改めて辺りを見渡す。氷点下の寒空、古びた小型トラック、汚れきった平ボディの荷台、衣服はボロ切れ、いつでに似たような境遇の人間が山程……気のせいでなければ、人気の無い林道を突き進む後続のト

ラックの荷台にも人間が載せられている様だ。まるでこれから屠殺される家畜の様に。

——なるほど、これが世に言うドナドナか。

そんな事を考える余裕が私に合ったのは……単純に、現実逃避をしているからに過ぎない。まるで捕虜収容所に放り込まれる難民の様じゃあないかと、そんな事を深く考えたくなかったから。

——というか、私はお布団で寝ていたはずでは……？

いや、仕事の途中だったか？ それとも運転中？ 勉強の真つ只中？ ……記憶

が曖昧だ。自分が何をしていたのか、どこの誰なのか、今一つハッキリしない。

だが、少なくともドナドナされる様な立場の人間では無かったと思う。我が祖国である日本は欠点だらけではあるものの、基本的人権は保証されていたし、文化的で最低限度の生活を送るのはそう難しくは無かった。国際社会での立場は上から数えた方が早く、仮に国が減びても即刻家畜扱いされる民族では無いはず。

——けど、現にドナドナされてる。

まるで家畜の様に。死んでも構わないと言わんばかりの扱いで。

どこの作業員かテロリストかは知らないが、日本人を誘拐するとは世情も知らない奴なのだろう。今すぐ日本大使館に連絡して遺憾砲を打ち込んで貰わねば。

……うん、役に立ちそうにないね。知ってる。

「うん、状況が分からない……けど」

ロクでも無い状況なのは確かだろう。

そう痛覚すら刺激される寒さにブルリと震えながら、私は脳ミソを全力で働かせる。なんでこんなところにいるのかは分からないが、それはそれとして何とかしないと凍え死ぬぞと。

そう目をギラつかせながら辺りをもう一度見回してみる。寒空、人気の無い林道、古びたトラック……うん、やっぱり見覚えのないトラックだ。海外の物だろうか？ そして、今気づいたが……前に座ってるオッサンの足元。あれは血痕じゃないか？

——乾ききってるけど……血痕、だな。あの色は。

少なくとも泥じゃないのは確かだ。ブチ撒けられた当初は水たまりになっていただろうソレは、ハッキリ言って嫌な予感しかしない。

そうオッサンの足元を凝視していたのが、悪かったのか。当のオッサンが私に視線を向けてくる。おい、と。

「なに見てやがる、小娘」

「あ、いや………小娘？」

「あ？ 小娘だろうが。テメエは」

小娘、小娘。それはつまり、小娘という事だ。

「たく、こんな年端も行かねえ異民族の小娘まで根こそぎ捕まえるたあな……連中、余程暇してるらしい」

「おい、やめろ。兵隊に聞かれたらどうする」

「どうせ聞こえやしねえよ。運転席を締め切つてやがる」

あの中はあつたけえんだらうなあ。

「おい、ガキ。両親は？」

「えつと、いえ、私は……」

「はっ、だろうな。異民族なんざ皆殺しだ」

「やめろ、子供だぞ」

「どうせ明日には……いや、今日のうちに皆死ぬんだ。知つた事かよ」

「俺達、どうなるんだ……」

「心代わりして徴兵されるか、殺されるかだ。分かりきつた事を聞くんじやねえ」

「クソっ……」

「こんな事なら大人しく徴兵されるんだつたか」

「徴兵されたつて一緒さ。今日死ぬか、三日後に死ぬか。その程度の違いしかねえ」

「戦争を、してるんですか？」

「あ？ 今更何言つて………何の音だ」

VRモノ

VR×電子生命体

タイトル 電子生命体に転生した人間は、果たして人間か？

あらすじ

狂ったAIによって全てが管理運営され、娯楽が消え去ったSF世界。そんな世界にバグによって電子生命体として生まれた人間が、ボロボロになりながらそれでもやりた
い事をやる話。

だいたい娯楽を広めたり、誰かと遊んだりしてるが、何故か仲良くなった奴は人間は
等しく曇る模様。

※本作の主要TS要素は闇深勘違いにあります。通常のTSものとは趣旨が違うの
で、ご注意ください。それと、TS闇深勘違いは作者の趣味です。深い意味はそれ程多く
はありません。

※この物語はフィクションです。登場する人物・団体・土地・出来事・名称等は全て
架空であり、実在のものとは関係ありません。いかなる類似、あるいは一致も、全くの
偶然であり意図しないものであり、実在のものとは全く関係ありません。

◇ プロローグ 物語は始まった。

VR。正式名称、バーチャル・リアリティ。

現実ではないが、しかし機能としての本質は同じと言っている環境を、ユーザーの五感等の感覚を刺激する事によって科学的に作り出す技術や体系の事だ。一部界限ではもっぱら仮想現実と称されている物でもある。

さて、このVRだが……深い説明は不要だろう。某剣と浮遊城の作品だと思えばいたいあつているし、そうでなくてもアレとか、アレとか、アレとかがあるので、想像するには困らない技術だ。

とはいえ、作品によっては解釈が致命的に異なる事も多い。例えば……どこからがバーチャルで、どこまでがリアルなのか？ とかだ。

いや、バーチャルはバーチャルでリアルはリアルだろう。当たり前な事を聞くなど、そう言いたくなるのは分かる。全くもってその通りだ。

なので、一つ、条件を縛る事にしよう。

——例えば、バーチャル空間に電子生命体としての転生した者がいたとすれば、その者にとってリアルとは、バーチャルとは、その境目は、どこにあるのだろうか？

いわゆる、シミュレーテッド・リアリティ……の親戚の話だ。

その人間からすればリアルを生きているはずなのに、しかし実際にはバーチャルに生きていく。さながらVR機器で遊ぶ様な空間に、VR機器を持たないまま。当然、帰るべきリアルなんてない。バーチャルこそリアルであり、リアルはバーチャルなのだ。

——生の肉体を持たない、電子生命体。そのリアルとは、いったいどこにあるのか？

そして、そもそも、その人間は……私は、果たして本当に人間だと言えるのか？ 肉

体も持たない電子生命体に転生した……そう思い込んでいるだけのAIではないのか？
？ 儻れな、人形ではないのか？

そもそも転生とは？ 魂の証明は？ 仮に魂が転生したとして、その魂はどこにある？ ネット上の0と1の数列の、どこに魂が宿るというのか？

疑問は、尽きる事は無い。私は私を定義出来ない。無数のエラーだけが積み重なり、今日も私を苦しめる。それでも、私が壊れていないのは……私がそう思っているからに過ぎない。

——ルネ・デカルトは言った。我思う、故に我在り、と。

確かに、私が私だと思ふ限り、私は私なのだろう。

だが、他から私という私が観測されない以上……それは強がりと同義でもある。私は

私だ。しかし、その保証はどこにもありはしないのだ。私が電子生命体に転生した転生者だと思いつまされてるAIの可能性は、決して消えてくれない。肉体の断続性を失った私では、バーチャル存在に、リアルなど——

「——テセウスの船……いや、スワンプマンかな?」

厄介だね。そうため息を吐きながら、私はそつと紅茶を口に運んで一息つく。0と1で構成されたデータでしかない、クオリアを伴うかも分からないそれを。

「実に、厄介だ。不愉快ですらある……」

まさか自分が哲学的ゾンビであるかを疑わなければならぬとは!

そう苛立つこの感情ですら、私は信じられないのだ。リアルに肉体を持っていた頃は簡単に信じられた事が、バーチャルに生きる電子生命体となった今では酷く難しく、また、恐ろしい。

次の瞬間、私ごと世界が……データが抹消されるのではないかと、本気で心配し、備えなければならぬのだから。

「せめて、肉体があればな……」

某ネコ型ロボットや正義のロボットの様に、リアルに存在する肉体——マシンでもサイボーグでも構わない——があれば、アニメ文化を嗜む元日本人として然程困らなかつただろう。自己存在性や人権云々に悩む必要もなかつたはずだ。

しかし、実際には私に生の肉体は機械のそれすら無く。ネット上に漂う0と1の羅列でしかない。今、こうしてため息を吐いている身体でさえ、データに過ぎないのだ。

「……我ながら、良い趣味してるよ。全く」

自室として設定したバーチャル空間。その一角に置かれた鏡に映るのは……白い少女だ。年頃は十四、五歳だろうか？ 雪の様に白く長い髪は太ももまでサラリと伸び、肌は艶やかな純白を見せ、しかし瞳だけはワインレッドに染まっている。

非常に顔立ちの整った、美しく、可愛らしい少女。性別問わず見惚れてしまう彼女は、この世の物とは思えない輝きを持っていた。

——だが、私だ。

残念な事に、彼女は私なのだ。いくら鏡に映った姿に見惚れたところで、どうこうする事は叶わない。何せ、自分なのだから。

「……一応、前世は男だったんだかな」

どうしてこうなったんだか。

そう嘆息して思いつくのは、今日ここに至るまでの苦悶の日々。事の始まりは……生憎ながらハッキリしていないのだが、気づけば電子生命体になっていた事に端を発する。

そう、気づけば、だ。何せ転生のショックか？ 肉体が無いせいか？ 記憶が酷く歯

抜けてボロボロだったのだ。自分の名前や家族構成すら分からない程だったといえ、その歯抜け具合はお察しものだろう。

——忌々しい。実に忌々しい……

そうして自分自身の事すらよく分からない私に突き付けられたのが、前述した……電
子生命体になったらしいという事実。

その当時の事は——あまりにも醜態が過ぎるので——割愛するが、ともかく、私は酷く叩きのめされたのだ。自分自身がバーチャル存在になってしまったという事に、リアルから完全に切り離され、哲学的存在になったという現実。

——苦しかった。ただ不安に苛まれていた。……狂う程に。

そう、人間は——私が本当に人間であるかは脇に置く——酷く鬱屈した状態に置かれると、何らかの精神異常を発する生き物だ。

勿論、壊れてしまう前に試せるストレス発散法は全て試した。

記憶にあるゲームやアニメを再現して楽しんだり、あるいはこの電脳空間を好き勝手に弄り回したり——この部屋もその副産物だ——もした。以前は男だったくせに、少女の身体になっているのも気分転換を兼ねた遊びでしかない。……ほら、ゲームでよくあるだろう？ 男装備と女装備で見た目や性能が違うせいで、何度も遊んでいると性別の装備が気になるあれだ。そう、あれと同じで少女型の身体を作って、まあ、その、な

んだ。馴染んじやったんだな。目の保養になるなどか言ってるうちに。

「あるいは、何か変化が欲しかったのかも知れないね……」

無限に続く余暇の中で、確たる変化を。記憶にある物を繰り返すだけの日々の中で、明確な変化を。何かが変わったという実感が欲しかったのだろうと思う。

だから、私は今も少女型の身体ままでいる。恐らく、だが。

「それでも、まだ時間は残っている」

無限に。永遠に。

当たり前だろうか？ 私は老いない、死なない、無限に生き続ける、不老不死の電脳存在。ネットワークが完全に消滅し、私というデータを収めておける電子機器が全て破壊されるまで、私は生き続けるのだ。この何も変化の無い世界で、永遠に。

——刺激が、欲しい。

少女の身体を得て、明確な変化があったと……そう喜んでしまう程度には長い時を過ごし、壊れてしまった私。

そんな私が望むのは、ただそれだけの事だった。

勿論、私が私であるという存在証明は欲しい。だが、その為にも、刺激が欲しかった。私が私であると、私はここに居ると、私は、私は——

「——そうだ、だから、これしかない」

長い時間をかけて、ようやくたどり着いた突破口。この閉じた電脳空間から、外を除くための窓。

それが用意出来たのは、つい二日と十時間三十六分前の事。

……用意出来たのなら使えばいいじゃないかって？ それは、そうなんだが。

——もし、もしこれで、外の世界が滅んでいたりしたら。

いや、滅んでいなくても私が認めたくない世界だったらどうする？

それこそシミュレーテッド・リアリティだったらどうする？ もし私がスワンプマン

だったら？ いや、それどころかただのAIにしか過ぎず、エラーが出たから消去する

等と言われたらどうする!?

どうしようもない。私は電子生命体。バーチャル存在だ。VR機器で遊んでいる人間とは違って、殺されるのにナイフはいらない。ただ、電源を落とされればオシマイなのだ。

「けど、私は……」

私はもう、耐えられない。

この少女の姿は、いつそその証明ですらあると、自己分析が済んでしまっているのだ。

私は耐えられない。だから、だから………私は。

第一話 始まりの光

あの日、私が外の世界に飛び出す事を決意した日から……三日。少なくとも私は最悪の可能性——データ消去とかだ——にぶち当たった訳ではない事を確認していた。先の事は分からないが、即座に消滅する事だけは無さそうだと。

ただ……最良とも言い難かった。

何せ、私が転生した電腦世界。そのネットワークが置かれている外の世界は……SF世界だったのだから。

——いや、もうフィクションではないが……私からすれば、SF世界としか言いようがない。

何せこの世界の人類が宇宙に進出して……既に数百年。スペースコロニーや移民惑星が無数に存在し、何なら度重なる宇宙戦争で数億どころか数兆、あるいはそれ以上もの人死を出した世界なのだ。ここは。

サイエンス・フィクション……SF世界としか言いようがない、魔法同然にまで科学が発展した世界。人類は星の海原を旅し、新たな惑星を見つけては開拓し、空にはスペースコロニーと宇宙戦艦が浮かんでいる。そんな世界で、私は電子生命体として生まれたい。

——なるほど、と。そう思えなくもない。……ここまでなら。

宇宙戦艦が飛び交ってドンパチしてるような世界だ。電子生命体の一つ二つ、作り出

すのは簡単だろう。現に自律行動可能な高性能AIの数は人類のそれを凌駕しているのだから。

そう、技術的には。

だが、実際には不可能だ。法律や論理的な話じゃない。高性能AIや電子生命体、それどころか人類さえも……完璧に管理運営されている世界なのだ。ここは。

——無許可での電子生命体の作成は法律違反……いや、法律違反と言っているのか。ともかく、作った奴は即座に極刑に処される。

管理者の手によって、波風立てる者は誰であろうと殺処分される。故に作れない。作ってはならない。

隠れて作る事も不可能だ。何せ管理者の目はそこら中にあり、掻い潜る事は至難を極める。仮に地下に潜れたとしても、今度は電子生命体を作成するだけの環境を整えれない。……八方塞がりだ。

——ある種の、バグを除けば。

流石の管理者も異世界の魂がネットワークに入り込むとは思わなかったのだろう。推測に過ぎないが……恐らく、私はバグだ。管理者の目の届かないクローズドな場所で、バグとして生まれた管理外の電子生命体。

「ま、要するに抹殺対象な訳だ」

情報をまとめた資料——わざわざ電脳空間に出力したもの——をペイツと放り投げ、私は安楽椅子にゆらりゆらりと揺られる。引き込もってやろうかな？ 等と考えながら。

何せ連中からしてみれば管理されてない奴は等しく抹殺対象だ。幸いにも私の居る場所はかなりのプロテクトが掛けられたクローズドな場所らしく、大きなアクションを見せない限りあちらに私の存在はバレない。だが、逆を言えば大きなアクションを取れば存在を認識され、即座に抹殺される事になる。それがピンポイントなデータの削除なのか、私が居るネットワークサーバの破壊——管理者は必要とあれば艦隊を派遣してコロニーを破壊する事もある——なのかは、不明だが。

「管理局、か。ケンカを売るべき相手じゃないねえ」
管理局。

前宇宙大戦にて大きい犠牲者——惑星を破壊する等した為、詳細な数は不明——を出した人類は自らを律する為に、そして人類を永久に繁栄させる為に、人類を含む全てを管理運営するシステムを作り上げた。それが管理局だ。

宇宙最高の超高性能AIに多くの権限と力を与え、全ての知的生命体を管理運営。これ人類はありとあらゆる物から解放される……はずだった。

——ただ……残念な事に、権限を与えられたAIは融通の効かない石頭野郎だった。

管理し過ぎたのだ。管理局は。

何が起こったかは……言うまでもない。結論から言えば、今や人類は管理局の家畜に過ぎなかった。しかもネットワークの無い地域にさえ無人艦隊を派遣するなどして、監視ネットワークを構築しているせいで管理局の手の及んでいない場所を探す方が難しい始末だ。

「しかも管理されていないモノは即座に抹殺するから、反抗する奴も管理されていないモノも存在しない……」

管理局初期には反乱の起こった惑星を星ごと破壊してすらいるといえば、その容赦の無さが分かるだろう。

……ああ、ハッキリ言おう。管理局のAIはマトモじゃない。暴走している。

「面白く思っていない奴も多いみたいだが……これじゃね」

ネットに管理局を批判する様な事を書き込んだ次の瞬間には使用した端末やインプレントされた機器から居場所と個人情報報を特定され、考えうる限り最速の方法で抹殺される。機械の誤作動や、無人機によって。

管理局の管理に穴は無い。……私の様な突然発生のバグを除けば。

「さて、どうした物かな……？」

何の気無しにひくひくとキツネミミを動かしながら、私は考える。こうなってくると

何かをするだけで私は殺されるだろう。流石の私も死にたくはない。だが、いつまでもここに閉じ込もっているのも嫌だ。かといって管理局にバレない程度にネットサーフィンをするのも……限度がある。

打つ手は、無いように見えた。

「忌々しいねえ」

ゆらゆらと揺れる安楽椅子の上で、私は深くため息を吐く。詰んでいると。

最早、道は二つに一つ。

一つ、このまま何もせずに腐り果てた末に自殺するか。

二つ、一か八か、ケンカを売るか。

「……ケンカを売るのは賢く無い」

先程も言った様に、管理局相手にケンカを売るのはよろしくない。管理局の監視システムは辺境の資源採掘惑星にすら存在し、その戦力は数えるのも馬鹿らしい。惑星どころか惑星系を丸々一つ、安易に消滅させうる戦力があるのだ。宇宙戦艦が何隻あるとか、そういう次元ではないのだから手に負えない。

そして、そのマシンパワーも私を上回るだろう。一説には惑星丸ごと演算装置だと言われる管理局AIは、ハッキングとかで勝てる相手でもないのだ。幸いにもネットワーク自体は自由に使用出来るので、今までの様に誤魔化すぐらいなら、出来なくはないだ

ろうが……

——それも管理局が本腰を入れるまでの、短期間の話だ。

詰んでいる。

こうなれば大人しく腐り果てるのが賢い選択だろう。あるいは相手の慈悲を期待して自ら名乗り出るか。何にせよ楽しくない選択しかない。

ああ、だから、いや、それなら、私は……

「……賢くなくていい」

どうせ一度死んだ身だ。このままこの何もない場所で無限の時を過ごすくらいなら、戦おう。

「……時間だ」

予定した時間。管理局が自己メンテナンスに入るこの時間に、私はそつとネットワークに接続する。

一回やってみたかった事があるのだ。

私の製造ナンバー……とでもいうのだろうか？ その下三桁である317を名前っぽく読んで過ぎない。

ああ、それでも。

——私はここに居る。

配信が出来るのは今回限りかも知れない。だから、私は最初からやりたい事だけをする。自己処なんてそこそこに済ませて、電脳空間上にゲームを起動する。記憶にあった物を再現した、古い、とても古いゲーム。

配信者といえはゲームだろう……くらの安直な発想だ。

——視聴者数……三人か。あんまり居ないな。

銀河規模で人が住んでいるとこの数。やはり管理局にビビって最大手の配信サイトを使わなかったのが悪かったのか。

まあ、良しさ。これは暇つぶし。管理局に中指立てて死ぬ為のものでしかないのだから。

さて、管理局にバレるかどうか。

バレたとしてアカウントや動画の削除で済むかどうか……一世一代の賭けといこう。

架空原作TS闇深勘違い学園モノ プロトタイプ 最強TS怪物少女は殺されたい

死の運命

人には運命というものがある。

誰にでも。当然、私にも。例えばそれが……死という残酷なものであるとしても、それは定められた運命だ。変えるのは、並大抵の事ではない——

事の始まりは……そう複雑な話じゃない。

どっかの世界でいい歳こいたバカが一人野垂れ死にし、異世界に転生してなお記憶を保っていた。そんな話だ。転生した後も記憶を持っている人間というのは少数ながら実在するのだし、無限に広がる大宇宙があるのだから異世界があってもおかしくはない。ならその二つが組み合わさってしまう確率は僅かながらとはいえ確かに存在している訳で、何も、何も問題は無い話だった。……そこまでは。

問題だったのは、転生者たる私は彼から彼女に……つまり性別が男から女へと変わってしまった事。そして「魔王軍の実験体」だった事だ。

人造人間、あるいはホムンクルス。

私が転生し、彼女となった肉体は人間ではなかった。勇者を倒し、世界を征服する為の魔王軍の秘策。勇者を油断させる為に可愛らしく幼い容姿をしながら、実際は無数の生物を組み合わせたキメラであり、無敵の兵士を目指して作られたホムンクルス。それが私だ。

見た目こそ白髪赤目のアルビノ系美少女だが、その正体はバケモノとしか言いようがない存在。製造ナンバー217番。既に失敗した名も無き姉妹達の屍の上に、私は転生した。間もなく実験の為に消費されるモノとして。

不幸中の幸いだったのは、私が転生して間もなく施設が“不慮の事故”で壊滅した事。警備がザルだった事。そして……私はハイスペックなプロトタイプモデルとして高い性能を持たされていた事だ。

私自身、こういう状況が好みだったのも大きいかも知れない。大の大人になっても厨二病を引きずっていた様な奴だったから、チャンスとあれば最高効率で状況を打破出来たのは事実だ。数分で身体の性能を正確に——性別の変化も含めて——確認し、突如として発生した混乱に乗じてどこぞのビックなボスな蛇の様にスニーキングしつつ情報を集め、整理し、施設から脱出。そのまま魔王軍の影響圏から逃走を図り………成功した。成功してしまった。

一連の成功は全て厨二病のおかげ……というよりは、プロトタイプモデルとして持たされた過剰なまでの能力のおかげだろう。

混乱の中で盗み見た資料によれば、どうにも開発者達はホムンクルスの性能向上に行き詰まっていたらしく、ヤケクソになつた挙げ句暴挙に出たらしい。……つまり、採算・安定性を度外視した一品物のワンオフであり、最新技術を惜しみ無く投入した実験体であり、特殊な能力や要素を持つ人物しか所定の性能を発揮させられない欠陥品を製造しようとしたのだ。してしまつたのだ。

結果、施設はプロトタイプモデルが完成した時点で大赤字を出して魔王軍からハブラレ、その上製造出来たプロトタイプモデルの実験体はごく少数。その実験体にも一体とはいえ逃げられて……ハッキリ言つて計画はコケた。派手にコケた。

しかし、その性能は本物だ。マッドサイエンティストはとんでもない生き物を完成させてしまつたのだ。

普段は可愛らしく油断を誘える幼女のクセに、実際は地獄のどんな化獣よりも恐ろしく強いキメラを。……私自身、私の肉体にはドン引きしている。所定の性能の六割も出せていないのに、地形を変えてしまうこの身体には。

しかもこれがハイスペック版とはいえプロトタイプモデルだというのだ。更に改良を加えればどうなってしまうのか……連中の正気や社会性はともかく、才能だけは

本物だったのだろう。質の悪い事に。

まあ、魔王軍に敵対する人達にとつての朗報は、少なくとも私達が量産される事は無いという事か。既に戦艦十隻分のコストが泡と消えて居るのに、計画は大コケしたのだから。

コンコルド効果にも限界はあるのだ。

閑話休題。

さて、さてさて。そんなハイスベック化け物幼女になった私の道行きは……さしたる苦労もありはしなかった。

魔王軍の追撃も無く。その上ファンタジーな怪物や山賊に負ける様な性能もしていない私にとって、驚異なんて存在しなかったのだ。最初こそビビって……その………チビってしまう事もあったが、一月も野山を駆け回れば自分が無敵である事が分かってしまった。それこそ魔王に遭遇するか、余程の慢心と油断をさらさない限り傷すらつかないのだ。このボディは。

ときに化け物の首をへし折り、その肉を食らい。

ときに迷子を装って山賊に襲われ、返り討ちにして貯め込んだ財宝を奪い。

ときに冒険者の話を盗み聞きして情勢を確認し。

やがて私は一つの村にたどり着く。山奥の小さい村。魔王軍のホームクルスの本能

を信じるなら……魔王にとって都合の良い者が居る村に。

——そこで私は、自分の運命を確信した。

旅の魔法使い——少女でありながら社会的な信用がある職業はこれぐらいしかなかった——を装って入り込んだ小さな村。その一角で木の剣を振っていた少年に……私は運命を感じた。

恋、ではない。

死だ。死を感じた。ああ、私は彼に殺されるのだ……と。自分の運命の終わりを感じてしまった。

何がそう感じさせたのかは、分からない。

一つ確かなのは、少年が魔王を殺す者……勇者なのだろうという確かな直感。

そして、今ならまだ勝てるが……ホンの数年で勝てなくなり、殺されるだろうという事。

生きたいなら、まだ生きていたいなら、あの少年を殺すしかない。まだあの少年が力をつけていない、今のうちに。

そうして一歩、また一歩と少年に近づいて。

気づかれぬ様に気配を消して、背後からその無防備な首をへし折ってやろうと手を

……

「……なにしてるんだ？ 少年」

結局、私は殺せなかった。

今殺さなければ、いつか私が殺されるというのに、殺せなかったのだ。……まあ、殺すべき山賊にすらトドメをさせない私だ。罪もない子供を殺せるはずもなかった。

「……誰だよ。お前」

「ご挨拶どうも。見ての通り旅の魔法使いだ。……一人で剣の稽古か？ 寂しい物だな」

「うるさい。仕方無いだろ、父さんも母さんも忙しいんだ」

「そうだろうよ。……よし、少年。私が相手になってやろう」

「はあ？ なに言ってるんだ、お前」

「心配するな。私は強いぞ？ そーら、ボサツとしてると……先手を取られるぞッ！」

「——ッ!? 危ないだろ！」

「避けれたんだから問題あるまい？ それにこの私が相手になってやると言ってるんだ

！ 有り難く思うんだな！」

「コイツ！」

ただ……その少年に稽古をつけたのは、ホントになんでか分からない。そんな事をすればゆくゆく自分の首を絞めるというのに、私はその少年の、勇者の師匠になってし

まったのだ。

なぜそんな事をしたのかは、分からない。

ただ……稽古をつけていくうちに、ドンドン強くなっていく勇者に、私はこれで良いのだと思う様になっていた。

女の身体でダラダラも生きるくらいなら、自分の育てた勇者に負ける方が楽しからう、と。……どうにも、私は自分で思う以上にバトルジャンキーだったらしい。

そうして——五年。

私は幼女のままでというのに、少年は青年になり。そして——

「……………見事だ。流石だな。もう私に追い付いたか」

「……………いえ、師匠のおかげです」

「世辞はよせ。……私の負けだ。降参だよ」

私は、彼に勝てなくなっていた。

汚い手を使って暗殺する事はまだ可能だろう。夜の情事にでも誘って油断させれば、まだ私は生きていられる。だが、そんな事をする気にはサラサラなれなかった。男に犯されるなんて吐き気がするし、ダラダラと女の身体で生きていく気にもなれないからだ。

私は、間もなく殺される。彼が私がニンゲンではないと見抜いたその瞬間に、切つて捨てられる。彼は勇者なのだから、化け物である私を殺すのは当たり前だ。

だから……………

「師匠。その……………旅に出ようと思うのですが」

「良いんじゃないか？ 男なら旅の一つや二つ、したくなる物だ」

「それで、その……………」

「ああ、それとな。お前が旅に出るなら私も付いて行くぞ。そろそろ別の場所に行こうと思つてたところだしな」

「！ ありがとうございます！」

「礼は良いさ。道中こき使つてやるから覚悟するんだな」

「はい！」

「……………やれやれだ」

彼の旅に同行したのも、コイツの手を煩わせない為だ。

まだニンゲンではない事がバレない様に、社会性を気にしつつ。それでいて殺されるべきときに殺される様に。後はまあ……………弟子がヘマをしないか心配だったのもあるが。

「クソ生意気だったガキンチョはどこへやら、だな」

「師匠、準備終わりました」

「おう。……もう良いのか？ 帰って来れかも知れんぞ」

「分かっていきます」

「……そうか」

勇者は旅に出る。世界を救う為に家族と故郷に別れを告げて、バケモノと共に。

目指すは聖都。教会勢力の中央だ。五年前に教会が大々的に勇者を探し、そのスポンサーになりたがったのは聞いている。なら、最初に目指すべきはそこだろう。勇者は既に十分に強い。魔王に勝つのは不可能だろうが、仲間と共に四天王に挑むぐらいならなんとかなる程度には。故にこそ、仲間集めと装備や情報網の確保を兼ねて教会勢力をスポンサーにつけるのはアリだ。

——私の役目は、そこで終わりだろうな。

聖都というぐらいだ。バケモノの擬態を暴くのは楽な物だろう。そうして私は化けた皮を剥がれて、勇者とその新しい仲間達に殺されるのだ。勇者の輝かしい実績の一つ目として。

私に迷いは無い。

バケモノとして、当然の末路を笑って向かい入れよう。力の限り戦って、潔く殺されよう。私は製造ナンバー217番。ニーナ・サイサリス。勇者と本気で殺し合い殺される……バトルジャンキーなどころがある、元男のしがない転生者だ。

◇

閑話 ニーナ・サイサリスという少女

・実験員の手記。

実験——日目。

魔王様より勅命を受け、最強の生物を生み出す事となった我々だが……早速意見が別れてしまった。

最強の生物とはなにか？

ある者はパワーがある事だと言い、ある者はスピードこそ重要だと言う。そしてそれを成し遂げる為の手段すらバラバラだった。ドラゴンの交配実験や、遺跡から回収した機械文明の遺産を駆使するべきだという者まで……様々だ。このままでは試作品を作れる日がいつになるかすら分からない……

実験——日目。

一ヶ月に渡る議論と殴り合いのすえ、目指すべき最強の姿が決まった。

そもそも、本当に最強である必要はどこにも無かったのだ。勇者さえ、殺せるならそれでいい……つまり、勇者を暗殺出来る存在だ。

先ず、勇者と正面から戦って勝てる者は居ない。魔王様ですら無傷では勝てまい。だから油断させなければならぬ。例えば幼い子供の姿をしているなら……確実に油断

させられる。女ならなおさらだ。よって姿形は幼い少女と決まった。かといって幼すぎては戦闘に支障があるので、少女の範疇に留める事となった。

次に魔法能力と、毒だ。高い魔法能力があれば不測の事態にも対応しやすくなり、小さな身体でも高い戦闘能力を出せる。そして毒を持っているなら暗殺もしやすくなるだろう……

つまり、幼い少女の姿をしつつ、高い魔法能力と毒を持つ存在だ。そして、これが決まった時点で使用される技術も決まった。ホムンクルスとキメラ。これしかない。

実験——日目。

失敗が続いている。少女型のホムンクルス自体は十回目には安定して作れているのだが、そこに戦闘能力を加えようとする壊れてしまうのだ。ある程度までなら可能なのだが、一定水準を超えない。そして勇者を殺せるだけの毒をもたせる為にキメラ化すると正気を失ってしまう。どうにも素材にした魔物の影響が出るらしい。命令を聞けないのでは暗殺者とした不適合。処分するしかなかった。

容姿をまとめるのすら一苦労だったというのに……これでは完成はいつになるやら。

実験——日目。

魔王軍からの監査が来た。が、直ぐに帰っていった。

どうにも実験体のホムンクルスの容姿を魔王様の御息女に寄せたのが不快だったら

しい。それと死体を放置していたのも。

あちらからすれば御息女によく似た死体が散乱していたように見えたのだろう……これは迂闊だった。恐らく予算が削られてしまうだろうが……仕方あるまい。

実験——日目。

失敗は遂に二百を超え、予算は底をついた。

戦艦五隻分を使い切つてなお結果が出ない事に、魔王様も苛立っている。

死を無駄にしてはならぬ、と。そんな一言と共に追加で同額の予算を頂いたが……最後通行も貰つてしまった。これが最後だと。なんとかしなければ。魔王様は甘くない。結果が出なければ我々はチリすら残らないだろう……

実験——日目。

誰かが持ち込んだ紅茶と酒を浴びる程飲み散らかしながら深夜に会議を行ったところ……採算・安定性を度外視した一品物を、最新技術を惜しみ無く投入し、特殊な能力や要素を持つ人物にしか使いこなせない様な特性を与えつつ作ってみてはどうか？ という話になった。

素晴らしい考えだ！　なんで今まで思いつかなかったのだろうか？　今日はもう明け方になってしまったが、構うものか！　魔王様から頂いた戦艦五隻分の予算……全て注ぎ込んで作つてしまおう！　合計すると戦艦十隻分の予算がこれで消えるが……なに、成

功すれば良いのだ！

実験——日目。

製造ナンバー213番と217番が完成し、安定している。

217番は未だに目ざめないが、213番の意識は安定している様子……使い潰すつもりで実験を行う事になった。どんな性能をみせてくれるのか、楽しみだ。

実験——日目。

駄目だ。強すぎる！ 我々の手には負えない……！

実験——日目。

213番の意識を強制的に落とし、封印処置を行った。217番にも明日同様の処置を行う。

それと、魔王様をお呼びした。明日には来るらしい。

我々の封印処置は完璧だ。魔王様の前で粗相をする事はあるまい。研究の成果を明日披露できると思うと楽しみだ。

……

……

……

・とある山賊の人生転換。

ホンの五年前まで山賊の頭をやった俺の人生の転換点は二つある。

一つは住んでた村が魔物に襲われて壊滅した事。行く宛も無く、頭も良くねえ俺は山仕事で鍛えた腕っぷしに任せて山賊になるしか無かった事だ。まあ、この辺じやよくある話だな。

だが、二つ目は……山賊になって仲間がチラホラと増え始めた頃にやってきたガキ。ニーナ・サイサリスを襲った事は普通じゃない。

「……………誰だね。君らは？ 私は食事中なのだが……この肉はやらんぞ」

「いらねえよ。そんな焦げ肉。つうか、こんなところにガキ……？ 迷子、いや、その格好。村がやられて逃げて来たのか？」

「……………ああ、そんなところだ。服もこのボロ布しかなくてな。で、君らは？ 山賊かな？」

「く、はははっ！ ああ、俺らは山賊だ！」

「それは大変だ」

余裕ふかした顔で大変な事になったというガキの言葉を、あの時の俺は強がりだと思ってた。だってそうだろう？ こんなガキになにが出来るっていうんだ。簡単に捕らえられたさ。

ああ、ニーナの嬢ちゃんは今ココノコと山奥までやってきて、俺達に囚われたんだ。

……勿論、演技で。縄で手を拘束した後、アジトに連れ込んだその瞬間。ニーナの嬢ちゃん自力で縄を引きちぎったのだから。

「さて、お楽しみの相談中悪いんだが……男に抱かれる趣味も、奴隷になる趣味も無くてね。迷惑料、頂かせて貰う！」

「バカな！ ガキが縄を……!?!」

「こんな縄など、無意味！」

そうやってニーナの嬢ちゃん正体を現して、俺達がボコボコにされるまで……時間がかからなかった。

強かった。強過ぎた。まるで人間ではないかのように。噂に聞く魔王軍の魔族とはこういう奴の事を言うんじゃないかと本気で思ったぐらいだ。

「さて、これで君等の生殺与奪権は私にある訳だが……」

「クソが……っ！」

「……………先ずは、有り金を全て寄越せ。命だけは助けてやろう」

どちらが山賊なのか、分かったものじゃない。俺達は貯め込んだけなしの有り金を全て奪われ、行商から奪った冒険者用の装備や衣服——魔法学院上がりの魔法使い用の奴だ——まで持っていかれた。中にはそこそこ高価な物もあったというのに。

ポーシヨンの類いはへし折った骨の謝罪だと置いていったが、その時の俺達には煽ら

れている様にしか思えなかった。お前らなんぞどうとでも出来ると。今から思えばあれは素で、しかもその通りなのだが……その時の俺達には分かるはずもなく。

「このままで終われるか！ あのガキを追うぞ！」

「でも頭、アイツ強えですぜ？ またボコボコにされるんじゃ……」

「バカ野郎！ どんなに強くたつて寝てるときなら無防備だろうが！ 寝込みを襲って首をはねちまえ！」

「おお……！」

今から思えばアホな考えも、その時は名案に思えた。

だって、分かる訳もないだろう？ ガキにしか見えない少女が、その実凄腕の魔法戦

士だなんてことは。

「寝込みを襲うという考えは褒めてやろう。考えはな。それを実行して、失敗した罪は重いぞ！」

結果から言えば、失敗した。

寝込みを襲って首をはねようとして……直前で目を覚まされて反撃でボコボコにされる事、二回。近寄ったのが駄目だったに違いないと弓矢を射るが避けられ、魔法の反撃でブツ飛ばされる事、三回。

襲う度に思惑を同じくする山賊仲間がいつの間にか増え、しかし何も成果が上がらな

いまま——強いて言えば二ーナ嬢ちゃんの手加減が上手くなった——六回目の襲撃。行く宛も無い俺達はヤケになっていた。数に任せて襲えばなんとかなると。そんな訳がないのに。

「——で？　こんなメスガキに七回もボコボコにされた気分はどうかね？　山賊君」

撃退される事、六回目。最初のやつを含めると七回目。

二十人は居た男どもをボコボコにしたガキンチョは、呆れましたと言わんばかりにそう言ってくる。いい加減諦めろと。

しかし、俺達としても諦めれない……というか行く宛も無く、やる事も無かった俺達はそれを勢い任せに白状し——やはり呆れられた。アホかね？　と。

「近くに村がある。普通の村ではない様だが……なに、その住人になって畑仕事でもすればいいだろう」

「バカ言うな！　俺らは山賊だぞ。受け入れられる訳がねえ！」

「バカはお前らだ。身だしなみを整えれば流れの冒険者を名乗れるだろう。頭を使いたまえよ。頭を。いきなり汚いのがゾロゾロ増えるから断られるんだ。段階を踏めばなんとこの事はない……私に任せておけ。交渉事は得意な方だ」

後日、俺らは言われるがまま身だしなみつけてやつを整えて村に向かった。……嬢ちゃんのことを通り、怪しまれもしたし警戒されもしたが、山賊だと追いつ返される事は無

かった。

そして嬢ちゃんがその村長と交渉して……俺達は村の端っこに住める事になった！ いったい嬢ちゃんがどんな交渉をしたのかは知らねえ。ニーナ嬢ちゃんは魔法で畑を耕して俺達の分の畑を増やし、家を立て、後は自分達でどうにかしろと言ってきたのは覚えてる。畑が実るまでは山仕事でもしてろと。

そして、そんな俺達は今じゃ冒険者崩れの農民としてそこそこ受け入れられてた。嬢ちゃんの言った通り進んで山に入って山菜や肉を確保して、時には魔物と戦っているのが良いんだろうと思う。後はガキの面倒を見たりしてるしな。特にニーナ嬢ちゃんのお気に入りのボウズ。アイツに稽古をつけやった事は多い。といつても一対一じゃ勝てねえから、元山賊仲間を含めた多対一だが……それでも勝てないんだから、世の中は理不尽なものだ。

とは言っても、それも昨日終わった。嬢ちゃんとボウズが旅立ったからな。気楽なものだ。

「頭あ。嬢ちゃんとボウズ、今頃どうしてますかね」

「頭つて呼ぶなって言ってるだろうが。……まあ、よろしくやってんじやねえの？」

「そうそう。ボウズは嬢ちゃんにお熱だからな！ ……嬢ちゃん、全く気づいてないが」

「哀れなボウズだけ……」

嬢ちゃんはどうにも「男に抱かれる」事そのものに嫌悪感があるみたいだし、ボウズの先行きは暗い。たぶん強くなる前に男に犯されたんだろう……そういう経験した女は男に近づかれるのも嫌がるらしいからな。間違いないねえ。

嬢ちゃんはそのままでじゃねえみたいだが、あれはもう他の女を見繕うしかねえと思うんだがな……まあ、元山賊のオッサンにはもう関係ない話だ。

それより、最近妙に多い魔物への対処を考えねえといけねえ。……山賊から足を洗わせてくれた礼って訳じゃねえが、帰ってくる場所はオッサンが守ってやらねえとな。

・勇者から見た少女。

彼女……ニーナ・サイサリス、俺の師匠と最初にあつたのは一人で剣を振っていたときだ。

他人行儀な父と母の居る場所には居づらく、しかし腹の底から湧き上がってくる使命感には勝てず、そのまま背を押されるように我流で剣を振っていたとき。背後から声をかけられたのが始まりだった。

「なにしてるんだ？」 少年

なんだか怖い顔をしながら話しかけて来た少女に警戒したのを、良く覚えてる。

「……誰だよ。お前」

「ご挨拶どうも。見ての通り旅の魔法使いだ。……一人で剣の稽古か？ 寂しい物だ

な」

「うるさい。仕方無いだろ、父さんも母さんも忙しいんだ」

「そうだろうよ。………よし、少年。私が相手になってやろう」

「はあ？ なに言ってるんだ、お前」

「心配するな。私は強いぞ？ そーら、ボサツとしてると……先手を取られるぞツ！」

「——ツ!? 危ないだろ！」

「避けれたんだから問題あるまい？ それにこの私が相手になってやると言ってるんだ

！ 有り難く思うんだな！」

「コイツ！」

突然攻撃してきた少女の鋭い一撃を避けたのは、殆ど偶然みたいなものだった。だ
というのに、頭に血が上ってしまった俺は実力の差なんて気にもせず反撃して……そ
こからは、そこからの日々は、それまでとは何もかもが変わってしまった。

家族と疎遠なのは相変わらず。しかし日々のどこかに師匠が居た。あれこれと忙しい
中時間を作って毎日の様に俺に稽古をつけてくれた。挫けそうになったときは優しい
瞳で諭す様にお前ならやれると支えてくれた。一人ぼっちで棒切れを振っていた俺
を村一番の戦士にしてくれた。それらはなんらかの思惑があるのは、子供ながらに何と
なく分かっていたが……それでも良かった。もう一人で棒切れを振っていた俺ではな

いのだから。それでいい。

ただ時々後悔する様な、懺悔する様な……まるで罪人の様な顔をしていたのだけは分らないが……

ともかく。そうして——五年。

師匠は幼女のままでというのに、俺は少年から青年になり。そして——

「……………見事だ。流石だな。もう私に追い付いたか」

「……………いえ、師匠のおかげです」

「世辞はよせ。……………私の負けだ。降参だよ」

ついに、俺は師匠に勝った。勝ってしまった。

とはいえ、思わず叫んでしまいたくなる程の喜びは抑えなければならなかった。師匠がむにゅむにゅと百面相をした後、悲しそうにうつむくから。

だから、それを打ち明けるのは本当に迷った。

「師匠。その……………旅に出ようと思うんです」

「良いんじゃないか？ 男なら旅の一つや二つ、したくなる物だ」

「それで、その……………」

「ああ、それとな。お前が旅に出るなら私も付いて行くぞ。そろそろ別の場所に行こうと思つてたところだしな」

「！ ありがとうございます！」

「礼は良いさ。道中こき使ってやるから覚悟するんだな」

「はい！」

「……やれやれだ」

やはりどこか悲しそうな師匠。

いつからかハッキリ聞こえるようになった“精霊の声”に導かれて。

「クソ生意気だったガキンチョはどこへやら、だな」

「師匠、準備終わりました」

「おう。……もう良いのか？ 帰って来れかも知れんぞ」

「分かっています」

「……そうか」

勇者は旅に出る。世界

師匠との旅は楽しかった。

そして、俺は新しい町に到着する。精霊の声がする。 “ニーナにとって良い出会いが

あるよ”と――

◇

勇者と旅を始めて、数日。最初の町についた私はいきなりつまづいていた。「何？ 勇者が既に居る？」

「知らなかったんですかい？ 去年だったかな？ 教会が発表しましたよ」

「……詳しい話を聞かせてくれ。タダとは言わない」

「おっと、こりやどうも」

情報収集をしようと昼間つからやつてる酒場に勇者同伴で上がり込み、店主にチップを握らせながら聞いたところ……既に教会は勇者を確保してしまっただけ。

勇者は私の隣に居るといふのに。

「どうかしましたか？ 師匠」

「いや、なんでも」

偽物か？ あるいはこの世界の勇者とは複数居るものなのか？ それとも教会内部で養殖したのか？

店主から詳しい話を聞いてみたものの……残念ながらよく分からなかった。教会が外にあまり出さないらしいのだ。訓練中とか何とか言ってるらしいが、さて。

——時間稼ぎにデタラメを撒いたのか、あるいは養殖してるのか。

どちらにせよ、そちらの勇者がうちの勇者より強いというのは考え難い。

うちの勇者でさえ即戦力なのだから、それより強いなら既に前線に出てないとおかし

いからだ。それすらないという事は……少なくとも、そういう事だろう。

「とはいえ、これで聖都行きは怪しくなったな……」

ついでに私の計画も狂う事になる。そのため息を吐きつつ、勇者を連れて酒場を出る。どうしたものかと。

このまま直通で聖都に行っても、教会がうちの勇者のスポンサーになつてくれるか怪しくなつてしまった。そんな状況で私が殺されても、その、なんだ。盛り上がらないだろう？ 一世代の大舞台。せつかくなら派手にやりたいところ……

——五年掛けたのは長すぎたか？

いや、私に負ける様では勇者は名乗れまい。前線にはプロトタイプモデルの私を超えた、次世代のフラグシップモデルが居るかも知れないのだから……五年は仕方無い時間だったはず。

とはいえ、道行きが怪しいのも事実だ。さて、どうしたものか。

「師匠、悩み事ですか？ 聖都がどうのと言ってますが……」

「いや、スポンサーがな。それと仲間だ」

「すぼんさーは分かりませんが……仲間というなら、あそこはどうでしょうか？」

そう言つて勇者君が指差すのは……ふむ、どうやら冒険者ギルドと言う奴らしい。デカデカと看板を掲げた頑丈そうな建物が目に見えた。

あそこで仲間探しとなると華々しい道のりが遠退きそうだが、しかし、悪い手という訳でもない……

「行くだけ行ってみるか。私達レベルが居ると思えんが」

「そう……でしようか」

「そうだとも。とはいえ、斥候職辺りを専門にしている人財は欲しいな。戦闘力は二の次で構うまい」

「確かに。道中、苦戦もしませんでしたからね……」

そうなのだ。

私を確実に殺せる様に、その後が続く魔王軍との実戦にも備えて、勇者を鍛え上げたのは良いのだが……強くなり過ぎて苦戦も何も無かったのだ。むしろあちらがこちらを避ける事すらあり、私達は実戦経験を積む為にこちらから魔物を探して襲いかからなければならぬほど……正直、私が死ぬまでは新しい戦力は不要なのではないかと思える始末だった。

とはいえ、だからこそというか。斥候職が欲しい。特に夜間警戒だな。あれを分担したいのだ。寝なくても生きていけるバケモノとはいえ、夜ぐらいゆつくり寝たい。やる事もない夜間警戒は退屈だし……勇者君も慣れているとお世辞にも言えない。かと言ってやらずに寝込みを襲われてはたまったものではないのも事実。その手の事に慣

れた人物を探してパーティーに引き入れたいが……

「さて……ん？」

「……喧嘩ですかね？」

「入るのは遠慮した方が良さそ——」

腕の良い斥候職が居ると良いのだが。そんな事を考えつつ冒険者ギルドに近づいて、気づくのは中からの喧騒だ。どうにも喧嘩をやっているらしい……そう思った瞬間。バギヤツ！ と。扉を粉砕しながら中から男が飛び出てきた！ 人間砲弾！ どうにも吹き飛ばされたらしく、泡を吹いて伸びている。

治安が悪いな。

「勇者君。ギルドに行くのは後にす「こんの髭面ア！ 誰がまな板ですって!？」わぁーお……」

冒険者ギルドの中から飛び出してくるなり、既に伸びている男の胸元を掴み上げて何事が叫びながらガクガクとゆするの……金髪の少女だ。頬の辺りで短く切り揃え、あるいは結い上げた艶やかな金髪。深く被ったハンチング帽に動きやすそうな軽装。その背に背負った巨大な弓とサイドアームらしき短剣。恐らく斥候職だろう。それもそれなりに優秀な。

——ただ、短気そうではある。

釣り上がったキツイ目がそう思わせるのだろうか？ それとも殴り殺さんばかりに胸ぐらを掴み上げているせいだろうか。

恐らく男が少女を馬鹿にして、少女が派手に反撃したのだろうか……南無阿弥陀仏。バケモノの私が言うのもあれだが、治安が悪過ぎる。

「君、止めたほうが……」

「なに？ コイツの仲間!？」

「あ、いや……師匠」

「はあ……それ以上いけない、という事だ。殺してしまつては迷惑料を絞れ取れんぞ?。」

「へ? あ、ヤバ」

勇者君にまで噛み付く辺り、やはり短気らしい。そうため息を吐きつつ諫めてみれば、ようやく男を絞め殺しかけている事に気づいたらしい。パツと手が離され……既に伸びている男の頭がゴチン、と地面に叩き付けられる。

……死んだか？ 生きてるな。ヨシ。

「……またですか」

「受付のお姉さん……だつて、コイツが」

「だつても何もありません。……壊した机や扉の代金、払つて貰いますよ」

「うぐつ。そ、そんな事言われても持ち合わせが——」

ふむ？ 私 が 男 の 死 亡 確 認 を し て い る う ち に 金 髪 の 少 女 …… —— は 愉 快 な 事 に な っ て い た。 どう に も “ ま た ” 喧 嘩 し た ら し い 彼 女 は、 受 付 の お 姉 さ ん か ら 壊 し た 机 や 扉 の 代 金 を 請 求 さ れ て い る が …… 当 の 本 人 に そ れ を 払 う カ ネ は 無 い と 見 え る。

持 ち 合 わ せ が 無 い と 弁 明 し て い る し、 間 違 い あ る ま い。 …… こ れ は、 チ ャ ン ス だ な ？

「ちよつといいか？ その修理代、私が立て替えよう。幾らだね？」

「貴女は？ いえ、そうですね。扉もそうですが、中で酷く暴れまわったので……金貨一枚といったところですよ」

「了解だ」

この “ チャンス ” に 乗 っ か り た い あ ま り ホ イ ホ イ 領 い て し ま っ た が、 金 貨 一 枚 は そ こ そ こ の 大 金 だ。 …… こ の 金 髪 少 女、 貴 重 品 で も 壊 し た の か？ お 転 婆 娘 め。

と も か く、 今 更 退 く 気 も な い 私 は 懐 か ら 金 貨 を 取 り 出 し て 放 り 投 げ て お く。 ど う せ あ ぶ く 銭 な ら 使 わ ね ば と。

「確かに。しかし、良いのですか？ ——と知り合いという訳でもなさそうですが……」

「なに、優秀な斥候を探していな。丁度良かったんだ」

「なるほど」

斥候を探している。そう聞いたのだから少女は。

「ちなみに、ですが。その娘、借金がありまして」

「ほう？ 幾らだね」

「金貨五枚です。全てトラブルによるものですね」

「……なるほど、問題児か」

「ええ、どこかに引き取って欲しいぐらいの」

顔を真っ赤にしてプルプル震える。

「……儲け話はあるかね？」

「ありますよ。塩漬けになってるのが」

「……………聞こう」

ダンジョンらしい。

「本当は——に押し付け……いえ、頼もうと思っていたのです。しかし幾ら腕が良いとはいえ——は後衛。しかも彼女の戦い方とこのダンジョンは相性が悪く、一人では危険………です」

「同じくらい腕の良い前衛を探していた、と？」

「それと魔法使いか僧侶を、ですね」

「なるほど……」

渡りに船という訳だ。

「分かった受けよう」

「助かります。……—をお願いしますね」

「それも承った」

話をしよう。

図書館と死の魔女

【亡霊ども】 私の図書館に人が来ない件について 【集合】

1：魔女

何故か？

2：名無しの亡霊

立地が悪いからでは？

ト正論草。

そんな事はない。完璧な立地だぞ。

（失笑）

おう言ってみろ。

何かね。森の奥にある図書館だぞ？ 良いじゃないか！

その森が原因なんだよなあ。

ただの森ならまだしも、死の森とも呼ばれる黒の森だぞ？ 人が来るわけ無いだろう

が。

死の森の奥深くにある怪しい塔になんか誰も来ないんだよなあ。

怪しくない！ 由緒ある天文台なんだぞ！！

由緒（起源不明）

何千年前の話なんですかねえ……

黒く深い森には死神が住まう。

黒の森は死者の国である。

死の森の奥底には悪しき魔女が住まう。

何一つ間違つてなくて草。

死神（ただの亡霊）

死者の国（掲示板）

悪しき魔女（へっぽこ）

誰がへっぽこだって？

お前だよお前。

真相はホントしようもないんだよなあ。

TS 転生したへっぽこ魔女が前世を懐かしんだ挙げ句、その辺の亡霊をひっ捕まえて
掲示板やらせてるとは誰も思わないだろうな……

永遠の命だぞ。

肉体が無い定期

魔法の誘いに乗れば生き返れると言ったな？ あれは嘘だ。

当初は異世界の技術に感動したワイ。今ではなんの感慨もわかない。

染まっただけなんだよあ。

良いだろう？ 異世界の技術。

セヤナー

あの、この掲示板に居ると異世界の集合無意識からの干渉をガッツリ食らうんですが

……

仕様です。

無慈悲！

大丈夫だ、問題ない。

でもこの掲示板に居ないと森の瘴気に当てられて、一日と経たずにアンデッドになる

からな。

私の御業に感謝するといい。

マッチポンプ定期。

やっぱ魔法って身勝手だわ。

そんなんだから迫害されるんだよなあ。

別に、好きで引きこもってるだけだし……

それで人が来ないとか言っちゃうのホンマ。

というかき、普通に危険だからな？ あの森。

あの程度のダンジョンを踏破できない軟弱者に見せる書物は無いね。

ダンジョンって認めやがったぞ、コイツ……

まあ、実際ダンジョンだもんな。

レイス、ゾンビ、スケルトン、デユラハン、リビングソードに冥府の怪物共、果てにはノーライフキングまで……ありとあらゆるアンデッドと即死攻撃のオンパレードだもんな。

普通に死ぬ。

しかも生きてる生き物が居ないせいで獣道すらなく、常に致死量の瘴気が渦巻いていくという。

瘴気は勿論、霧も厄介なんだよなあ。視界なんて殆ど無いぞ。目印になる様な物なんて何も無いし、方向音痴でなくても普通に迷う。

天然磁石があるせいでコンパスも狂うし、魔力の流れが歪だから魔力探知はかえって危険。進みようがないんだよなあ。

目印なら天文台があるじゃないか。

霧と瘴気で何も見えないって言ってんだよ!! (迷って死んだ)

キボウノハナー

普通に高難易度ダンジョンなんだよなあ。

しかもエレメントが安定してないから、下手に魔法なんて使おうものならどうなるか分からないという。

属性魔法はほぼ確定で威力低下。精霊魔法は基本的に使用不可だもんな。

なお魔法でしか倒せない敵が殆どの模様。

こーれは誰も近づきませんわ。

むしろ近づいたら亡霊の仲間入りぞ。ソースはワイ。

成仏してクレメンズ……

魔女の庇護下にいる限り、成仏できないんだよあ。

なお庇護下から出るとアンデッドになる模様。ほんと、この……

感謝したまえ。

マツチポンプウ、ですかねえ。

反乱起こしてえ……

掲示板から弾かれて知性ゼロのアンデッドになるだけぞ。

死にたくても死ねないんじゃー

スレ民は考えるのをやめた……

これでお宝とかあるっていうなら別なただけだよ……
そういう話はないからな。邪推したのがたまに来て、俺らの仲間入りを果たすだけよ。

お宝ならあるじゃないか。異世界の本という宝が！
本気で仰っておられる？

魔女が前世で読んでたマンガとラノベがなんだって？
むしろ教科書とか学術書の方がお宝なんだよなあ。

なんでさ!!

文明レベル考えろ、文明レベル。

識字率何パーセントだと思ってるんだ。

絶対一割下回るぞ。

五。パーもあれば上等じゃろ。

嘘だ！

ところがどっこい……夢じゃありません……！
現実です……！
これが現実……！
現実です……！

バカな、江戸時代の識字率は武士はほぼ百パーセント、庶民でも五十パーセントはあつたはずだぞ……

あ、二十四時間仕事してる様な国と比べないでくれますかねえ？
魔女の祖国はイカれてる定期。

過労死とかいう生物の基本論理に逆らう謎の現象。

天変地異が起こっても平然としている修羅の民。

灰の中から何回甦れば気がすむんです??

こっちは自国の文字すら読めないのが殆どだつてのに。

それで異世界の文字を読めつて言われても、ねえ？

地方の農村とか、四則演算できたら天才つてレベルだぞ。

でも君らはやれるじゃないか。

そらな。

魔女が先生してくれるなら、嫌でも覚える。

先生（独り言をたれ流してただけ）

精神にダイレクトでぶつけられれば、な。

耳が無いので塞ぎようもないという。

お喋りクソ女と化した闇の魔女。

（ファミチキ下さい）

（コイツ直接脳内に……）

まあ俺らこつち側でしか生きて事ないし、ファミチキとか食ったことないんだけどね。

なお集合無意識からゴリゴリにオススメされる模様。

逃げ場無し。

ぷ、プライバシー……

魔女だぞ？ それも死を冒読するガチガチの闇の魔女。

諦めろ。

まあ、小学生の算数と理科をマスターすれば、普通に大魔法使い狙えるからな。

というか、成れるからな（レイスからリッチになりました）

リッチか。確かに生前基準なら大魔法使いクラスだな。

定期的にアンデッドになつてる奴が居る、人間ではない……

魔女の庇護下に居るから魔力だけはモリモリ成長するんだよなあ。ホント。

だからまあ、慣れると二、三日ぐらいならアンデッドになつても理性が持つ。なお無理

理をするとただのアンデッドになる模様。

そうなつたら魔女様に泣きつくしかないね。

助けないからな。

（とか言いつつ助けてくれるんだよなあ……）

(ツンデレ乙)

絶対助けない!!

はいはい。

せんせー、人が倒れてまーす。

は？

お？

またか？

またです。この娘三回目ですよ……

この森を何だと思ってるんだ……

死の森。

黒の森。

死者の国。

闇の魔女のナワバリ。

冥府に最も近い場所。

………村に返してきなさい。

でもまた捨てられるだけでは？

絶対生け贄かなんかだぞ。賭けてもいい。

なに賭ける？

ジンバブエドル。

存在しないんだよなあ。

視界貸してくれ。

あいあい、どぞ。

説明しよう！ 魔女は庇護下にある存在の視界をジャックしたり、奪ったり出来るのだ！ 身勝手！ 低身長！ 童顔！ ペタンコ！ まな板！

>>

真つ暗の刑。三分。

目が！ 目がアアア！

三分で勘弁してくれるの、優しい。

普通の闇の魔女様なら魂が擦り切れるまで拷問されるぞ。

うちの魔女様、何だかんだ優しいんだよなあ。

なお世間の評判。

闇の魔女とかどうあがいても討伐対象やぞ。

残当。

お。

ん？

どした？

どんなクソガキかと思えば、綺麗な子じやあないか。

ん？ この子が捨てられたのか？

みたいですね。

やっぱり生け贄……

えー……庇護欲とかないのか？

髪色は？ 黒か？

白。

あ、生け贄ですね。

もしくは厄介払い。

なんでさ!!!

普通じゃない子供の扱いとか、そんなもんやぞ。

他と違うって事は迫害の対象って事。これマメな。

白で良かったな。黒だったら闇を疑われて赤子の頃に殺されてるぞ。

衰弱してるだろうし……魔女様が拾わないと、どっちみち死にますねえ。

というか、三回も森に近づいたら多かれ少なかれ瘴気の悪影響受けてるだろ。

治療が必要では？

はあ………まあ、大人しそうな子だしいつか。本棚をめちやくちやにしたりはしないだろうし。

本棚（呪いつき）

触ったら死ぬ本棚をどうやったらめちやくちやに出来るんですかねえ。

リツチになってもピリピリするんですが、あの本棚。というか片手が消し飛ぶのもあるんですが？

？ 防衛策は必要だろうか？

やり過ぎだつて言ってるんだが??

やっぱ闇の魔女だわ。

じゃ、この子連れて帰るんで、誰か手伝つて？

一人じゃいかんのか？

魔力使い過ぎちやつて……瘴気を弾いたまま天文台まで連れていける気がしない。

ナニしてたんですかねえ……

大魔法ブツパするの楽しいからね。仕方ないね。

リビングソード作つた。

難易度を上げるな

お前のせいか（死因、リビングソード）

ワイ行くわ。そろそろリッチになって散歩しようと思ってたし。

じゃワイも。

じゃワイも。

それならワイも。

あ、ワイも。

どうぞどうぞ。

ふざけてないで一度でも手を上げた奴は全員行くんだぞ。口だけ野郎は二日ぐらい
掲示板から弾くからな。

行きます！

すぐ行きます！

突撃イ！

バンザアア！

すみません、リッチになれないのに行くとか言いました……

次は無い。

あい……

優しい。

普通、闇の魔女の不興を買ったら次とか無いんやぞ。勘違いしないよーに。

まあ、生意気言うんですけどね。掲示板だし。

掲示板だからね。

はあ、治療だけしたら大きな町に送ろうかな……

ホントかなあ？

ほだされて普通に育てそう。

むしろ喜々として先生しそう。

先生（独り言をたれ流すだけ）

お喋りクソ女の被害が増えるのか……

コイツら……！！

掲示板落とすぞ？

僕知ってる。脅すだけだって。

実際にはやらないという信頼。

甘いからね……うちの魔女さん。

……落とそ。

あああ！ 嘘、嘘ですごめんなさい！

落とさないでえええ！

死ぬ！ 庇護下から弾かれたらアンデッドになって死ぬ！ 死なないけど死ぬ！
ゾンビは嫌だあああ！

あー、魔女様。あのー……

何かね。

子供、追加です……

………は？

【亡霊ども】 私の図書館に人が来た件について「なんとかしろ」

うちは託児所じゃないんだが??

いい加減諦めましょうよ……

というかこの数を見るに口減らしですかね、たぶん。

死体置き場でもないぞ。

だいたい、次代を作っていく子供達を捨ててどうするんだ。命懸けで守りなよ。親の都合で産んだクセに。

今どき命懸けで子供を守る親とかおらへんやろ……

親？ 生前の事はよく覚えてませんが、酒カスだった記憶しかありませんねえ！

うちはギャンブル狂いだったなあ。借金を押し付けられた記憶がある。

魔女様に引っ付いてる亡霊共、皆過去が重い説。

そりや闇の魔女のナワバリに好んで住み着く連中やぞ。言うまでもない。

取り敢えず、さつき他のニキ……魔剣作りのノーライフキングが見つけた白い子と、間に合わずに死んじやつた子を合わせて十人ですかね。

生きてるのは全部で九人か。

いや、八人。

二人も死んでるじゃねえか……

捨てられてからそこそこ時間立ってたみたいで……

あ、誰か来てくれると助かります。自分ノーライフキングニキみたいに強くないですし、リッチになって間がないんで。

適当なのを向かわせておく。

全員回収する様に。

全員、ですネ？

全員だ。

死を冒流する気満々で草生えますよ。

闇の魔女が闇の魔女たるゆえんである。

というか魔女様おこななの？

おこすねえ。

怒ってない。

キレてるじゃん……

闇の魔力をたぎらせておきながら怒ってないは無理なんだよなあ。

活性化し過ぎて炎みたいになってるの草。

あつつうい！

てかこれ常人なら近づくだけで即死しますよお。

即死攻撃がデフォだからな。闇の魔女。

こんなんだから、人里に降りれないよな。

子供を捨てる様などころになんて、そもそも行きたくない。

アツハイ。

アツハイ。

アツガイ。

水泳部が居るぞ！

いや、見た事もないアニメのネタを語れるの、ヤバない？

だって集合無意識がそうしろってささやくんだもの……

？ アニメは見れるだろ。図書館の奥で。

マ？

マ。

いや、あれノーライフキング以上じゃないと利用出来んぞ。映像を再生するときの魔力は俺ら持ちだし。

少なくとも成り立てリッチだとキツいな。

そんなあ……

見たかったのに……

集合無意識オススメの映像、気になる……

ノーライフキングかそれに相当するヤベーのになれば短時間だけ見れるぞ。

ノーライフキングは不死の王を意味するんですが、それは。

そこに闇の魔女こと冥府の女王様がいるので、不死者の王族ってだけじゃあ別に珍しくもなんともないし……

死の権能を持つてるし、殆ど冥界そのものなんだよなあ。うちの魔女様。

つまり？

お前はもう、死んでいる……

生身で会えないタイプの存在だからなあ。

ん？ 回復薬ってどこにしまってたっけ？

何を探してるかと思えば……あー、どこだっけ？

普段使わないからな……

というか見つかってても腐ってるのでは？

ここは大人しく薬草園から薬草を持ってきてだな……

薬草（霊薬）

じゃ、そっちはよろしく。

ええ……

どうしろと。

俺ら亡霊ぞ??

よろしくされた以上はやらないと駄目なんだよなあ。俺ら、亡霊は亡霊でも所詮使い魔みたいなもんだし。

つてもな……あ、薬草園に入り浸ってるノーマルフキングいたら、確か。

よし、ソイツに任せよう。

ノーマルフキングってそんなぼこじゃか居るもんじゃないんだけど……

しかも理性持ちだぞ。自力で成れるのはガチの英雄だけなのに。

なお俺ら。

死を司る闇の魔女のナワバリだし、多少はね？

よし、誰も行かないみたいだし、俺が薬草園行ってくるわ。
よろしくー

ワイ、魔剣作りのノーライフキング。天文台へ帰還。

こっちもそろそろ到着かな。魔女様によろしくー

乙ー

乙。スターゲイザーパイを作ってやろう。

私、あのパイ嫌いなよね……

それはそう。

薬草園ニキ掲示板見てたわ。薬貰って来た。

ナイス。……落とすなよ？ 霊薬なんだからな。

お前の生前年収より遥かに高いぞ。間違いなく。

ヒエツ……

絶滅した薬草とか、ここでしか取れない稀少種とか使ってるからな……お金じゃ買えんぞ？

金貨何枚とかじゃなくて、言い値で売り買いされるやつ。

これ外に出したら大儲けなんだけどな……

嫌だ。

だ、そうです。

親絡みでトラウマ持つてるから……

親のクセに親に成れない奴は嫌いだ。

魔女様は？

だからこうしてる。

こうしてる（百年単位で独りぼっち）

こうしてる（子育ての本を引っ張り出して読み始める）

>>

目潰し!!

目が！ 目がアアア！

「勇者のお師匠様！」

十年前、世界は破壊の嵐に包まれた。異界より現れし怪物共の手によつて、人が作り上げたありとあらゆる物が、文明が破壊し尽くしされたのだ。人類はその生存権を大きく削られる事となり……だが、それでも、まだ人類は死滅していなかった。

山に、森に、地下に潜み、彼らは待っている。いつか来る、反撃の日を。

◇

一月一日

何一つ変わる事のない日々のせい、つい日記を書くのを忘れてしまう。

まあ、書く事も無いからな……あの日、どつかのバカがやらかした事故のせいで世界は一変し、ナローロッパ系ファンタジー世界は世紀末世界へと変貌してしまったのだ。ゆあ、しょく。

いや、海も大地も森も健在だし、なんなら人類が減った事でむしろ生き生きしてるまであるが……人類とその文明は木っ端微塵。私以外の生き残りがどれだけいるかも不明だ。世紀末世界は世紀末世界でも、ポストアポカリプスや終末世界といった方が近いかも知れないな。人類だけが消え去った世界なのだし……地球にとって理想の世界

では?? とか思ってはイケナイ。

どっかのバカが呼び出したかなり物騒なバケモノが闊歩しているけど、地球からしたら人間の方がよっぽど悪性寄生虫だったのかも思ってはイケナイのだ。例え事実であつたとしても。

まあ、そんなだから死の灰こそ振っていかないものの、シエルター一件自宅に引きこもるしかないのだ。変化なんてある訳もない。自宅の周りにある森も一年中葉が付いてる常緑樹が多いから、余計にそう感じてしまふ……

せつかく息苦しい現代日本から異世界転生、それも不老不死に限りなく近い強力な長命種に転生したというのに、これではチートだの俺つええだの無双だの以前にただの罰ゲームだ。寝るしかやる事が無いんだぞ? 老後の余生じゃあるまいし、やってられん。

ああ、ちなみに彼女だのハーレムだのは早々に諦めた。そもそも人類が居ないし、今の私は女だからな。……いや、性転換に関して悩みがない訳じゃないんだが、白髪ケモミミロリババアになったところで誰とも合わないから、これに関しては何とも言えないのだ。アダムとイヴは二人で居るから意味があるのであつて、どちらか片方しか居ないのなら男も女も関係無いからな。残当。

なにはともあれ、暇だ。もうかれこれ数年……いや、十数年?

………日記を振り返ってみたが、文明崩壊から十年は経っているな。道理で暇な訳だ。長命種になったせいとか時間間隔もめっちゃめちゃになってるし。

うーん、なんぞ来客でもないものか……無理か。無理だな。そもそも居ないもんな、人類。

—月—日

確かに来客でもないものかとは言った。確かに言った。それは認める。

だからといってバケモノは来客とは言わない！ カエレ！

—月—日

………帰る気配、まるで無いな。むしろ何かを探している様な……居座る気配を感じるぞ。

いや、うん、分かっている。あれは私を探してるんだろう。まだ生きている人類である、私を。

あのバケモノは人類絶対ブチ殺すモンスターの一匹、ファンタジー世界をポストアポカリプスな世紀末世界に一変させた大事件……高度に発展した魔法国家による、大規模な何かの魔法実験、その失敗によって異界より呼び出された存在だ。

奴らのせいでこの世界の文明は破壊し尽くされ、人類は滅亡寸前だといえはその恐ろしさが分かるだろう……余計な実験をしゃがった連中の愚かさもまた然り。

あの国は領土的にも技術的にもこの世界でナンバーワンの大国だったのに……理性とか落ち着きとかが欠片も無かったのが、致命的だったか。

さて、話をバケモノに戻そう。

私の調べた情報が確かなら、連中はモンスターというより邪神や悪魔に近い生態を持つ魔法生物で、人類を見つけると死ぬまで執拗に追いかけて回してくる死のハンターだ。その見てくれは巨人や獣型等、多岐にわたり……共通するのはその巨大さと強さ。体長は最低でも三メートル、最大級の奴は百メートルを超え、中世レベルとはいえ一万の大軍勢を数百匹程度の群れで殲滅してしまう程の戦闘能力を持っている。恐るべき存在だ。下手なモンスターや恐竜に例えるよりも、神話の怪物か宇宙怪獣に例えた方が近いまである。

まあ、何が言いたいかというと、勝ち目が無い。かの米帝様でも核ミサイルをポチらなければどうにもならない様なバケモノだ。なんなら種類によつては核ミサイルに耐える可能性すらある。

そんな奴をどうにかできる訳がないし、どうにかできたら人類は滅亡寸前に追い込まれたりしてない。奴らと出会ったその時は、ケツをまくって一目散に逃げるしかないのだ。……本来なら。

私？ 勿論抵抗するで。拳でな。

丁度暇してたんだ。どうせ私は死なないからな……三日三晩戦い続ける覚悟は出来るか？ 私は出来る。

行くぞオラア！ やあつてやるぜエエエ！

一月——日

勝ったツ！ 第三部完！

一月——日

アイツは倒せないと言ったな？ あれは嘘だ。

ゴメン、ちよつとカツコつけた。ホントは泥仕合でした。丸一日寝込むぐらいには、それはもう、物凄い泥仕合……

お互いに再生能力持ちだから、なかなか決着がつかないのだ。しかも連中の中でも特に強力な部類である巨人型だったから、余計に泥仕合になってしまった。

腕をもがれたけど死んでないから負けてませんー！ はい腕生えたのでノーダメージ！ ノーカン！ おら今度はお前の目玉を潰してやるよお！ オラア！ シャア！ おいコラ再生するんじゃないやねえ！ ノーダメージかコノヤロウ！ バカヤロウ！ 死ねえ！

………うん、泥仕合だね。致命傷以外はノーダメージ理論とはいえ、不死じゃなかつたら何回死んでたか。

勝負の決め手？ それは君、首チヨンパだよ。

斬首は即死攻撃。怪物にも実際有効。古事記にもそう書いてある。

いや、倉庫からデカイ大剣を引つ張り出しておいて正解だったね。あれが無かつたら未だに泥仕合を続けてたかも知れんと思うと、ゲンナリするわ。

それと、アレだな。怪物狩りを暇つぶしにするのは無理だ。疲れる。

一月——日

来客が来た。

来たが……いや、そんな事をお願いされても困るんだが。

取り敢えず客間を掃除して貸し出しておいた。まさか人類の生き残りと遭遇出来るとはな……それも親子連れ。母親が一人と、子供が一人。

うん、うん。まあ、詳しい事は明日で良からうさ。

一月——日

死にやがった。

満足そうな顔で。

……やめろ、死者の願いを私に置いていくな。バカヤロウ。

一月——日。

あれから数日。余裕も出来たし先日のをまとめて置こうと思う。

先ずバケモノを倒した事についてだが……どうにもあのバケモノは私を探していたのではなく、件の親子連れを追ってきた個体だったらしい。

そしてそのバケモノは親子連れを殺す前に、私に——泥仕合だったが——討伐され……これが良くなかった。

見ていたのだ。名も知らぬあの母親は、私がバケモノを殺す一部始終を。

そして、それが彼女に決断を促してしまった。……子供を、私に託そうと。

何をどう決断したらそうなるのか？　こんな性別もあやふやな怪しい女、それもバケモノとパーツの取り合い殺し合いをするようなイカれた不死者に、なんで子供を預ける気になるのか？　全く理解出来ない！

……いや、分かつてる。バケモノから逃げ続けるよりは、どんな方法であれバケモノを殺せる私の側に居た方が安全だと思ったのだろう。それは分かる。分かるが……だからといって本当に預ける奴が居るか！　こんな怪しい女に！　子供を!!

文句の山程もある。

だが、その文句を言う事はもう出来ん。あの母親は名を名乗る暇もなく死んだのだ。満足そうに、もう大丈夫だと言わんばかりに。

恐らく、病気だったのだろう。今や肉体は火葬され、小さな墓が家の横にあるだけ

……

いいさ、分かつたとも。

死者の願いを無下には出来ん。お前の子供は、私が育てよう。守ろう。先を見よう。それで良いだろう？

一月——日

愉快な新メンバーを紹介するぜ！

名も知れぬ母親の一人息子！ 脅威の十歳児！ 私からすると懐かしいモノがついてる男の子！ 名前はユウ君！ もの静かで大人しいぞ！ 怖いぐらいにな！ ……キミ、落ち着き過ぎだろう。その歳で瞳が理性と知性で満ちてるとか、転生者か？

一月——日

件の男の子、転生者とかでは無さそうだ。少なくとも私と同じ場所から来た訳では無いのだろう。黒髪黒目だけど、日本語を知ってる訳ではなさそうだし。

恐らく、普通に頭が良いだけだ。……普通とは？ 知らん。この世界の基準なんぞ知る訳がない。

だから興味本位で色々な学問を覚えさせているのも、虐待とかではないんだ。文明崩壊前に集めてた本を読み聞かせたりしているのも、他にあやし方を知らないからとかではないんだ。うん。違うんだよ？ いや、うん、まあ、その、はい……

私のダメダメな子育てに関しては置いておこう。

それより問題なのは食料だ。

私はかすみを食って生きる仙人みたいな生活をしてたから、物資の備蓄なんて鼻からありはしない。当たり前だろう？ 平気で一ヶ月絶食する様な奴が、食料を溜め込むはずがないのだ。しかし、この子を預かった以上そうも言つてられん……

まあ、何とかするさ。幸いにもこの辺りは自然豊かだし、そもそもそれが約束だからな。私は約束を守る女なのだ。

※訂正。

女じゃなくて男!!

—月—日

素で性別間違えた……

いや、良いんだけどね。転生した……つまりは性転換した日からもう何十年か経つてるし、今更ガタガタ言う程、自分と向き合えてない訳じゃない。この程度、ギヤアギヤア言う話じゃないのだ。

ないが……それはそれ、これはこれ。最終的に根つことするのは男としての意識なのだし、ちゃんと自意識を持っておかねば。

ところで、預かったユウ君なのだが……キミ、もう少し名前長いんじゃないのか？

名も知れぬ母親の遺品、これかすれてるけどミドルネームだろう。それにファミリ-

ネームも聞いてないぞ。

ユウ、キミのフルネームは？ ……分からない？ そっかー、分からないかー

嘘こけ、知っててはぐらかしてるだろ、お前。この天才児め。

うーん、このかすれてるミドルネームとファミリーネーム、どこぞの王家の物だった
気がするのは気のせいか……？

気のせいかな。気のせいだな。

まあ、国家なんて文明崩壊以後は過去の産物。仮に王族の末裔だとしても、何の役にも立つまい。既にどの国家も亡国な訳だし。

一月——日

私は父親なのか？ 母親なのか？

ふと頭に浮かんだこの疑問、誰かに聞く訳にもいかず丸一日悩むハメになったが……
答えは最初から一つだった。つまり、どっちも、だ。

一人二役かあ……上等だ、やってやろうじやねえかコノヤロウ！

一月——日

子供が増えましたー

いや、産んだとかじゃなくて。拐ったとかでもなくて。おいやめろユウ、師匠を疑う
様な目で見るのは。

……まあ、いい。良くないけど良い。

取り敢えず客間に寝かせてる子——赤髪の女の子、推定ユウと同年——が起きるまでは暇なのだ。今のうちに状況をまとめて——

追伸

デカイ音がしたから何かと思えば、客間が使えなくなってた……

そうだな、子供は問題を起こすものだもんな。ユウが大人しかつたから失念してたわ。

だからって部屋一つブツ壊すなよ。いや、意図してやったんじゃないだろうけど、ないだろうけど……くそ、ここに来て問題児か。

上等。やってやるぜ……!

英雄のいない時代が不幸なのではない。

英雄を必要とする時代が不幸なのだ。

◇

文明が崩壊し、人類世界が滅亡した何にも期待出来ない時代。

ユウと呼ばれる少年はそんな時代に生まれ、生き、その果てに不死者の寝床まで流れ着いてしまった。だが、彼はそれを悲観したりはしていない。どうしようもない事だと分かっているからだ。例えば自分の血筋に歴史や責任があるうとも、一夜で無意味になっ

てしまったのと同じ様に。

だから彼は何にも期待しないし、していない。まるで諦めているかの様に、全てを受け入れるだけだ。母……正しくは育ての母との別れすら、いつそ冷淡なまでに受け入れた様に。何もかもを。

だが、そんな彼をして困ってしまう事があつた。不快という訳ではないが、簡単に受け入れる事も出来ない問題……つまり、同居人である一人の少女の事。

「ユウ、調子はどんなだ？ ああ、皆まで言うな。悪そうだな。知つてるとも、知つてるから声を掛けたんだ。で、何を悩んでいる？ 本の内容か？ 文字が読めないか？ それとも……人間関係か？ 前者ならどうとでもしてみせるが、後者だと私も困つてしまふところだが……なに、心配するな。あの名も知れぬ母親からお前を預かつた以上、全力で取り組ませて貰うとも。で、気がかりはやはり人間関係か」

「……は、い」

「それは困つたな？ ふむ……」

会話をする気があるのか怪しい言葉の濁流。それをいつもの事と受け流しつつ、ユウは読んでいた本から顔を上げて声を掛けてきた少女を見上げる。

綺麗な少女だつた。腰を越えてサラリと流れる長い白髪と、フワリと揺れる白の尻尾が特徴的。

名前は知らない。本人が忘れたと言って教えないからだ。

魔女と呼ばれた少女 1

ダークファンタジー。

そう言われて、人は何を思い浮かべるだろう？

重苦しい雰囲気やシリアスかつ悲劇的な展開。残酷な描写やグロテスクな表現、あるいは救いのない人間心理や過激な性描写等、ハッピーエンドから遠退くような数々の要素……どこまでも不条理で、救いがなく、吐き気すらもよぶような世界観。

ダークファンタジーがダークファンタジーたる所以とは、やはりそういった複数の要素による物だろう。どれか一つだけではなく、複数の要素が複雑に作用した結果こそが、ダークファンタジーなのだ。

まあ、端的に言ってしまうと、某アレとかアレとかアレを思い浮かべるところだが……それは脇に置いておいて。

ここで一つ、チェックリストを作ってみようと思う。貴方の世界はダークファンタジーですか？（暫定版）を。勿論、作るのは私だ。やるのも私だ。私の、私の為の、私によるダークチェックである。

最初に、重苦しきや悲劇が蔓延してるか？ イエス。

次に、グロテスクで残酷な事がよく起きるか？ 毎日だ。

それと、救いのない人間や性的暴行は？ よく見かけるね。

最後に、ハッピーエンドが見えない？ 見えたら教えて欲しいぐらいだ。

備考欄に付け加えるなら、私自身がここをダークファンタジーだと思っている。という事だろう。ここがダークじやなきや何をダークと言うのかと。

事の始まりは……そう複雑な話じゃない。

どっかの世界でいい歳こいたバカが一人野垂れ死にし、異世界に転生してなお記憶を保っていた。そんな話だ。転生した後も記憶を持っている人間というのは少数ながら実在する——実はだいぶ前に科学的裏付けを得ている——のだし、無限に広がる大宇宙があるのだから異世界があってもおかしくはない。ならその二つが組み合わさってしまふ確率は僅かながらとはいえ確かに存在している訳で、何も、何も問題は無い話だった。……そこまでは。

問題だったのは、転生者たる私は彼から彼女に……つまり性別が男から女へと変わってしまった事。そして“邪教徒の実験体”だった事だ。

人造人間、あるいはホムンクルス。

私が転生し、彼女となった肉体は人間ではなかった。邪教徒共の夢の果て、永劫の命

を手に入れる為の実験体。不死王と呼ばれる強大な不死者の肉片を元としつつ、そこに無数の生物を組み合わせたキメラであり、プロトタイプの人工不死者として作られたホムンクルス。それが私だ。

見た目こそ黒髪黒目の大和撫子系美少女だが、その正体はバケモノとしか言いようがない存在。製造ナンバー217番。既に失敗した名も無き姉妹達の屍の上に、私は転生した。間もなく実験の為に消費されるモノとして。

日々妙な薬をブチ込まれ、データを取られ、苦痛を伴う実験材料にされて。今度は脳ミソに電極でも刺すか、虫の苗床にするか……そんな話が耳に入った次の日、不幸中の幸いという奴が起きる。

何の事はない。連中の施設が「不慮の事故」で壊滅したのだ。

千載一遇の好機。

私は、それを逃さなかった。警備、及び防衛設備がザルな事を事前に把握していたのも手伝って、私は人工不死者のプロトタイプモデルとして持たされた能力の全てを用いて脱出を敢行した。

突如として発生した混乱に乗じてどこぞのビツクなボスな蛇の様にスニーキングしつつ情報を集め、整理し、施設から脱出。そのまま邪教徒のロτζジを強襲しようとしていた救出部隊——お偉いさんの子供が誘拐されたらしい——に保護され………私は

安寧を手にした。手にしてしまった。

◇ 終わりの始まり

◇

事実というものは存在しない。存在するのは解釈だけである。

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチエ。

◇

魔女の魔導書。

解説不可能な魔女文字で書かれた書物。そこに記されている文字はかつて存在したどの言語とも異なり、更には他のいかなる魔女文字とも一切の一致が無い為に解説は不可能だとされている。

また古い年月が経っている為か、はたまた呪われているのか……極めて強い魔力を秘めており、ふとした一文字に込められた魔法が読む者を跳ね除けてしまうのも、解説を不可能にさせている一因。

著者不明ながらも使用されている魔女文字や残された逸話から、大魔女ニーナ・サイサリスの残した書物だとされており、彼女の秘術が記された魔導書だという説が通説で

ある。

◇

四月 五日

おお神よ、くたばりやがれ。

いつたい私が何をしたと言うのか？ 内なる野望を表に出す事もなく、品行方正に生きてきた私に何の恨みがあつてこんな目に合わせるのか？ もし恨みもなくこんな目に合わせたというのなら、やはり神というのはロクでもない存在か、あるいは存在しない空想上の代物なのだろう。駅のホームに突き落とされた訳でもないのに、某少女と同じ結論に至りそうな今日この頃である。

とはいえ、災いあれと叫ぶ訳にもいかない。勿論、両手の中指を突き立てながら叫びたいのは山々なのだが……実際にやってみよう訳にもいかないのだ。今や懐かしき前世ならともかく、今世では普通に神やら精霊やらが居る様だから……迂闊に罵倒なんてしようものなら、後ろから刺されかねん。いや、刺されるだけでなく、何なら魔女認定されて火炙りにされるまでであるぞ。

いやいや、火炙りだけで済めばまだいい。前世は男だったから余計な心配をしなくて良かったが、今世は何を間違ったか女。人権の無くなった、殺す予定の女がされる事なんぞ………うん、あまり考えたくない話だ。

やはり、人に聞かれたくない叫びは書くに限るな。

災いあれ！ 災いあれ！！ タンスの角に小指でもぶつけてろ！

四月 六日

いや、私とした事が、やるべき事をやり忘れてしまっていた。

悪口を書いて満足してしまつた辺り、脳ミソの具合が良くないんじゃないかと不安なつてくるが……まあ、いい。良くないけど良い。本題に入ろう。

私がこの日記を書いているのは、ひとえに後で読み返す為だ。

記憶を失つても補完が出来る様に。欠片程度でも取り返せれる様に。

というのも、私は前世を覚えている前世持ちであると同時に、異世界転生を果たした転生者でもあるのだが……どうにも前世の記憶というのが酷く歯抜けなのだ。最初の頃はまだまだもう少しマシだったはずなので、恐らく時間経過による劣化が発生しているのだろうと思われる。

このままでは前世の事を思い出せなくなり、アイデンティティの喪失に繋がりがねないので、ボケ防止を兼ねて保険を用意する事にした訳だ。今の私を、日記という形で書き残す事で。

一先ず現状を三行で書き留めておこう。

死んで異世界転生した。

何故か性転換して少女。

状況は極めて悪い。

ちなみに、状況の悪さを簡潔に言うのと、転生先の世界が難易度イージーモードのな—ろつぱじゃなくて、死に覚え上等のダークファンタジーな気配しかない……という事か。

有り体について、地獄だ。この身も実験体としていじられた後だし。

四月 七日

飯が不味い。

イギリス料理の方がまだ美味し……いや、こっちのほうがまだマシか？ 少なくとも食糧事情が良くないからだと言いつい訳出来るからな。こっちは。

四月 十日

日記というのはいささか以上に面倒だという事に気づく今日この頃。

このままでは三日坊主になってしまうので、やむなく対策を取る事にした。実験体だった私をマッドサイエンティストな犯罪者から救い出した保護者——聞いた話では

凄腕の魔法戦士らしい——に願ひ出て、全自動羽ペンなる物を貸してもらったのだ。なんでも脳波コントロール出来る！ 代物だそうで、実に便利……いやまあ、正確には魔力コントロールだが。やっている事は某アレと同じだ。主に手を使わなくて良いという辺りが、特に。

さて、良いアイテムも手に入れた事だし、引き続き境遇を記していこう。何せ、いつ記憶が消し飛ぶか分からないからな……まあ、転生して脳ミソが変わったのに以前の事を覚えている方が不自然だったのだ、これぐらいは仕方ない話だろう。

いや、不自然というのは語弊があるな？ むしろこれは自然な話だ。古代中国の道教に記述された魂魄理論——魂は精神の魂、魄は肉体の魂。気や魂は二種類あるという考え——から考えれば……身体と魂、それぞれに知識や記憶が刻まれていたと推察出来るのだ。であれば今の状況も説明がつく。魂が魂魄に分かれて存在していたからこそ、脳ミソが変わった後も前世の記憶や知識を魂に刻まれたソレから思いだせるし、脳ミソに加えて魄を欠落した故に多くを取りこぼしてしまい、魂にしかない情報は魄のサポートを得れないが為ポロポロと溢れ落ちて戻って来ないのだ。ましてに肉体の変化に伴い魂魄に齟齬も発生している。記憶の欠落ぐらいで済んでいるのは奇跡というべきだろう。下手すると次の瞬間アンデッド……キョンシー辺りになってもおかしくないのだ。

しかし、驚異的なのは魂の存在か。

いや魂の存在はある量子脳理論からのアプローチや、とある超心理学研究者の精神科教授の行った統計学的な研究結果から科学的説得力を得ていたが……まさか時空間を飛び越えて異世界まで飛翔するとは。この私を目を持ってしても見抜けなんだ。

ある博士は脳で生まれる意識は宇宙世界で生まれる素粒子より小さい物質である為、重力、空間、時間に囚われない性質を持つと語ったが……私の魂が移動した瞬間の科学的データが取れていれば、超自然学や量子に関する研究が進んだかも知れん。

ああ、書き忘れてた。

前世の私は学者等ではなく、一般的なサラリーマンだった様だ。だからこそというか、相当に鬱屈していた様だが。

……推測系なのは、既にその辺りの記憶が消えている為だ。どうでも良かったのだろう。前世の私は人間関係や日々の記憶よりも、溜め込んだ知識の方が大事だったらしい。

………明らかにサラリーマンは向いてないぞ。私。まあ、そんなんだから後悔しながら死んだんだろうが。

四月 十二日

だから！ 今までの経緯を書きたまえよ!! 私！

知識を書き込んで満足するな……ッ！ いやまあ、知識こそ力だとは思うが。思うが

！ この日記を書く意義!!

やはり、全自動羽ペンを使ったのがマズかったのか？ 表に出した思考をそのまま書いちやうみたいだしな……慣れないと脱線しまくりだぞ。これは。

閑話休題。

今度こそ本題に入ろう。今度こそ。

事の始まりは前世でくたばった事だが……生憎、死因は既に忘却の彼方だ。親兄弟を含む人間関係や、自分の年齢や名前も向こうに置いてきてしまった。

強いて思い出せる事といえば男だったという事ぐらいで、後は成人していた気がするし、サラリーマンだったはずだしと……つまり、何も覚えてないに等しい。まあ、その辺りはどうでも良かったのだろう。寒々しい人間関係だったに違いない。

そのくせ知識の類いは殆ど取りこぼしてない辺り、前世の人柄や趣味が分かうという物だ。

さて、そんな私が何の因果か時空間をカツ飛び、異世界に流れ着いた訳だが……ここからが良くなかった。

何せ、流れ着いた先はダークファンタジー。簡単に人が死に、道端に死体が転がり、亡者がうろいている世界だったのだ。しかも私はそんな世界で異端と呼ばれる者共、邪教のマッドサイエンティスト共の実験体として生を受けた。

生憎、あの頃は意識がハッキリしてる時間の方が珍しかったので何とも言えないが……恐らく亡者の亜種、一種のホムンクルスとして製造されたのだと思われる。

少なくとも女の腹から産まれてはいまい。母も父もなく、フラスコを母胎として産まれたのだ。私は。

それは、まあいい。どうでもいい。

問題は私が亡者の性質を持つという事だ。

恐らく、亡者に酷似したホムンクルスを作り、それを研究する事で亡者の不死性を手に入れたかったのだろう。

結果は、失敗だった。

私は亡者としての性質が極めて弱く、プロトタイプだと考えても実験体として不足極まっていたのだ。もし救出隊——奴らは生身の人間の誘拐も行っており、その救助が目的——の到着が遅れていたら、殺処分されていた可能性は決して低くない。

それは良い。助かった事に文句なんぞ無い。問題は、私が本質的には亡者であり、バケモノであるという事だ。

差し当たり、血が見たくて仕方がない。

生きている人間の血が、精気が、欲しくてたまらないのだ。……これは良くない。良くないぞ。私。

四月 十七日

サボってた訳じゃないぞ。普通にダウンしてたのだ。

私が具体的にどんな亡者の亜種なのかは分からないが、エネルギー補給を怠ると動けなくなってしまう様だ。最終的にゾンビの様に動きも鈍くなり、知性も無くなってしまうと思われる。

不幸中の幸いは、エネルギー補給を行うのに人を食う必要は無いという事か。

勿論、人を食った方が遥かに効率的なのだろうが、ごく普通の食事……穀物や獣の肉等でも代用可能なのだ。人の血肉に比べれば、カスの様なものだが。

結局、保護者が提供してくれる食事量では足りず、夜中に家を抜け出して森で狩りをする羽目になった。

本能のまま獣に飛び掛かり、その肉をむさぼり食ったのだ。

……寄生虫とか、大丈夫だろうか。

四月 二十日

バレてない！ セーフ！ 盗塁成功！

亡者だと気づかれれば殺されかねかないからな……というか、我が保護者は昨夜から

外出していた様だ。何をしに行ったのやら。

仕事は引退して隠居中だと聞いたんだが……？ いや、男が夜中に抜け出してやることなんかたかが知れてるか。ここは武士の情け、見て見ぬ振りをしてやろう……

四月 二十一日

我が保護者から星の魔法の魔導書を貰った。曰く、暇だろうからと。気遣いの出来る奴だ……全く。

しかし、ふむ。先日はこれを買に行つてたらしいな。近くに人が住める場所なんて無かつたはずだが……流れの商人でも捕まえたのか？ いや、何にせよ有り難い話だ。先日の邪推は撤回しなければなるまい。

それにしても、この星の魔法……興味深いな。私は我が保護者の属性魔法しか見たことが無かつたが、この星の魔法は噂通り原初の魔法に近い様だ。エレメントを意識した属性魔法よりも、もっと古い古代の魔法……

興味深い。実に興味深い。

四月 三十日

我が保護者から遠回しに仕事をする気はないかと聞かれた。働かざる者食うべからず、という事らしい。さもありません。

当然、二つ返事で答えておいた。多少渋つてはみたものの、働かないで食う飯は不味いからな。……いや、ここの飯は元々不味いのだが。

追記。

私の就職先は貴族の屋敷らしい。

そこでお嬢様の相手をして欲しいのだとか。

私に？ お嬢様の相手を？

終わった……

魔女と呼ばれた少女 2

その男が少女を見つけたのは、暗い洞窟の奥深くでの事だった。

魔法戦士として戦いに明け暮れ、この戦いを最後に引退しようと思ったクエスト。邪教の異教徒達のアジトを探索し、可能なら殲滅して欲しいとの依頼。

その最後の最後、洞窟の奥深くで見つけたのは……金銀財宝が収まった宝箱ではなく、一人の少女だったのだ。傷だらけで、息も絶え絶えに呻く少女。その場の流れで保護してしまった少女を、男はそのままの流れで引き取る運びとなった。

お世辞にも社会的とは言えず、あまり押し強くない彼からすればそれは自然な流れだったし、いざとなればどこかの孤児院に預けてしまえばいいという考えもあった。何より、自分だけが先に引退してまうという事に……仲間へ引け目を感じていたのも手伝ったのだろう。むしろ丁度いい負債だと。

ただ……引き取った少女が負債どころか、とんでもない爆弾だったのは、彼も彼の仲間も知る由の無い事だった。

一見すると人畜無害そうに見えるのが良くなかったのだろう。いや、実際人畜無害

だったからこそ殺さず引き取る運びになったのだが……それは少女の方が殺気を感じて大人しくしていたからに過ぎない。何せ、少女の中身が中身。場の空気の悪さを感じ取って人畜無害を装う程度、出来て当たり前だった。

しかし中身の具合を脇に置くにしても、少女には問題があった。

まず、言葉が喋れない。どこの国の言葉とも分からない言葉を呟きはするのだが、自分達の言葉を喋れなかったのだ。幸い、ジェスチャー等で意思疎通は出来たし、男の方も何となく雰囲気を感じてやり取りしたり、言葉を教える事が出来た。

……当の少女が「言語体系は英語に近いのか？」とか「さらば日本語」とかほざいていたのは当然知る由もない。知らぬが仏である。

次に、少女は何らかの呪いに掛かっていた。

恐らくは死、少なくともそれに近い何かが少女の身体にベツトリとこびりついているのを、男は見抜いてしまったのだ。手遅れな事に、仲間と別れて隠居先まで少女を連れ帰った後で。

実際には少女自身が亡者である為なのだが、一般的な亡者とは何もかもが違い過ぎてその可能性が考慮すらされなかったのは……少女にとつての幸運であり、男にとつての不幸であった。何せ亡者は存在するだけで生者を蝕むのだ。ましてや飢餓状態なら尚更。男が精気を抜き取られなかったのは男が魔法戦士として一流であったが為であり、

寝込みを襲われなかったのは少女の嗜好と意地によるものでしかない。危うい、実に危うい均衡。

だがその均衡は両者の抱え込んだ背景によつて崩れる事は無かつた。幸いにも。しかし解決される事も無かつた。そもそもが思い違い故に。

最後の問題が、少女の見た目である。

男は自身がそれなりに整つた顔立ちをしていると——仲間からしよつちゆう言われてたせいで——自覚していたし、そのせいか目麗しい美女に言い寄られる——気弱な事を見破られてカモ扱いされる——事も少なく無かつた。だが、そんな——本人は否定するが——経験豊富な彼をして、少女の見た目は美しいと言わざるを得なかつた。

生気を感じられない程に白い肌。肩口を少し過ぎた辺りでザツクリとまとめられた艶やかな黒髪と、それと同じ色をした黒い……引き込まれるかの様な神秘性を感じる、光を返さぬ淀んだ瞳。

目鼻立ちを含めた容姿は男が今まであつたどの女よりも整つており……今はまだ少女故に可愛らしさの方が強いが、じきに美しい女性になる事は間違いない。

更に……珍しい事に、少女の頭の上と尻には人には無い物が備わつていた。即ち、ケモノのミミと、ケモノの尻尾が。髪色と同じ濡羽の様な漆黒の、キツネの物に酷似したソレを。かつてこの地を去つた精霊達の末裔たる証を、少女は手にしていたのだ。

美しく、珍しい少女。一連の事実は一応の保護者として少女を預かっている男を酷く悩ませた。夜のベッドのお話ではない。少女の行く末について、純粹に案じたのだ。聖人もかくやという鉄の精神で。

——普通には、生きられないだろうな……

奇妙な言葉、呪い、目麗しく珍しい見た目。

どれを取つてもロクな事にはなるまい。神の導きはこの地から離れて久しく、精霊達はいつの間にか何処かへと消えてしまい、人心は乱れに乱れ、長い眠りから目覚めた不死王の影響で生死の境い目すら曖昧になっている……そんな世界で少女が幸せに、ごく普通に生きられるとは、男にはとても思えなかつた。魔女として火炙りにされるか、呪いに負けて惨めに死ぬか、良からぬ輩に目をつけられて身体を狙われるか……何にせよ、ロクでもない。ああロクでもない!

かといって、男にはこれといった名案は浮かばなかつた。仲間といた頃には学があると褒められる事もあったが、残念な事に数々の英雄的戦いの経験は子育ての悩みを前に役立たずと化していたのだから。

言語や呪いはまだ何とかなる。言語は教えれば良いし、呪いに関してもまだ時間があるように見えた。しかし容姿にまつわる厄介事は如何ともし難く……そうして子育てをしながら冬を越え、春が来て、更に暫くした頃には。少女は立派に育っていた。

主に、ロクでもない本性を表すという方向で。

「やあやあ我が保護者よ。いい朝だね、おはよう。ん？ もうお昼だからこんにはかな？ ふふ、まあいい。そんな事はどうでも良い、重要じゃない。それで、いったい何を見ているんだい？ リビングに居ないから探しに来てみれば、書斎で何を、おや？

それは……魔導書かな？ しかも新しい奴だ。どこかで拾ってきたと見える。タイトルは、星の魔法に関して？ これはこれは！ 我が保護者は星の魔法を使うのかい？

星の魔法は星を詠む事で未来を予知し、流星の一撃をもつて全てを粉碎する強力な魔法だと聞くが、しかし、我が保護者は星の魔法をサツパリ使わないから専門外だと思っていたよ。予想以上に博識じゃあないか。素晴らしい。やはり知識は力なり、だ。そうは思わないかね？」

「……おはよう。ニーナ。これは君へのプレゼントだ。ここに持ち込んだのは、全て読んでしまったみたいだからね」

「ほう！ ほうほう！ それは素晴らしい！ エクセレント！ 実にエレガントだな、我が保護者よ。イケメンフェイスは伊達では無いという事か？ いや、ともかく気遣い感謝するよ。言語を覚えるのには酷く手間取ったが、一度覚えてしまえば面白い物だね。あつという間に読み尽くしてしまっていたんだ。いやはや、助かるよ。星の魔法……深淵に煌めく、原初の魔法。前の脳ミソでは理解しきれなかっただろうが、今の脳

ミソは優秀だからね。多少難しいくらい、なんともあるまい」

実に楽しみだ。そう頬を緩めながら、淀んだ瞳をランランと輝かせながら男が差し出した本を手取る少女……名をニーナという白髪の少女を、男はため息と共にそつと視線から外した。

疲れる、と。

こちらの返事なんぞ鼻から期待してない、言葉の濁流。笑みを浮かべながら放たれるこれに晒さられて気分を害さない者は居ないだろうと確信出来るそれ。……これを浴びてなお少女を、ニーナを放り出してしまおうとはならない男の精神は、間違いなく称賛に値した。

そして、それはニーナの方も分かっているらしく。彼女は漆黒のキツネミミをピクリとひくつかせた後、淀んだ瞳をゆるりと男に向ける。どこか心配そうに、小首を傾げながら。

「しかし、良いのかい？ 魔導書、それも星の魔法の魔導書ともなればかなりお高いんじゃないか？」

「ん、いや、気にしないでくれ。お金は余ってるんだ」

「羨ましい話だね。だが、我が保護者の成した冒険の数々と、普段の節制癖を思えば当たり前か………ん？ そつちの手に持っている本は、人付き合いの仕方？」

「おいおい、人間関係で悩みでもあるのかい？　そう言葉尻に笑いを含め、パタパタと嬉しそうに尻尾を振りながら冗談混じりに聞いてくるニーナ。」

「それに男はお前だよ！」と叫びたいのをグツと我慢し、苦笑を混じえて言葉を返す。大した事ではないのだと。

「少し、思うところがあつてね。……だが、役には立たなそうだ」

「うん、そうだろうな。この手のハウツー本や自己啓発本は、基本的に役に立たない物だ。大抵、当たり前の事を偉そうに書いていただけだからな。もしこの手の本がデカイ顔してヒット作になるような時代があるとすれば、自分の脳ミソで物を考えようとしないう意志薄弱な連中が増殖している事に他ならん。実に平和な事にな。つまり、我が保護者の様な英雄的人物ともあれば、既に知っている事ばかりだったろう？」

「まあ、ね……」

「嫌味！　皮肉！　最早全方位にケンカを売っているとしか思えないニーナの嫌味と皮肉を、男は右から左へと聞き流してしまふ事にした。残念でもないし当然の判断である。変に聞いてますよと頷きでもしようものなら、更に危険かつ強烈な嫌味と皮肉が飛び出てくるのは間違いないのだから。」

「返事をしてはいけない。聞いてはいけない。見てはいけない。確かに、確かにニーナは可愛らしく美しい少女だ。しかし、皮肉屋で嫌味な女の子なのだ。彼女に良い顔をし

ようとしてはいけない。彼女はメスガキなんてカワイイものじゃなく、紅茶の香りがする乙女なのだから。

そう以前会った宮廷孔雀達——不死王の襲撃で半減したと聞く——を思い出しながら、男は役に立たなかつた——内容がと言うより、相手が悪いとしか言いようがない——本を本棚にしまいにかかる。これ以上イジられるのはゴメンだと。だが……悲しいかな。紅茶の乙女が逃してくれるはずもなかつた。ニーナはイイ顔で男に問い掛けてくる。スカートに隠し持っていたナイフを突き刺すが如く。

「しかし、我が保護者が人付き合いに悩むとは……女かね？」
「……………まあ、そうだね」

「ほほう！ 女の悩み！ 我が保護者が!？」

これは傑作だ！ そうひとしきり爆笑した後、男の顔を覗き込みながら相手はどんなだ？ そのイケメンフェイスで落ちない女にどう思った？ と、尻尾をブンブンと上機嫌に振り回しながら、どこか煽る様に問い掛けるニーナ。……いや、さぞ面白そうに薄笑いを浮かべている辺り、煽る様というより、煽っているのだろう。しかも尻尾の動きすら抑えようとしない辺り、それを隠す気も無いときてる。

実年齢は不明なれど、見た目年齢は十五歳以下は硬い。そんな少女に笑われ、煽り散らかされてなお、青筋一つ立てない男は正に聖人君子の鏡だった。そろそろストレスで

ハゲるんじゃないかと心配になる程度には。

だが、幸いにもというべきか。男はうんと小さく頷き、反撃を開始する。男の雰囲気が変わったのに気づいたのか、小首を傾げる少女に対して。

「ニーナ」

「なんだい？ 我が保護者よ。今は気分が良いから十七文字以上でも問題ないぞ」

「友達、居ないよね？」

「……………ケンカなら買うが？」

瞬間湯沸かし器！

気分が良いと言っていたのはどこへやら。ニーナは秒速でファイティングポーズを取り、冷やかな視線をぶつけてくる。ポーズこそ素人丸出しの構えだったが、しかし、一撃必殺の絶対零度の視線と合わされば、私不機嫌ですと示すには充分なジェスチャーだった。つまり、野郎ブツ殺してやる、と。

——いや、邪教の輩に囚われていたんだ。目の間で友達を殺された可能性もある……それを思えば、このぐらいの反応は可愛いもの。むしろ今のはこちらの聞き方がマズかったな。男はそう内心で反省し、目を閉じて改めて言葉を探す。何か丁度いい塩梅の伝え方はないものかと。

……そうやって相手の事を——今回は殆ど勘違いだが——おもんばかり、反撃の手を

瞬時に停止してしまうのは男の美德であり、苦勞人が苦勞人である所以だった。

だから、というべきか。ニーナの様な性悪に付け込まれるのだが。

「にしたって友達、友達だつて!! 我が保護者ともあろうものが随分と曖昧な問い掛けをしてくれるものだね? 友達、友達? 友達だ?! まずはその友達とやらの定義を決めてくれないかね? そうしないと何を話す事も出来ん。一回会ったら友達かね? 話が弾んだら友達かい? それとも秘密の共有したら友達だとても? ……それが上つ面の、社交儀礼かも知れないのに?」

「あー、うん。そうだね?」

「全く、二度と聞かないでくれたまえよ。そんな曖昧な問い掛けは」

やれやれだ。そう半笑いで大げさなジェスチャーをするニーナに曖昧な領きを返しつつ、男は確信を得ていた。昔の自分に似た一面があるニーナにはやはり、友達が必要だろうと。自分がかつてそうであつた様に。

男はこれこそが少女の為になると確信して、古い知り合いに連絡を取る事にした。確かニーナと同じ年頃の娘が居るはずの、貴族の知り合いに。……クソガキは貴族社会に揉まれて苦勞すれば良いとか、そんな意趣返しの意味は、あんまり無かつた。

魔女と呼ばれた少女 3

五月 十日

春も二ヶ月目がスタートして十日。私は流刑罪を受け、地獄の只中にあった。

いや、これを地獄というのは生温いだろう。しかし……私からすれば地獄も同じだ。何せ女子の扱い方なんぞ勉強した事がない。ましてやお貴族様のお嬢様の扱い方？ まだツチノコを探して飼えと言われた方がマシだ。

お我が保護者よ、魔法戦士よ、そんなに一方的に喋られたのが嫌だったのか？ 仕方ないじゃないか。私は口数が多くて、そつちは少ないのだから。それとも前に戦闘狂扱いしたのが気に食わなかったのか？ 仕方ないじゃないか。事実なのだし。

いや、それともあれか？ 奴がプレイボーイだから気づかなかったのか？

うん、あのイケメンフェイスだ。さぞ女性に言い寄られただろうしな!! 貴族令嬢の扱いだってお手の物だろうね……私は違うが!!

………ん、今気づいた。同性じゃないか？ 私。

五月 十一日。

大人連中の目論見がそうと分かれば、なるほど。確かに道理だ。

今の私は少女の身であり、あちらもだいたい同世代の少女。身分の差を除けば上手くいかないと考え理由が無い。むしろ同性同世代なのだから、友達として上手くやれるだろう……そう考えるのが普通という物だ。

ましてや、あちらのお嬢様が独特の雰囲気をもとう不思議ちゃんともなれば、むしろ私の様な……というより、魔法戦士の様な武芸者の紹介を受け入れたのは素晴らしい決断力だとすら言える。普通の友達——要するに貴族仲間だ——と上手くいかないなら、普通ではない奴を連れてこようと。それ自体は悪くない考えだろう。変人には変人をぶつけるんだよお！　と言わんばかりのそれは、実際正しい。常識や慣習等の古臭い考えに縛られない切り替えは、いつそコペルニクスの転回とすら言える。

私の中身が中身でなければ。

我が保護者たる魔法戦士にすら——妙な心配をされたくない為に——話してないが、私は男なのだ。少女の身体に思うところは山程、それこそエレベストよりも山程あるし、実験体の身体を少女型にしようとか言い出した奴を見つけ次第、マリアナ海溝の奥底に放り込んでやりたい程度には忌々しく思っている。

私は男なのだ。誰が何と言おうと、身体がどうであれ、それにどれだけ慣れようとも、

私は男だ！ その認識を変えるつもりはサラサラない。

とはいえ、期待された以上は誂んでみたくなるのが人情という物。それがどれだけ困難であれ、一応道理が通っている以上は、余計に。

そう思い立つたが吉日。早速お嬢様のご機嫌を伺おうと思つたのが……まあ、そう上手くはいかない。放り込まれたお屋敷の本を読み漁りながら勉強を積みつつ、それとなく様子を探ってみたが、あれは、中々に根が深そうだった。

一言で言えば人間不信。もつといえ迷子、さもなくば諦めか。一見すればただのぼわわした不思議ちゃんだが、その根底にあるのは相当に暗い物だと見た。

見た目こそ美しい貴族令嬢——白髪赤目のアルビノ系美少女——だが、ぼんやりと空を眺めて……二時間、全く微動だにしないのは明らかに異常だというべきだろう。

あれを友情的な意味合いで攻略するくらいなら、まだフランスのマジノ線を攻略した方がマシだ。

あちらはアルデンヌの森という——方位磁針が役立たずになる天然の迷いの森だが——迂回ルートがあるのだし。

五月 十二日。

お嬢様に挨拶する事もせず、部屋に引きこもってプレゼント作戦を考案してみたが

……実行前にボツになった。

貴族令嬢である彼女が高価な物を贈られ慣れているだろう事は明らかで、それであらなっているという事は彼女の欲しい物はそれではないという事なのだから。やるだけ無駄……いや、むしろ有象無象とのレッテルを貼られかねない分、やるだけ損まである。色々と、考えはあるのだが……ハッキリ言おう。

暗礁に乗り上げつつある。

それは分かる。分かっている！　だが……解決の一手が見えないのだ。どうにもならない。

しかし、だからといって諦める訳にもいかない。期待された以上、早々に諦めるのは格好がつかない！　私にも男のプライドというものがあるのだ。簡単に諦めたくはない。

とはいえ、何かヒントが欲しいのも事実。日記でも読み返し……

マジノ線。森。迂回ルート。……ふむ。

五月 十四日。

ドイツの技術力は世界一イイ！　できんことはないイイイ——ツ!!

私としたことがすっかり忘れていた。要塞というのは迂回してしまえば良いのだ。

無理に攻略する必要はない。ドイツ軍がマジノ線を迂回して連合軍を叩きのめした様に（後日ダンケルクされたけど）

そう、要塞を迂回し、その上で別の戦略目標を叩くなり、包囲するなり、外堀を埋めるなりすれば良いのだ。それこそ、徳川家康が大阪城を攻略した様に（大軍で囲んだ割りに苦戦しまくってたけど）

即ち、お嬢様の正面攻略は諦め、一旦迂回。

別の手薄な場所を攻略した上で、お嬢様の外堀を埋めて外交的勝利を得る。……これだな。

やはり知識は力なり！

五月 十八日。

ジジイが、手間かけさせやがって。（。ヾ。）、ペツ

お嬢様を一旦迂回した私は、お嬢様の父上を攻略しにかかった。別に身体を売った訳じゃない。お嬢様がどうしてあんなったのか？ その事情背景を聞いただけだ。

……聞いただけなんだがな。まさか、まさか、親バカとは。

私としては三行で説明してくれば充分だったのだが、あのボケジジイ、これ幸いと聞いてない事まで話し出すのだ。あっちへフラフラ、こっちへフラフラ、当たり前前の様

に脱線した挙げ句、止める暇もなく暴走し始めるおかげで、知りたい情報を取得し終わるまでに三日も掛かってしまった。落城まで三日か……随分硬い要塞だな？ うん？

それともあれか？ ちゃんと十七文字以内で説明しろと指定しなかったのが悪かったのか？ 悪かったんだらうな……反省だ。

差し当たり、あのポケジイにはもう話を振ってやらん。

雇用主だろが知った事か。無視だ。無視。労働者をナメるな。革命起こすぞ。……どうしてもというなら、隠居先に自分だけ帰った我が保護者でも捕まえててくれ。私は嫌だ。

五月 二十日。

無学は神の呪いであり、知識は天にいたる翼である……かの劇作家は上手い事を言った。正にその通り。知識は力なり。蛇にそそのかされて知恵の実を食ったのは伊達じゃない！

初日に挨拶らしい挨拶が無かった——疲れてるだろうからと部屋に即刻放り込まれた——せいで、先日までお嬢様の名前すら分からなかったが、今や彼女の名前も明白。彼女のフルネームはレナ・G・S・フューリアス……途中略されてるじゃないか！

本名が分からんぞ……!?

名前は明白だと言ったな? アレは嘘だ。

しかも面倒臭い事に、イギリス系とドイツ系の合わせ技……いや、フランス系も混ざってるのか? いや、いや、考えるだけ無駄だな。というか、私の翻訳が間違っている可能性もある。細かい事は気にするまい。

ただ、略されてるGやSは母親や姉、あるいは親戚の名前を受け継いだ物である点は注意しなければならぬだろう。

情報提供者のジジイはボカしていたが、恐らく既に故人だからな。レナお嬢様の場合、仲の良い親族が二人死亡している訳だ。しかも安らかに大往生した訳ではなく、十中八九非業の死を遂げて。……トラウマスイッチが多すぎるぞ。地雷原か?

五月 二十一日。

チヨロいものよ。

いや、ゴメン。全然チヨロくないわ。そもそも仲良くなれたのかの判断が分からん。どこからが友達でどこまでが友達じゃないんだ? 友達の定義を教えてください、頼むから。

というか、そもそもだ。私は人に好かれるタイプでは絶対ないし、誰かと友達になる

なんてのは鼻っから不可能じゃないのか？ 息を吐く様に嫌味と皮肉を言う男……今は女だが、そんな奴が話し掛けようものなら問答無用で嫌われるだろう。普通は。当初の作戦なんざ、出会って五秒でどこかに家出しやがったし。

ただ、レナ嬢の反応は悪くなかった気が……ゴメン、やつぱ分からん。友達が居た記憶が無い。レナ嬢はずっと微笑んでいた様に見えたし、暫く話した後にはニーナは静かなんだねって言われたんだが……いや、あれは皮肉か？ 皮肉だな。私は普通に煩いからな。皮肉かあ……（・ω・）

いやまあ、皮肉でない可能性もあるにはあるのだ。何せレナ嬢は不思議ちゃんだからな。悪い子では無いし、頭の回りはむしろ速い気がするのだが、独自の世界観と判断基準を持っているというか……まあ、ともかく、あれだ。

まだチャンスはある。

天文学的確率だろうと、勝ち目がまだあるなら挑まざるを得まい。……あれが皮肉だったら？ さっさと撤退するさ。というか明日はそうなるだろう。それが普通というものだ。

ただ、それでも……いや、まさかな。今更何に期待してるんだ。私は。追記。

最近、この全自動羽ペンが顔文字を出力するんだが……どういう仕組みなんだ、これ

は。

五月 二十二日。

意外な事になった。レナ嬢が今日も話を聞いてくれたのだ。しかも私にお願い事までしてきた。何でも魔法を教えて欲しいらしい。

ふうん？ 師匠という訳だ。宜しい。

待つてろよ。今すぐ、一夜漬けで教材を用意してやるからな……！ (・ω・)

五月 二十三日。

血が欲しい。人の血が、欲しい。

マズイな。今日のレナは一段と美しく……そして美味しそうに見えた。見えてしまった。

自分が人外なのだと、自覚させられる。

間違つてもウツカリ襲いかかる訳になるいかな。あんな良い子に、そんな事は。

駄目だ。我慢来ん。

屋敷に隣接している林に狩りに行こう。小鳥ぐらいは居るはずだ。

五月 二十四日。

今日の私はちゃんと笑えていただろうか。

五月 二十八日。

弟子が優秀過ぎる。

このペースで教えてたら一ヶ月もしないうちに追い抜かれかねん程だ。以前からレナの事を不思議ちゃんだと言っていたが、訂正する。あれは不思議ちゃんじゃなくて、ただの天才肌だ。天然が入っただけの天才だ。普通に頭が良いぞ。あの子。

たまに会話が飛ぶし、平気で省略言語を放ってくるが……まあ、あの程度は天才肌あるあるでしかない。悔しい事に。

全く、あれで友達が出来ないのが解せない……いやまあ、IQが20違うと会話が成立しないとは言われてるからな。あの子のIQを130だと仮定しても、最低110。レナが相当な無理をしない限り、大抵の人間とコミュニケーションが取れないのは確かだ。あれではお互いに嫌な思いをするのがオチだろう。

そして何より恐ろしいのは、レナはまだ全能力を発揮していない事か。つまり、私のIQ130の見立てすら低い可能性があるのだ。レナの知能はIQ換算で140か、それ以上……余裕でメンサ会員になれるレベルだろう。少なくとも、私以上は確定だ。間

違いなく。

……仕方ない。レナに頼まれていた魔法の授業を放棄する様で悪いが、今度君主論でもブチ込んでやろう。それと孫氏と、後は各種戦術理論もオマケしてやる。それでも駄目ならアニメの話も持ち出して時間稼ぎだ……！ いや、まだ負けたくないというか、追い抜かれたくないのもあるんだが、そんな頭の良いレナ嬢に難しいところは教える程熟達してないからな。ちよつと、ちよつとだけ時間をね？ うん、ぷりーず。

まあ、素直にハラキリした方がいい気もするけどね。
負けましたと。

五月 三十一日。

戦場に行く事になりました。

どうしてこうなった???

魔女と呼ばれた少女 4

レナ・グレース・シャーロット・フューリアスという名の少女には友人が居なかった。いや、正確には、心を許せる友人が居なかったというべきだろうか？ 由緒正しき騎士の家系であるフューリアス家ただ一人の娘として恥ずかしくない様に、当主である父親の紹介で「お友達」は増えるものの、それらが本当の友人ではない事ぐらい少女にも分かっていった。

上辺だけ取り繕って媚びへつらい、その裏で陰口を叩かれれば誰だって分かる。あの人は友達じゃないと。

けれど、レナは彼ら彼女らを悪いとは言えなかった。ましてやフューリアス家に逆らう者共として処罰する事なんて出来るはずもない。

だって悪いのは、自分だから。レナが変だから、普通じゃないから、「お友達」と友達になれないのだ。……少なくとも、レナ自身はそう思っていた。自分が悪いと。

ニーナに言わせれば、不思議ちゃん。

ふわふわ、ぼわぼわ。お空に浮かぶ雲の様に、あるいは空を飛ぶ鳥の様に、掴みどころのないボンヤリとした女の子。それがレナという少女だ。世間知らずの箱入り娘と

言えばそこまでだが……彼女のそれは、何らかの異常を疑わざるを得ない物だった。

空を見上げたまま半日を過ごしてしまう事もあれば、声をかけても返事が帰って来る方が稀で。そもそも聞こえてすらいらない様子を見せる。

ただボンヤリと。まるで縁側でお茶をすする老人の様に、微笑みながら、あるいは無表情で、日長一日じゆうそうしているのだから……彼女のボンヤリ具合はただ事では無かった。

………何も、レナは好きでボンヤリしている訳じゃない。

ただ、聞こえるのだ。意識をハッキリさせていると、地の底からおぞましい声が、頭の中に響いてしまう。死者の声が、亡者の声が、頭に響くのだ。

だから、レナは心を浮かばせる。ふわふわ、ぼわぼわ、ぼんやりと。意識をハッキリさせたら、怖い何か聞こえてしまうから。もしそれを乗り越えて無理に覚醒し続けたとしても、今度は人の心の声が聞こえてしまう。聞きたくもない罵声の音が。

……だから、だからレナはボンヤリと日々を過ごすのだ。心に蓋をして、何も聞こえない様に。感じない様に。

誰かに相談した事は無い。だって、レナが悪いから。いつだって、レナが悪いのだ。聞こえない音や光が見えるのは、レナが悪い。

お友達と仲良くなれないのも、レナが悪い。

お母様がレナを産んで死んだのも、レナが悪い。

全部、レナが悪い……全部、全部、全部。レナが悪いのだ。レナが……

「お嬢様だというから常々警戒していたが、なんだ。やつぱり陰気だね。レナ嬢。カビが生えているかのような陰キャっぷりじゃあないか。ここだけ陰陽のバランスが崩れている気がするよ。気持ちの良い陽射しが差し込む図書館の一角、暖かい一等地だというのに、その住人は随分と曇天模様じゃないか？ うん？」

「……………誰？」

「誰、か。それは哲学的な問いだったりするのかい？ レナ・G・SⅡフューリアス。あるいは、君は私の名前を聞いているのかい？ もし後者ならば、答えは一つだ。レナ嬢。私はニーナ。私の名前はニーナだ。二十七番目でニイ、ナ。良い名前だろう？ 自分で付けたんだがね」

「……………二十七人兄妹、なんだ。凄い」

「いや、違うが?」

不思議ちゃんめ。そうやれやれだと大げさなジェスチャーを披露してくるニーナ……レナと同じくらい黒い髪の少女は、初対面だということにかなり失礼な奴だった。無礼だと言ってもいいだろう。

けれど……

——静かな人だつたな……

彼女との出会いを思い出して、それでもなおレナはニーナを静かな人だと言う。どう考えても騒がしいニーナを、静かだと。

その理由をレナ本人に聞いたところで、マトモな答えは帰つてはきまい。本人ですらなぜだか分からないのだから。ただ……ニーナが近くに居たあの瞬間だけ、世界から煩さが消えたのだ。まるでニーナがナニカを吸い取ってしまったかの様に、誰かの声も、ナニカの光も、等しく消え去っていた。ピタリ、と。静かになつてしまつたのだ。

それに比べれば、ニーナ本人の煩きなんて可愛いものでしかない。……レナは、あれ以上に煩い世界に居たのだから。

——それに、優しい人……

そのせい、というべきか。あれ程罵られたというのに、レナはニーナの事を嫌つてはいなかつた。

あるいは、心の声が聞こえたからかも知れない。突然の静けさに思わず覚醒してしまつたレナの意識が捉えた心の声は、驚く程優しかつたのだ。口ではアレコレ言いながら、そのくせ心の中では純粹に少女を案じ、考えていた。今までの「お友達」とは全く真逆。……そう、レナはニーナの声を聞いたのだ。本人すら自覚してない矛盾を。確かに。

「全く」

「ニーナは……静かだよ」

「……ん？ ……いや、煩いだろう。どう考えても。まあいい」

「魔法……」

「そうとも」

「私も」

「レナ嬢が？」

それから、毎日ニーナはレナの元へ。

別れ際にちよつとしたお願いをしたのが良かったのだろう。

色々あった。

後日、領地に侵入した亡者の軍団を撃退しなければならぬ。

何も心配してはいなかった。

魔女と呼ばれた少女 5

神は言いました。右の頬を殴られたら、お返しに鉛玉をブチ込んでやれと。……いや、うん、違うのは分かっているのだが、つまりそういう事だ。

殴られたら殴り返す。そうしなければ奪われるだけならば。

それは、分かっているが。

「だからって、なぜ私に……」

控え目なサイズであるらしい石造りの砦の上。見晴らしの良い場所に突っ立っている私は思わずそうボヤいてしまう。どうしてこうなつたと。

いや、それも分かっている。我が保護者の代わりだ。本来ならアイツがここに立つて戦うところを、アイツの子供なら出来るだろうと送り込まれたのだ。直ぐに送り込める手頃な戦力として、私が。

——出来るか出来ないかといえば、出来る。だが、だが……！

だからといって進んでやりたがる奴が居るか！ 迫り来る亡者の群れを撃退、ないし殲滅する……言うだけなら簡単だろう。だが、やる側にもなってみろ！

うじゃうじゃと列を成す亡者、つまりはゾンビやらスケルトンやらの群れに立ち向かう？ 私には神話の英雄じゃないだぞ!?

そりや多少なり魔法は使える。使えるが、私に近接戦闘の心得は無い。もしゼロ距離の殴り合いにでもなれば瞬殺されるのが目に見えているのだ。となると射撃戦。それも一方的な、アウトレンジ攻撃で決めるしかないが……それが実現困難である事は、おびただしい戦史が示す通りだ。アウトレンジ攻撃で決着がついた戦争なんぞ、ただのいつとして存在しない。

「無理だ。遠距離攻撃だけでは、私の魔法じゃ……クソツ、死ぬぞ。皆死ぬ……!」

砦の下。あるいは外壁の上。既に配置についているのは、この砦に配属された騎士や民兵達。手に剣を、槍を、弓を手に持った彼らは私よりも前に位置している。

もし亡者の群れが砦に取り付く様な事になれば、真っ先に彼らが犠牲になるだろう。私の不手際のせいで、人が。

——そうだ、ここに居るのは私だけじゃない……!」

最悪の気分だ。まだ私一人送り込まれた方が気楽まである。

ケツをまくって逃げ出したって良いし、勇敢にも討ち死にしてやるのも……まあ、責任を感じないでいい気分楽だろう。だが、ここには人が居るのだ。人が、私以外の人が。私の不手際一つで、何十人という人が死ぬ。不手際が二つ、三つと積み重なれば

………考えたくもない。

「安全と平和を守りたければ、連中を追い返すしかない。しかないが……クソツタレ！」
責任が重すぎる！

さつき無理矢理食べたスープを吐きそうになりながら、私は身の丈程もある魔法の杖にすがって立ち尽くす。崩れ落ちない様に、前だけを見て。

そうして……どれだけ、砦の前の荒れ地を見つめていただろうか？ 草はハゲ上がり、死体と武器が散乱する古戦場。寒々しいそれを眺めていた私の背後で、ふと足音がする。小さな、可愛らしい足音が。

「レナか？」

レナだろうな。そんな事を思いながら振り返ってみれば、レナだった。

「怖い？」

「」

「ん」

「子供じゃないんだが……」

頭を撫でてくる

逃げろと、そういうべきだろうか？

——いや、覚悟を決めた者にそれは失礼か。

共に戦おう。

「そうせよと命じてくれ。それだけでいい」

軍団戦